

TSして生徒の身長以下
になっちゃった教師の
話

XOUND

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある高校、奏坂学園に勤務している教師である舞原音は生徒の一人に無理矢理食べさせられた飴によって朝起きたら生徒より身長の低い幼女になってしまった！幼女となった音先生は生徒達に可愛い服を着せられ、頭を撫でられ、そしてしまいには精神退行まで・・・

原作はオンゲキですが初出のキャラクターには説明を入れるのでオンゲキを知らない人も読むことができます。

目次

FLUFFY FLASH	73	オンゲキ全域★アカネサマ?	79
Mini skirt	65	最っ高のエンタメだ!!	87
Lift Off	57	レイレイイ イ超絶最強アメちゃん	87
YURUSHITE	46	Mix	94
an	37	エータ・ベータ・イータ	101
Catch Me If You	C 27	おやすみのうた	110
fruits☆	27	まつすぐ↓↓↓ストリーム!	121
トリドリ⇒モリモリ! Lovely	12	心	133
Viyella's Tears	1	Here We Go	144
Main Story		Splash Dance!!	156
ウキウキ☆Candy!		AiC	169
		Girl's Party Plan	176
		et!	

275	O p. I 《fear—TITAN—》	
263	V i y e l l a ' s S c r e a m	254
	W h a t c o l o r . . .	242
	G A M E I S L I F E	220
	S i d e S t o r y	211
	H E A D L I N E R	204
	夢を叶える場所	
	G . E . K . I .	196
	M e m o r i e s o f O . N .	187
	G r a n F a t a l i t .	
	ゼーレンヴァンデルング	

	R u l e r C o u n t , Z e r o	362
	343	
	D e s p e r a d o W a l t z	333
	進め！マイウエイ！	325
	夜明けのストリング	315
	ポケットからぬりつぶせ！	306
	ジャンヌ・ダルクの慟哭	297
	P s i s M i x "	287
	I u d i c i u m " A p o c a l y	
	ゲーミングポラーベア	

Main Story

ウキウキ☆Candy!

これは、遠いようで近い未来の話

現在視点からの未来とさええば、空飛ぶ車があつたり生活を豊かにするロボットがあつたり、いわゆるSF（サイエンス フィクション）というジャンルで我々は未来の予想図を描き楽しんでいる。

じゃあ「実際未来では未来人はそんな魔法のような生活を送っているのだろうか？」と聞かれれば、案外そんなこともなく、割と現代と似たような生活が未来でも繰り広げられている。

技術革新はあつたとはいえ、今日も学校へ歩いて登校する生徒がいて、駄菓子屋でお菓子を購入する子がいて、ゲームをして徹夜してしまう子がいて、生活面ではそこまで現代とは変化はない。

では未来と現代での決定的な違いはなんだろうか。

その答えとなるものが「オンゲキ」である。

オンゲキとは、音楽とスポーツを融合させた次世代競技のこと。音楽の流れる仮想ステージ上で対戦相手と疑似的な打ち合いのバトルを行い、その得点を競うという競技である。音やリズムに合わせて身体を動かすことから、音楽ゲームの進化系とも呼ばれ、

競技者は相手を打つような所作から「シューター」と呼ばれている。

これは、そんなシューターの卵を育成する学校である「シューターズスクール」の一つである奏坂学園の教師として勤めている舞原 音（まいはら おと）の話である。

音「よし！じゃあチャイムもなったし区切りもいいとこまできたしで今日の授業は終わろうか！お疲れ様！」

俺の名前は舞原音。この奏坂学園で数学とシューター基礎Ⅰの授業を担当している教師だ。あと2―Bの担任でもある。

いやー教師になるまでは本当に大変だった。高校の時にオンゲキに憧れ教師を目指そうとしたはいいが、教師というのはそんな思い一つで着任できるほど甘くはない。普通の高校教員免許に加えオンゲキに関する試験や音楽系統の試験e t c . . . とにかく努力の甲斐もあってこの学校で教師として務めることができています。

さて、今日の授業は終わったわけだが今俺が向かっているのは自分の教務員室だ。生徒達は今放課後の時間なわけで思い思い好きにやってるが教師はそうはいかない。もう少しだけ仕事の時間が続く。そんなわけで、「おーい、マイマイー」・ ・ ・厄介な人とエンカウントしてしまったようだ。

俺をマイマイなんて洗濯機みたいなあだ名で呼ぶ生徒は一人しかいない。

音「どうした？藤沢さん」

藤沢柚子「マイマイ丁度いいところに！見て見て！これ、なんだと思う？」

今俺が会話している生徒がこの厄介な生徒である藤沢 柚子（ふじさわ ゆず）
うちのクラスで一二を争う問題児だ。何が問題かって？実は成績が問題とかそういうことではない。いや、前はいつも補修の常連だったが今はそういうことは特にないのだ。ではなぜ、この生徒が厄介なのか。

それは、「よく彼女が何やら怪しげな味のお菓子を仕入れてきては皆に配り歩いている」とか、「割と精神年齢が小学生ではないかと疑ってしまふような発言を少々する」という理由がある。

いやー、先月三年の生徒が涙を流しながら「お願いだから柚子からハバネロたこ焼き味の飴を没収して下さい！」って言われたときはマジでびっくりした。先輩に対してとんでもないことしてんなお前ってなった。勿論呼び出した。んでもって危険な味の飴は他の人に渡すときはちゃんと忠告するようにって言つといた。

さて、そんな藤沢さんだが今俺に見せてるのは・・・これはガラス玉？

音「ガラス玉か？これどこで拾ったんだ？」

柚子「ぶつぶぶ！これは、飴ちゃんでした〜！」

音「めつっちゃ透明で透き通ってるが・・・これ本当に飴なのか？」

柚子「そうそう！手に入れるの苦労したんだよー！で、マイマイ授業終わって疲れて

るでしょ？はい！あげる！」

音「うわあ！ありがとう！……つてなるか！お前この前もわさびメロンクッキーなるもの配ってたの聞いたぞ?! 飴じゃなくてクッキーならいいって問題じゃないからな!?!そしてこの飴何味だよ！そりゃ警戒するよ！」

柚子「大丈夫！美味しいと思うよ？」

音「なんで疑問形なんだよ！」

柚子「だって柚子もまだ食べてないもん」

音「いや俺担任であつて飴の毒見係じゃないから！」

柚子「はい！どーぞ！」

音「人の話聞いてないね？俺食べる気ないよ？」

柚子「しよぼーん……じゃあしかたないな」

音「ああ。諦めてくれてありがとう!?!。」

柚子「おおく！マイマイのお口にダイレクトシユートを決めてしまおうとは……さすが柚子！」

音「……割と美味しい。けど喉に詰まるかと思つたから金輪際やめてくれ」

柚子「善処します」

音「それやめる気ない人のセリフだね……取り合えず俺はもう行くから。」

柚子「じゃーねー！」

いやーさつきは本当にビビった。話してる途中の丁度口が開いたタイミングで飴を投げ込んで来るなんて。まあ美味しいからいいか。正直この飴小さいから喉に詰まることなんてないだろうし。

さてこの量の仕事なら1時間もすれば上がれそうだな。よしやるぞ！

さて、無事仕事を終わらし家に戻ってきた舞原でございます。仕事は今日のはかるいものだったはずだけど金曜日ということもあって疲れがきてるのかもしれない。その証拠に車運転していてなにか違和感を感じたしハンドルいつもより重いし。

体の調子が悪そうな日はさつきと風呂に入ってご飯食べて寝るに限る！

風呂から出てきたわけなんだが・・・体がいつになく重い。あと熱もあるのか体温計で熱を測ったら37.8°の熱があった。あと普通に立ってるだけでもふらつく。もしかしなくてもかなりヤバイ状況なのかもしれない。ベッドに倒れこむ。

そうだ。今の時間は病院やっていないけど明日もしものことがあつたらいけないからお隣さんに電話しておこう。

音「もしもし？ 柏木さん？」

柏木咲姫「はい。柏木です。えっと、音先生であつてますか・・・？ なんだか声がおかしいような気がします」

今俺が電話をかけている人物は柏木 咲姫（かしわぎ さき）

俺の家の隣に住んでいて奏坂高校の三年生だ。模範的な生徒の見本のような存在でしつかり者のため、学校内ではかなり助かっている存在だ。因みに中学二年生の妹がおり、土曜日には妹の家庭教師も担当している。まあギブ&テイクの関係なのかもしれない。

音「声……？まあ体の調子がおかしくてな。明日は無理かもしれない。熱を測ったら37.8。あつたんだ。体もふらつくし、多分ヤバイ状況かもしれない。声もその弊害かもしれない」

咲姫「大丈夫なんですか!?病院は……今はやってないですね。明日行くんですか?」

音「それについてなんだが、もし明日10時に電話がなかったら部屋でぶっ倒れてい
る可能性があるからその時は俺を病院まで運んでほしい。」

咲姫「え……ええ分かりました!お大事に。因みになにか心当たりのある原因とか
はあるんですか?」

音「正直藤沢さんからもらった出処不明の飴ぐらいしかないな。」

咲姫「絶対それじゃないですか……わかりました。明日10時に電話がなかったら
家に入りますからね。鍵は開いてますか?」

音「ああ。開いてるよ。すまないな。頼んだ。ごめん、俺はもう寝る。」

咲姫「ああちよつと!?!……切れたわね。はあ……美亜ー!音先生病気っぽいから
明日は多分無理そうだって!」

電話が一方的に切られてしまった咲姫は取り合えず妹の美亜を呼んで先の電話の件

を伝えることにした。

美亜「はい！あ、そういえば咲姫ねえ、病気の原因って聞けた？」

咲姫「多分柚子の飴が原因らしいわ」

美亜「ええ・・・？柚子先輩、一体何味の飴を渡したの・・・？」

咲姫「そこまでは聞けなかったわ。それで、もし10時に音先生から電話がなかったら、家に突入して病院に連れて行ってほしいって言われたから、明日出かけるかもしれないわ」

美亜「待って。咲姫ねえ一人で病院行くつもり？」

咲姫「・・・多分道に迷わないはずよ！」

美亜「三年生にもなつて一人で学校もいけない咲姫ねえが何言ってるのさ・・・アタシも同行するよ。」

咲姫「ごめんね美亜・・・ありがとう」

柚子「そーいえば、この飴、なんか魔女っぽい人に貰ったんだけど、「人生が180°変わる飴」って結局どんな味したんだろー？また会えないかなー？」

Viyella's Tears

ピピピピピ．．．ピピピピピ．．．ピピピピピ．．．

音「ううん．．．ふああ．．．」

俺の一日はまず目覚ましを止めるところから始める。

ちなみに目覚ましは家に二個ある。一個はベッドで手の届くところに、もう一個はテーブルの上にある。一個目で目を覚まし、二個目で強制的にベッドから降りざるを得ない状況を作るってわけだ。そのため一個目の目覚ましは手の届くところに置いてある。そのため目を瞑っていても止められるのだが．．．

音「んんん．．．あれ．．．？」

何処にも目覚ましが無い。いつもなら一発で目覚ましの位置を捕捉して止められるはずなんだが．．．仕方ないので目を開ける

音「・・・？」

目覚ましがあつたのはいつもの位置だった。なんか化かされてる感じだ。まあ何処にもないということもなかったし、止めようとしたとき・・・

音「つつ?!?!?!」

なにか手がおかしい。こんなに俺の手は小さくない。なのに見えている手はまるで小学生のように小さな手をしている。一体何が起きている!?

何も分からないまま這いながら移動し、目覚ましを止めて、取り合えずベッドから降り、歩こうとした。だが、

音「うわっ!?!」

何かにつまずいた。ふりかえると足に引つかかっていたのは自分のズボンだった。

なんで、何もわからない。それにこえもおかしい。まるでしようがくせいの子み

たいだ。自分からこの声が出ているというじかくが持てないが、しかしじぶんの神経は確かにこのこえが自分のものと脳に伝えている。

体がふるえる。なみだが止まらない。突然りかいでできないことがなんども起きてのうが思考をきよひしているきがする。

音「ああああ．．．うううう．．．ぐすつ．．．ひぐつ．．．なんで．．．なにが．．．」

じぶんが一つこうどうを起こすたびにまちがったじょうほうを脳におくりこまれて
いるようではきけがする。

震えるあしを抑えなんとかかべづたいに立ち上がったが、いつも見ているしかいと違
う。なんで、おれはしつかり足をのぼして立っているはずなんだ。こんなけしきはちが
う。まちがっている。

音「うああ．．．っ?!?!?こ．．．これ．．．」

みてしまった。しかいにうつつたのはがらすにうつっているじぶん。

まるでこどもみたいなしんちょうで、かみはこしまでのびていて、がらすについたてはとでもちいさくて、かたてですまほをもつことすらむずかしいかもしれない。

これは・・・うそだ。まぼろしだ。しかいがゆがむ。せかいがまわる。ああ、これはきつとゆめ。いまからめざめるはず

音「ははは・・・ハハ・・・」

にこめのめざましがきこえた。うるさい。でもこんなあくむからめがさめるとおも
うといいのかもしれない。いしき とぶ。なにも、か がえら な

急に眼が覚めた。今は思考も明瞭だ。ただとても気持ち悪くて吐き気がする。声も絶対おかしい。さっきの夢は、現実なのかもしれない。

・・・理解はとてもしたくはないが。

音「あー・・・あー・・・ううっ・・・」

声を試しに出したがやつぱり耐えられない。

分かつてる。信じがたいがこれは現実であつて嘘や幻の類ではないことぐらい。で

音「っ?!?!
!?!?ハア・・・はあ・・・はあ・・・うう・・・げほっげほっ」

も、こんな事を急に突き付けられて、頭がおかしくなってしまうそうだ。兎に角動くことにする。一挙一動を取ることに違和感という違和感が体中に突き刺さり途方もない不安と言いやうもない吐き気に襲われるが、動かないとなにも始まらない。

まずはあの目覚ましを止めて、スマホを取って、時間を確認しよう。自分が家にいることから、少なくとも10時よりは早い時刻なはずだ。

音「・・・うそ・・・からだ・・・」

テーブルの上に置いてある目覚ましに手がギリギリ届かない。というより自分の身長がテーブルとほぼ同じになってしまっている。肩よりもテーブルが高いせいで、椅子に上らないととても目覚ましは止めれそうにない。

音「こんなの・・・こんなの・・・おれがなにをしたっていうんだよ・・・」

目覚ましは止めることに成功した。スマホで時間を確認しないと

音「え・・・うわあああ?!?!?」

スマホを手を取って、思わず放り投げてしまった。スマホを持った時、思わず重いと感じてしまったのだ。いつもパソコンとか教科書とか色々入っている鞆を持って出勤していた俺が、スマホを持って……

音「はあ……はあ……はあ……」

過呼吸気味だ。まるでマラソンでもした後みたいだ。冷や汗が物凄く出ている。濡れたシャツが張り付いて気持ち悪い

音「9時36分……とりあえずよかった……いやよくない！」

ひとまず安心したけど、10時までには柏木さんに電話しないといけない。こんな声で別人と思われるに決まっている。電話しなくてもどっちにせよ柏木さんは家に来るだろう。そしたら俺はどうなってしまっただろう？

また涙が溢れてきた……。この体にされてから、感情の許容量が狭まっている気がする。情けない……。こんな姿……。誰にも見せられない！

音「でも……でも……でも！」

生徒から悩みを相談されたことがある教師だからこそ知っている。こういうのは誰でもいいから打ち明けて悩みを共有できる人を作ることと気持ちはずっと楽になるということを。震える手でスマホを触る。メールで現状を伝えないといけない。熱は多分大丈夫だから病院へ行く必要はなかったとはいえ別の問題がでたことを。でもあと一歩の勇気がでない。

きつと自分は拒絶されることを恐れているんだ。相談できる相手が近くにいないからこそ、その人に拒絶されてしまったときのことを考えると心が押しつぶされそうになる。震える手で送信ボタンを押そうとするも、あと数センチで押せるのに、手が進まない。

だれか……助けてくれ……この苦しみから解放してくれ……

ガチャ

咲姫「音先生？入りますよ？」

音「っ!？」

ハツとして時間を見る。10時15分だ。決めあぐねているうちにいつの間にかこんな時間に経ってしまったなんて！まずい、早く隠れ

咲姫「音せんせ……い……誰？あなた」

音「うええ!!? えつと……その……」

頭が真っ白になる。咲姫に見つかってしまった。

いやだ。きよぜつされるかもしれない。しんじてもらえないかもしれない。じぶんのそんざいがこのよからひていされるかもしれない。にげなきや。でもあしがふるえてちからがはいらない。ちかづいてくる。にげられない。

だれかおれをしんじて。みとめて。なくさめて。かしわぎさんのことだっていえるから。おれだってしようめいできるから。だから。

咲姫「取り合えず落ち着いて。落ち着いたら話すのはゆっくりでいいから」
音「う……うん……」

背中を撫でられると気分が落ち着いて、暖かい気持ちになってくる。止まらなかつた過呼吸も、冷や汗も、落ち着いてきた。今なら、話せる気がする。

音「その……聞いてほしいんだけど、」
咲姫「うん」

音「そ、その、」

咲姫「うん」

音「音は俺なんだ！朝起きたら熱は冷めたけどこの姿になってて・・・それで、誰にも相談できなくて、不安で怖くて・・・」

咲姫「信じるわ」

音「へ？ほ・・・本当に・・・？」

咲姫「ええ。寧ろ納得したわ。だってぶかぶかだけどその服は音先生のものだし、そのメール。まだ送られていないそのメールは私に現状を伝えようとして送ったメールよね？何より、最初にパニックになつてた時にうわ言のように私の情報とか話してたじゃない。子供の姿で女の子になつちやつているけど、音先生だって分かるわ」

音「信じて・・・ありがと・・・ぐすつ・・・」

咲姫「いいのよ。それと泣くのを我慢するのは良くないわ。ほら。よしよし。」
音「ひぐつ・・・うう・・・うわああーん!!!」

咲姫「それにしても、さっきの先生可愛かったわよ。こう、なんとなくか、小動物みたいで！」

音「やめてくれ！気が動転してたんだ！俺は俺だ！忘れてくれ！」

咲姫「その声で言われると説得力が・・・やっぱり可愛いわね」

音「可愛いなんて言うな！俺は男なんだ!!!」

咲姫「ジタバタしてる先生・・・写真とっていい？」

音
「絶対
駄目
!!!!!!!
」

トリドリ⇒モリモリ！Lovely fruits☆

急に体が変わってしまったことで気が動転していた俺だったが、なんとか柏木さんのおかげで気持ちを落ち着けることができた。こんな現実味もないような事例を信じてくれた柏木さんには感謝しかない

咲姫「病院は行かなくてよくなったみたいだけど・・・これからどうするんですか？」
音「そうだな・・・まあ体は無事だったし取り合えず教材持って柏木さんの家まで・・・
うわっ！」

教材を取ろうと踏み出した俺だったが、転んでしまった。ぶかぶかのズボンにまた躓いたようだ。

咲姫「まず服が優先じゃないですか？美亜にきせるつもりだった服が沢山あるので、よかつたら持って行ってもいいですよ？」

音「本当か!?何から何まですまん。」

咲姫「いいですよ。教材は服を選んだ後でいいですし、じゃあ行きましょう!」

そういうが否や、唐突に俺の体が浮き上がる。

音「ちよっ・・・!?待って!?なんで抱っこなんてされてるんだ!?!」

咲姫「だって今の先生歩くことすら難しいじゃないですか。その体に合う服を見つけるまでは、抱っこで移動です!」

音「待ってくれ!そのまま外歩くのか!?!恥ずかしいって!」

咲姫「家隣だから大丈夫ですよ。ほらほら落ち着いて」

音「頭なでるなあ!」

咲姫「まあまあ、ほら、着きましたよ。ただいまー」

音「ちよつと心の準備が!・・・お・・・お邪魔します・・・」

咲姫「音先生顔赤いですねー。じゃあ服を選んでくるので少し待ってて下さい。動いたら駄目ですよ!」

音「あ・・・ああ・・・分かったよ・・・」

いつも見慣れている筈の柏木家のリビングだが、今日はいつもと視点が違う。やっぱ

りこんな体になつたせいだ．．．だめだ、憂鬱な気分になつてしまひそうだ。こういう時は別のことを考えないと。

そういえば美亜は家にいるのだろうか。ん？あそこに見えるのは．．．

美亜「ニヤ——ベラス!!!なんて素晴らしい幼女なの?!?そう! 例えるならオレンジ!!!

清楚で上品なその小さな姿にはちよっぴり警戒心を込めた甘酸っぱい酸味!!!でもその酸味こそ人を魅了する魔性の香りの正体になる!!!

ねえねえキミ名前は?!?どこから来たの?!?咲姫ねえグツジョブこんなニヤーベラスなフルーツちゃんを連れて来てくれるなんて!もう我慢できない!いぎ、ティステイ——
——ング!!!」

音「うわ!!!あああ——?!?近づくな——?!?」

柏木咲姫の妹、柏木美亜（かしわぎ みあ）。

咲姫と同じく容姿端麗だが、趣味は盗撮、特技はスリーサイズ当て、そして日課は同級生へのセクハラというトリプルコンボを決める超変態女子だ。

音「来ないでくれ——!涎を垂らすな——!」

美亜「おっと、いけないいけない。でも大丈夫。名前も知らないオレンジちゃん。美亜ちゃんが、優しくにやふにやふして・・あ・げ・る♪」

音「ギャ——!?!?手をワキワキさせながらにじり寄るな——!?!?」

咲姫「ちよつと大丈夫!? 悲鳴が聞こえたけど・・・美亜?」

美亜「うげっ!? 咲姫ねえ!? せっかく可愛いフルーツちゃんをテイステイ・・・じゃなかつた。スキンシップを取ろうとしてただけなのに!」

咲姫「バツチリ扉越しに近づくなー! とか来ないでくれー! とか聞こえたわよ?」

美亜「にはやは・・・そんなことより! このハイポテンシャルフルーツちゃんは誰なの!? なんでアタシに黙ってこんな最高級のフルーツちゃんを家につれて来たの!」

音「ええつとそれなんだが・・・ちよつと離れてくれ! 目を爛々とさせて涎を垂らしながら見つめるなあ!」

美亜「ぐへへ・・・」

咲姫「仕方ないわね・・・よつと」

音「うわあ!? 俺をまた抱っこするなあ!・・・はあ」

咲姫「自己紹介しなくていいの? じゃあするまで服はお預けかしら?」

音「楽しんでるんじゃねえよ!・・・だ」

美亜「え? 声小さくて聞こえないよ?」

音「俺だ!! お前の家庭教師で隣に住んでる音なんだ!!」

美亜「・・・へえ。」

音「な・・・なんだよ。」

美亜「TSですか・・・それもまたニャーベラス・・・だからそんなぶかぶかの服でそんな口調だったのね。で、昨日の熱の原因もそれだったわけと。」

音「あ、ああ。察しが良くて助かるよ。」

美亜「そしてつまり・・・今は合法ロリであると！」

音「おい！極大解釈するな！」

咲姫「はあ・・・美亜はまったくもう・・・服も持ってきたから一旦試着してくれないかしら？」

音「分かつ・・・た・・・え？ちよつとまってその服」

咲姫「美亜に着せる予定だったけどいつも断られちゃって、音先生なら似合うかなって」

音「断られるの意味が違うだろ！だって、だってそれ・・・」

音「猫耳メイド服じゃんかあー！ー！ー！！！」

咲姫「巫女服やドレスなんかもあるわよ！」
音「よりによつて全部コスプレ物じゃん！」

柏木咲姫

学校では優等生な彼女だが、実は隠れオタクでコスプレイヤーである。妹の美亜に自

分の作ったコスを着せようとするもいつも逃げられるんだとか。
そして今、そんなコス魔の手が俺に迫ろうとしていた。

咲姫「さあ!今着ましよう!すぐ着ましよう!そして一緒にツーショット!あつ美亜も着ていいよ!」

美亜「ちよつアタシはノーセンキューだつてば!」

音「嫌だ!嫌だあ!?!やめてくれえー!」

咲姫「先生力弱くなつちやつたのね。よいしょつと」

音「うわわ・・・これ、ス・・・スカート!?!駄目だつて!わわ、下が開いてて・・・!」

咲姫「赤面して動けなくなつてるうちに上も着せちやうわ!美亜!手伝つて!」

美亜「了解!さあ音せんせーそのぶかぶかな服をぬぎぬぎしましよーねー」

音「へああ!?!やめろお!?!」

服を離させるまいと小さくなった手で力を込めて掴む。でも、

美亜「いっただきー!」

音「うわあ!返せー!」

咲姫「はい音先生の服はこつちですよー! うんピツタリ! 最後にこのカチューシャを付けて……はい鏡!」

音「こ……これが俺……つつつ!?!」

鏡に映っているのはメイド服を着て猫耳をつけられた自分。いや、自分がこんな格好をしているという事実には恥ずかしくて頭から煙がでそうだ。それに……

美亜「そういえば今の身長美亜ちゃんと同じくらいなんだねー! いや、ちよつとアタシのほうが高いかも?」

咲姫「くうー! こんなレイヤーいたら推すに決まってるわ! これは天性の美ね! 可愛い! 可愛いわ音先生!」

音「ちよつとお前ら遠慮というものを知ってくれよ! もう、耐えられないって……」
美亜「あつ座り込んだ」

咲姫「涙目でスカートを両手で抑えつつ床に女の子座り……無意識でこんな激烈コンボを決めるなんて……こんなの無理! 尊死しちゃう〜!」

音「もうやめてくれ……それ以上可愛いって言わないでくれ……おかしくなってしまう……」

咲姫「そんなこと言われてやめるわけないでしょ！可愛いわよ音先生！」

いくら表の顔は優等生とはいえ姉妹は姉妹、正直似た者同士で一度スイッチが入ると手が付けられない。

可愛いと連呼されて上手く思考もできない頭でそんなことを他人事のように考えるのだった。

Catch Me If You Can

人間は基本的に衣・食・住の三点が揃っていればなんだかんだ言っちゃっていいけると言われている。今こんな姿にされてガタガタになったこの三点だが、取り合えず衣に關しては解決した。いや、これは解決と言っちゃいいのかわからないが。

俺としては普通にサイズの合う服で良かったのに咲姫の出す服がことごとくコスプレ物であの後美亜を頼ったのだが美亜の服は貸してもらえなかった。「先生はそのメイド服を着て下さい！アタシの服を貸す気はないです！」って満面の笑みで言われたんだからしょうがない。

多分、いや絶対俺にこのメイド服をずっと着てほしいからいつてるんだらうけど悲しいことに今の自分は施されている身。着れる服が手に入っているだけありがたく、そこに文句を言っちゃ無理やり普通の服を奪い取ることはできないのだ。

そういうえば、咲姫のこと呼び捨てにしてるんだな？ああ、あれは……

咲姫「ねえ音先生！」

音「ん？どうしたんだ？」

咲姫「咲姫お姉ちゃんって呼ん」

音「絶対ヤダ」

美亜「咲姫ねえ流石にそれはレベル高すぎるって……でも、今この姿で咲姫ねえのこと柏木さんっていうの似合わないよね？どうせだし、その苗字+さんで人を呼ぶのやめたら？」

咲姫「そうよ！実際学校でも先生ツツコミとかしてくれてフレンドリーだけど名前を呼ぶときだけは何故か堅苦しいって言われてるし」

音「え？嘘俺そんな風に言われてるの？」

咲姫「まああくまで同じクラス内と友人に聞いた話でしかないけどね。でもその呼び方は変えた方がいいわ。私も美亜も柏木だし、今この状況で柏木さんって呼ばれるとややこしいもの」

音「そうか……じゃあ変えてみようかな。情報ありがとう……えつと、どう呼べばいいんだ？」

咲姫「それは勿論！咲姫おね」

音「咲姫さん」

咲姫「バツサリ切るわね……それが音先生の良いところでもあるけど。」

うーんでもさん付けじゃあまだ距離があるわ。じゃあ咲姫お姉ちゃんか咲姫って呼

んでくれないんだったら、私も音先生の呼び名変えちやおうかしら？音ちゃん？」

音「んなつ!?それは卑怯だぞ！」

美亜「でも、アタシ目線でも音先生って同年代にしか見えないんだよね・・・そうだし！これを機にアタシのことも」

音「嫌だ！」

美亜「なんで！アタシまだ何も言っていないのに！」

音「駄目だ！それ以上いくと教師の威厳が駄々崩れじやないか！100歩譲って呼び捨てまでだ！それ以上は無理！」

咲姫「仕方ないわね・・・美亜、今日のところは引くわよ」

美亜「はーい」

音「ちよつとまって!?今日のところはって何!?これ毎日されるの!?ねえ！何か喋って!?なんで不敵に微笑むだけなの!?!」

まあこんなエピソードがあつたわけで今は頑張つて呼び捨てで呼ぶようにしている。少し馴れ馴れしいような感じがして少々落ち着かない。まあ音ちゃんって呼ばれるのは何が何でも避けたいからなあ・・・。

さて、話がそれてしまったが衣食住の衣は一応達成できた。食と住なんだが、今の身

長から言うと、今の俺はキツチンを使えない。いや、踏み台を使えばなんとかなるだろうが恐らくこんな状態ではフライパンもろくに持てないだろう。

今のところ住に関して少し不便程度に収まっている。背が低くなったとはいえ、基本的には踏み台や背伸びをすれば基本はなんとかなるからだ。玄関の取っ手に手が届かないことに気づいたときはマジで焦った。自分で言うのもなんだが一人暮らしの家は幼児が暮らすには不便すぎる。そんなわけで今家の至る所に即席の踏み台が置いてある。今はそれで大丈夫だが長期的に見て少しづつ改善が必要かもしれない。

あと学校への説明のために資料作成もしないといけない。流石にメールでいきなり「朝起きたら女の子になりました」というわけにはいかないからだ。

起きた問題に対して何が出来なくなったのか、どんな支援を必要としているのか、といったことを纏めておく必要がある。いや、正確には絶対に必要というわけではないが、話し合いや対応が円滑に進む。

あつそうだと写真撮らないと。ということでもスマホを構える。

音「自撮りか。やったことないけど、難しいな。距離感がうまくつかめない・・・」

腕のリーチが変わったせいであまり撮れない。こういう時は三脚とかスマホを固定できる物が役立つのだが生憎家に三脚はない。というかあったとしても設置できるのだろうか。

音「仕方ないか」

というわけで家を出た。目指すのは勿論お隣の柏木家。インターホン鳴らして咲姫を呼び出す

咲姫「あら？音ちゃ」

音「音先生、または呼び捨てで」

咲姫「・・・音先生なにかあったの？」

音「俺の写真を撮ってほしいんだ。学校に自分の現状を送る必要がある。」

咲姫「それなら任せて！じゃあ取り合えずリビングまで入って！」

音「ああ、ありがとう。取り合えず俺の全身が映るようにしてくれ。ここに立ってればいいか？」

咲姫「はい！いいですよ。じゃあ笑顔で、ハイ、チーズ！」

咲姫「撮れましたよ！これでいいですか？」

音「ああ、これで……ってちよつと待って！俺なんで笑顔で……

ああ、そうだ……つい反射的に……ごめん、撮り直しを願えるかな……？」

咲姫「仕方ないわねえ……その写真を後で私に送ることが条件よ！」

音「くっ……でも背に腹は代えられない！絶対に拡散だけはするなよ？」

咲姫「ええ！もちろん！」

音「はあ……じゃあ撮ってくれ……」

咲姫「じゃあいきますよ？ハイ、チー」

音「その手には乗らないぞ」

咲姫「残念ねえ……はい、これ撮れた写真」

音「ありがとう。じゃあ俺は家まで戻るよ。」

そんなわけで俺帰宅！資料作成も終わったしメールを打ってたらもう7時になってしまった。

大人の体だった昨日のときに作った残り物があるから今日の夜ご飯は大丈夫そうだが明日はどうにもならないな……考えないといけないことが多すぎる。

さて、夜ご飯も食べ終わったことだし、次にやることは風呂・・・風呂？

美亜「美亜ちゃんセンサーキュピ——ン！美少女フルーツちゃんの困りごとをキャッチ！いぎ、突入！」

音「うおわあ!?!急に入ってくるなよ!?!びっくりしただろ！」

美亜「そんなことはさておき音先生、もしかして風呂に入ろうとして困ってませんでした?」

音「え・・・えつと・・・はい。」

美亜「そんなお困りフルーツちゃんの為に、美亜ちゃんには素晴らしい提案があります!そう!美亜ちゃんと一緒に風呂に入ろう！」

音「え!?!ちよつとまってそれはつまり教え子の・・・しかも女性の裸を・・・」

美亜「どつちにせよ自分で裸見ることになるから大丈夫!それに美亜ちゃんはこんな最高級のフルーツちゃんに見られるなら・・・」

音「やめろ気持ち悪い！」

美亜「まあ咲姫ねえも予想してたことだしね。どつちにせよ拒否権はないのだ！」

音「ひい!?!」

美亜「よし今だ連行だ——！」

音「嫌だ!?!離せ——!助けてくれ——!?!」

未来の俺へ、生きてますか？変なことされて何か新しい扉を開いてませんか？俺は心配で心配でしょうがないです。

どうでもいいですがこういうことが起きた場合干されるのって俺のほうじゃないですか？これに関しては悪者サイドどう見ても美亜の方じゃないですか？なんか立場逆な気がしてならないんです。

YURUSHITE

俺は今美亜によって引きずられながら柏木家に連行されております。力のないこの体が恨めしい・・・この先に待っているのはお風呂という名の地獄。いや、世の男子達にとつては夢の場所なのかもしれない。だがしかし、ここには美亜がいる。そう、美亜がいるのだ！。

今の俺の見た目は美亜がいつもセクハラの対象になってる女の子そのもの。何をされるのか分かったもんじやない！しかも美亜の言い分だと咲姫も俺を風呂に入れる気満々じゃないか！

確かに違う体になって色々勝手が違うのかもしれないが、そういうのは書面とか遠隔とかで教えてもいい気がするのだ！決して教え子の裸を見るなんて行為はいくら俺が女の子になったからといって許される訳では・・・

咲姫「音先生さつきから念仏でも唱えてるみたいに早口でぶつぶつ何か言ってるようだけど……」

音「はっ！声に出てたか。いやな、流石に……その……風呂くらい一人で出来ると思うからさつきから見えてないで俺を助けてくれないかと」

咲姫「うーん……男と女じゃ勝手が違うんだから流石に一日目は私達がついて教える必要があると思うわ。それに自分の風呂場には女性用用品はないでしょ？今からじゃ買えないしどちらにせよ今日はこっちなかないんじゃないかしら？」

音「うっ確かにそれはそうだけど……そうだけど……せめて美亜は……美亜だけは隔離してくれ！」

美亜「えっアタシの信用なさすぎ……？」

音「あるわけないだろ！」

咲姫「まあ私も一緒に入るし、いい美亜、一回でもやらかしたら退場よ？」

美亜「分かった！一回はやれるんだね！」

咲姫「そういうことじゃないんだけど……まあ私が目を光らせておくから、取り合

えず安心して？」

音「いやそれ飼育員がいるからライオンの檻の中に入っても平気ですよって言ってるのと同じな気が……」

うわわちよつと待つて服に手を掛けなくてくれ！脱がそうとするなあー！」

美亜「でもー、脱がないと風呂に入れませんか？分かつたら早く脱げー！そのプリーティーなお体を美亜ちゃんの前に見せろー！」

音「ちよつとは遠慮つてものを知つてくれえ！うわあ!?……つあう……見るなあ……」

咲姫「体育座りで端で震えてる……ほら、早く立たないと移動できませんよ？」

音「つつつつ分かつてるよ！……少し時間をくれよ……」

自分でも物凄く顔が熱くなっているのが分かる。見られることがこんなに恥ずかしいなんて……

でも、服も脱がされ裸の状況で今更後に引くこともできない。取り合えず目を瞑つて今日はやりすごそう。自分の裸はまだしも咲姫や美亜の裸まで見る必要はない。

咲姫「あら？目を瞑つて……うーんこの調子で明日一人で入れるのかしら……」

美亜「なーんか心配……はっ！今は無防備だからチャンス！フルーツもぎもぎター

イギやああ!？」

咲姫「させないわよ美亜? それと言っちゃ悪いけど今の音先生その……こう……」
「い」しそういうのは出来ないと思うわよ?」

美亜「ふーん……でもフルーツもぎもぎ出来なくてもアタシは諦めない!

そう! この生まれたままの姿のフルーツちゃんを洗うという名目でお触り出来るのだから!」

咲姫「はあ……いい美亜? もし音先生が助けてとか言ったら即刻追い出すわよ?」

美亜「にやふふ……言質頂きました! じゃあ早速そのぶにぶになおてから……」

さて、目を瞑って周囲の視界をシャットアウトしてプルプル震えている音だが、ここで一つ大きな間違いを犯していた。

人の体の都合上、視界がシャットアウトされている分他の感覚が鋭敏になる。更に緊張し強張っている状態のため更に感覚は鋭敏になる。詰まるところ、今の音は……

美亜「うへへー柔らかいですなあー」

音「ふひやあ!?!・・何!?!・・ちよつと美亜・・ひやう!?!」

美亜「おほー!なんてニャーペラスな嬌声なの!ぐへへ・・こんな声出されて美亜ちゃん我慢できる訳がありませんなあ・・」

掌から腕まででこれなら背中や胸辺りはどんな声出しちゃうの？」

音「くう・・・や、やめてくれえ・・・」

美亜「にやふふ・・・そんなこと言つて・・・おつといけない手が滑つて」

音「ひやあ！・・・声が・・・抑えられない・・・」

美亜「さてさてお次はメインティッシュ・・・ぐへへ・・・音先生がR18展開に・・・

まあ犯人はアタシなんだけどね！いぎ！ティステイぎにやー！?!?!」

咲姫「美亜？」

美亜「ひやい」

咲姫「退場」

美亜「ひやい」

咲姫「なんとか間に合ったようね・・・美亜ったら私がシャワーを浴びて目を離して
いた隙になんてことを・・・」

音先生大丈夫……?」

音「つつつつ……無理……」

咲姫「はぁ……今回ばかりは美亜も連れて来た私が悪かったわ……ごめんね、うちの美亜が迷惑かけて……」

音「ほんとだよ……はぁはぁ……取り合えず助かったよ」

咲姫「どういたしましたして、でも思っただけ目を開ければなんとかなったんじゃないかしら?」

音「それだけは駄目! なんととしても、なんととしても自分のならまだしもそれだけは駄目なんだ!」

咲姫「そうなのね……まあ強制はしないわ。取り合えず洗うの続けていいかしら?」

音「ああ……優しくしてくれ……」

咲姫「なんか違う意味に聞こえるわね……」

さてさて視点は変わりました美亜ちゃんです。

あわよくばと思つたら咲姫ねえに追い出されちゃった……だがしかしアタシは諦めない！ここは美亜ちゃんのフルーツ愛で用アイテムセットの内の一つ、聴診器！これでお風呂場の中の声を壁越しに聞いちゃうんだから！

どれどれ……ん？なぜか泣き声が聞こえる……？声のトーン的に音先生の泣き声だ。咲姫ねえ泣かすようなことするようなタイプだっけ？

うーんシャワーの音がじゃまでうまく詳細が聞き取り辛い……もう少し……うーん「ガチャ！」ふにやつ!?咲姫ねえ!?

美亜「咲姫ねえどうしたの？慌ててるようだけど……」

咲姫「ごめんね美亜私には負えなくて……」

美亜「えっどういこと？」

咲姫「その実は、音先生なんだけど、その……えつと……」

美亜「もったいぶらずに早く言つてよ……泣いてるところを見るあたり大事なんで

しよ?」

咲姫「そのね? 洗う時につい手が滑って敏感なところに触れちゃったみたいで、それで偶々音先生丁度トイレ行きたいと感じていたみたいで・・・えっと・・・」

あ・・・(察し) 美亜ちゃんわかっちゃったよ・・・そりや泣くよ。

確かにこれは泣くほど恥ずかしいよね。なんせ・・・

失禁しちやったわけだから・・・

咲姫「その、綺麗にはしたけど音先生のメンタルが完全に崩壊しちやったようで・・・美亜も落ち着かせるの手伝ってくれないかしら・・・」

美亜「う、ラジャー!」

もうやだ・・・死にたい・・・涙が止まらない・・・こんな生き恥曝して俺がなにしたっていうんだ・・・

くそう、だから俺は家で風呂に入りたいって言ったのに・・・いや、責任転嫁は良くない。でもこんな迷惑かけて、世話までしてもらって優しくしてもらって合わせる顔がない・・・

こんなことになるなら風呂入らされる前に事前に申告すれば良かったんだ・・・

咲姫「わあー!?!美亜に頼んでるうちに先生から負のオーラが・・・!?!掃除はしちやつたからすぐに脱衣所まで上げるわ!美亜は服を取りに行つて!この際何でもいいから!」

美亜「オツケー!取り合えずアタシの服取ってくる!」

こうして、風呂事件は幕を閉じたのだった……

L i f t O f f

目覚ましの音と共に意識がゆっくりと覚醒していく。

はあ・・・へんな夢を見てしまった。俺が朝起きたら女の子になって咲姫にメイド服着せられて無理やり風呂場に連行されて失禁してみつともなく泣いて・・・

うーんやけに具体的な夢だな。多分疲れているかもしれない。取り合えず目覚ましをつけて・・・

音「うわあ!?!や・・・やっぱり現実!?!」

視界にうつるのは小さくなった手、昨日と違い錯乱することはないもののやっぱり現実だった。昨日は取り乱して咲姫に痴態を曝してしまったからな・・・

冷静に思考できるのはいいことだ。さて朝ごはんだが・・・うん、冷凍食品を使えばいいな。文明の利器に感謝だ。

そんなわけでご飯を食べながら今日のやることを考える。学校にメールは送ったし後解決すべきは食料問題か・・・？あと普通の服を持っていないのも問題だ。

今着てるこの服は・・・確か美亜の私服がこんな服だった気がする。風呂上りに着せ替えてもらったんだろう。その時の記憶が曖昧だが。出来れば二度と思いい出したくない。

話を戻そう。今日一番に行くべきはショッピングセンターな気がする。

朝食を食べ終わったので善は急げ、早速荷物を用意して出かけることにしよう。財布と、鞆と、買い物かご・・・は車にあるか・・・ん？車？

今の俺、車運転出来ないんじゃないか・・・？車が運転出来ないとなると、大量の荷物を運べなくなるから・・・もしかなくても買い物無理なのでは？

仕方ない、ここはネットショッピングにしよう。届くのに日数がかかるのが問題だが出来ないことはどうしようもないからな。

美亜「おつはー音先生生きてるー?」

音「ああ生きてるぞーって当然の権利のように入るんじゃない!ここ俺の家だ!」

美亜「まあまあ・・・で、何やってるの?」

音「ネットショップピングだ。本来なら近くのショップピングセンターに行きたいところだが、この体じや荷物が持てないしな。」

美亜「ふーん、咲姫ねえには頼まないの?」

音「いやいや、食料品とか服とか風呂用の道具とか、買うものが沢山あるんだ。いくら咲姫と俺の二人でも持ち切れる量じゃないし、そんな迷惑かけられないだろ。」

美亜「えー、ちゃんと人を頼らないとー。じゃあもう少し人がいれば大丈夫なの?」

音「ん?まあ美亜も持つならあと一人いればなんとかなるかもしれないな。」

美亜「じゃあちよつと待ってて!」

音「え?・・・行つちやつたな・・・」

美亜「・・・という訳なの咲姫ねえ。誰か呼べないかなって」

咲姫「うーんじゃあ・・・そうだ！あの人を呼びましょう！頼りになるし！」

美亜「という訳で一人増援を呼んでくれるそうです。」

音「ええ：：？そこまでして行きたい訳でもないしそんな迷惑かけないんだが：：」

美亜「食料に関しては大丈夫でも服はそうはいかないでしょ？ほら、現地で待ち合わせする約束らしいから音先生も外に出る！」

音「うわわっ、手を引っ張るな！」

咲姫「と、いう訳でショッピングセンターに到着よ！」

音「ああ・・・はあ・・・はあ・・・そうだな・・・」

美亜「全然体力なくなっちゃったんだね・・・」

音「どこか・・・椅子に座らしてくれ・・・いつも車で行ってたからこんなに距離あると思わなかったんだ・・・」

咲姫「しかたないわねえ・・・歩幅が小さくなったっていうことも影響するのかしら？」

じゃあここの椅子に座りましょう？どっちにせよ待ち合わせ場所はここに指定してるの。」

音「へえー・・・一体だれを呼んだんだ？」

咲姫「それは来てからのお楽しみ！」

音「なんか嫌な予感・・・ちゃんとした増援なんだろうな？柚子とか呼んでないよな？」

咲姫「大丈夫よ。まともな人呼んだから。」

美亜「その言い方だと柚子先輩まともじゃないみたいじゃん・・・実際そうだけど。」

あつ来たみたい」

音「ん？あれは・・・つてえ!?嘘!?ちよつとおい何でこの人呼んだんだよ!」

咲姫が呼んだ人物。それは・・・

三角葵 「お待たせ！ごめんね待たせて・・・えっと、用事っていうのはそちらの子の
こと？」

三角葵（みすみ あおい）。

真面目でクールな常識人で何かと枯渴しがちな良きツツコミ役でもある。しかし、
ツツコミ役宿命か、割とろくな目に合わされていないようだ。

そんな彼女だが、奏坂学園では2―Bの生徒である。つまるところ、音のクラスの生
徒だ。そう、音のクラスの生徒なのだ！

音 「ちよつ葵は俺のクラスの生徒だって知ってるだろ!?ここでバレたらまずいつて
！」

咲姫 「ふふっ」

音 「なんで笑うだけなんだよお！」

咲姫 「ごめんね葵、ちよつと親戚の子を預かって、今からその子の服を買いに行こ
うとしてたところなの」

音「え、っ」

葵「へえー、凄い顔してるけど……ねえねえ、名前は何ていうの？」

音（ここで俺だとバレたら明日日学校で滅茶苦茶気ますぐなること確定じゃん！なんとかして誤魔化さないと……）

音「えっと、お……私の名前は……音です……」

音（あつ終わった。なんでこんなこと口走ったんだろう）

葵「へえー音ちゃんね。私の名前は葵。服買いに行くんだったよね？それじゃあ行くか。」

音（なんとかなった……中性的な名前でもよかった……）

美亜「意外とバレないもんだね」

葵「ん？何か言った？」

音「ちよつと美亜！今は誤魔化さないといけないからそういうのは小声で耳元で言うてくれ！」

美亜「はい。にやふふ」

こうして、一つの大きな隠し事を抱えた状態で買い物はスタートするのだった。

M i n i s k i r t

服や食料品を買い出しに出かけることになったわけだが、咲姫が増援を呼んだと聞いて誰を呼んだのかと思ったらそれがまさかの俺の担当クラスの葵だった。

いや、公開処刑かよ！つてツツコミたいところだけれども幸いにも向こうはこちらの事情を知らないため、咲姫の親戚の子という設定でやり過ごしている。

ところで咲姫って嘘苦手じゃなかったか？正確には「嘘をついた後にその嘘を追求されたときに誤魔化すこと」が苦手なわけだが。葵に怪しまれなければいいが。

そんなことを考えていたら服屋に到着した。服に関しては一時しのぎとはいかない分結構な量の試着、購入をすることになりそうだ。

葵「さて、着いたわけだけど、何か服の好みつてある？」

音「えーつと、出来れば、ズボン系とか・・・」

葵「なるほど、私の私服と同じタイプかな？じゃあ向こうのコーナーに」

美亜「ちよつと待ったー！」

葵「え・・・ええ？いきなりどうしたの？」

美亜「音ちゃんにズボンをはかせようたつてそうはいかないよ！音ちゃんにはスカートを！それも、飛び切り短いスカートを！はかせるべきだと美亜ちゃん思います！」

葵「ええー？その、音ちゃんの意見を一番に考えたほうがいいと私は思うんだけど……」

美亜「ちえ……じゃあ音ちゃんどんな服が着たい？」

音「ズボン系……とか中性的な服……」

美亜「ほら！スカートがはきたいって!!」

葵「無理やりすぎるでしょ！」

咲姫「でも、スカートも悪くないわよ？どうせ色んな服が揃っているんだし、色々着てみたらどう？」

葵「確かにそれも一理あるけど……まあそれもそうね。でも嫌がつてる服は無理矢理着せたら駄目だからね？」

美亜「はい」

音（くっつ、葵を味方に付けければ俺の意見も通りやすくなると思つたのに、咲姫が美亜の味方をするとは……いや、でもこれから着るスカートを全て嫌がればいい話。

正直今着てる美亜のスカートも我慢してるけどなんというかスースーして落ち着か

ないしこれでおさらば出来)

葵「あれ？ズボン売り切れてる？店員さーん！」

音「え？」

美亜「あちゃー残念だったね音ちゃん。どうやらその店のズボンは全部奏坂の生徒会組が全部買い取っちゃったみたい・・・つまりスカートを買うしか選択肢は無いってこと！」

音「なんてことしてくれてるの!？」

なんで生徒会は承認して・・・あああいつらなら絶対承認するわ・・・

こんな面白い(自虐)ネタ逃す訳ないもんな・・・しかも奏坂学園って石油王レベルの予算あるから・・・やられた・・・」

葵「ごめんね、今朝買い占められたせいでないみたい。スカートになっちゃうけど、なにか要望があつたら教えて？」

音(葵超優しいじゃん・・・)

音「えっと、それなら出来るだけ長いものでお願い。短いものは、なんていうかその・・・」

葵「うんうん分かるよ。私もそういうの恥ずかしいって思うもの。でも長いものしかないと暑い日に大変になるから短いものも買ったほうがいいよ。」

音「え？」

音「そんなにジロジロ見るなよ・・・無理・・・立てないってばこれ・・・」

美亜「最つ高・・・わが生涯に一片の悔いなし・・・」

咲姫「やつぱりミニスカート似合うと思つたのよ！ただ問題は本人が恥ずかしすぎて一歩も動けないことね」

葵「いや、分析しないで助けてあげたらどうなんですか？それに座つてたらちゃんとサイズが合つてるか分からないし・・・」

「ごめんね音ちゃん。恥ずかしいと思うけど、少し立つててくれるかな？」

音「つつつ・・・分かつた・・・」

美亜「にやはー！心もとないミニスカートに足が震えながらも葵先輩の手に掴まつてなんとか立っている音せ・・・音ちゃんなんてニャーベラスなの!!!」

例えるならそう、チェリー！真つ赤に照れて手を繋ぐその姿はまるで恋人関係にいる姉妹のよう！そして繋いだ手は百合の咲く楽園への入り口！ここがまさに天国！
シャツターを押す手が止まらない！」

音「うっ・・・撮るなよ・・・」

咲姫「最近すっかり弱気になつちやたわよね・・・なんとというか精神が体に引つ張られてる感じ」

音「というか、このスカート短すぎるんだって！その、立つてるだけで感触が・・・」
葵「あはは、慣れてないと確かに厳しいものがあるよね。じゃあこつちの着てみよう

か。」

音「う、うん。一旦カーテン閉める。」

はあ・・・息をついて床に座り込む。確かに咲姫の言ってる通り精神も幼くなってる気がする。以前の俺はこんなに醜態を晒すことがあつただろうか。まあ考えたところで現状は変わらないか。着替えよ

美亜「突撃ー!!試着室にいれば安全だと思つた?残念音先生に逃げ場なんてない!さあさあ丁度スカートを脱いだタイミングの写真をつておおー!これはこれは、女の子座りとは、昨日もやつてたけど今日のは一段と自然にしている感がでいいですなあー。・・・パシヤつとな」

音「ちよっ!?なんで入ってきてるんだ!出ていけえ!」

美亜「そんな舌足らずなロリロリボイスで言われても美亜ちゃんは余計興奮するだけなんだよー。にやふふ・・・昨日は邪魔されたけど、こんどこそテイステイヤー」

咲姫「はーい美亜は帰りましょうねー」

美亜「んなつ咲姫ねえ!?アタシは抵抗する!ふしやー!ふしやあああ・・・」

音「・・・行つちやつたな。それにしても女の子座りを自然に、か・・・。」

なんとなくなんだが、精神が変容していつて今まで縁もないようなことが自然にできたりしてしまうのが少し怖い。なんというか、洗脳されているみたいだ。

今は危機感とかを覚えているけど、そのうち一連の行動に何も感じなくなる日が来るんだらうか・・・そして男だった時を完全に過去のものとして感じてしまうような日がいつか来てしまうんだらうか・・・

やっぱり怖い。

とまあ、そんなことを考えつつ着替えが終わり、試着室を出ると、

咲姫「すみません店員さん。これの会計お願いします。」

会計をしている服の中にしれっとあのミニスカートが入っていることに気づいた。
・・・俺は絶対着ないからな!!

FLUFFY FLASH

服の買い物が終わった俺たちだが、服以外にも買うものは沢山ある。特に靴と食品は自分で見ないといけない。ちなみにだが風呂系統のものは美亜に任せることにした。

正直に言って分からないしきつきみたいに突撃されても困るからな。そんなわけで靴選びなのだが……

音「シンプルなものってないもんだなあ……」

葵「うーん確かに音ちゃんやんの年齢用のものだと音ちゃんと言う派手な柄のないシンプルなものっていうのは無いかもね。」

咲姫「ねえねえ！これとかどう？」

音「いや、シンプルなものっていったよね？それ日朝にやってるような魔法少女もののアニメのキャラのやつじゃんか」

咲姫「ええー、似合うと思うのに……」

音「強く出れないこの状況をさては楽しんでるな？……ん？そっちはシンプルじゃないか？」

葵「それはやめておいたほうが・・・」

音「サイズもピッタリだしなんで「ピー」・・・ああーそういう・・・」

履いた状態で歩くと可愛らしい音が出るタイプの靴だった。最悪だ。服しかり靴しかりどうやら俺はどこかで妥協というものを強いられるようだ。

咲姫「フフツ・・・音せ・・・音ちゃん・・・似合いですぎ・・・」

音「こいつ・・・好き勝手いいやがって・・・はあ・・・じゃあこつちのものにするよ。少しは妥協することにする。」

柄付きのもので妥協することにした。大きいハートがあしらっており、色もピンクを中心とした少しカラフルなものだ。

だが正直これ以上ましなものが残念ながらないのでこれにすることにした。音の出る靴？あんなもん履かないに決まってるだろ。幼稚園児じゃあるまいし

買い物も無事終了し現在なんとか帰宅途中。別に一行動起こすたびに何かイベントに見舞われても困るしな。美亜と合流して食品を買った時も割とスムーズに進んで良かった。

何より葵にバレずに買い物が進んだのがかなり大きいな。これで明日学校に行っても・・・

音「あっ!？」

美亜「どうしたの？」

音「今日バレずにすんでも明日学校で会ったら結局バレるじゃん!」

咲姫「あー、でも葵に知ってもらえればスムーズに話が進むんじゃないかしら？」

音「そういうことじゃないんだ!成人している俺が頑張つて女の子の振りをしていたという事実が気づかれるんだよ!恥ずかしいし引かれるってこんなの!」

咲姫「まあまあ、葵は優しいからきつと理解してくれるわ。」

音「それはそれでこう、生暖かい目で見られるんじゃないかと思うと・・・」

咲姫「私も味方するから・・・ね？」

音「いや、今日の買い物で咲姫の株ガタ落ちしているのに気づいてくれ」

咲姫「学校ではちゃんと優等生だし大丈夫よ！」

音「信用ないなあ・・・」

咲姫「う・・・えつと・・・取り合えず明日はちゃんと出勤してね！じゃあまた明日
！」

美亜「あ、逃げた。じゃあアタシもまた明日ということ、家の中に荷物運ぶまでは
手伝うよ。」

音「ああ、助かるよ。」

美亜の助けもあり家に荷物を運ぶのも意外と早く終了した。とはいえ服に関しては
リビングに全部置いてあるだけだが。あとでこれらは箆笥に入れる。今日はもう動き
たくないのの後回しだ。

さて、少し休憩したら夜ご飯を作ろうか「プルルル・・・」ん？電話か。誰からだ
ろうか

逢坂茜「ブワァーハッハッハッハッ!!!私こそが生徒会長の」

音「今疲れてるんで、そういうのいいです。本題をどうぞ」

茜「最後まで言わせろ!まったく・・・メールを見たぞ。お前が気兼ねなく勤務できるように生徒達に快く受け入れてもらえるように考えているところだ。」

奏坂学園生徒会長、逢坂茜（おうさか あかね）

その性格を一言で表すなら破天荒に尽きる。今まで起こしてきた事件を例にとるなら、「生徒会室は広くなくては!」といって他の教室をぶち抜いて増築したり、校歌をメタルにしようとしたり、サブゲーで勝利するために生徒を一人さらって監禁したり、兎に角起こした事件は両手では数えきれないぐらいに多い。そしてついたあだ名は「奏坂

の赤き天災」である。

ちなみにこれを言うと言怒られるが実は生徒思いな一面もある。例えば学園祭の費用を集めるために週末に生徒達でバイトをすることになったとき、客が集まるように演説をしたりしていた。結果的に学園祭の費用は無事集まり開催することができたのだ。

音「なんとというか、不安しかありませんが。大丈夫なんですか？」

茜「ククク・・・この逢坂茜様にかかればこんなものよ。そうだ、明日は昼休みが終わった後からこい。」

音「え、なにか理由でも？」

茜「秘密だ。まあ来ても拒まれることがないような手打ちをしておく。」

音「あ、ああ。ありがとう。」

茜「話は以上だ。じゃあ、さらばだ！」

一方的に電話を切られた。着ても拒まれることがないような手打ち、か。なんだろう。凄く嫌な予感がする。

昼から学校に来るようにとのことだったが、凄くいきたくない。そう思いながら食事の準備を始める俺なのであった。

オンゲキ全域★アカネサマ？

葵「うーん……」

私、三角葵は昨日の出来事を思い返しながら登校しているところ。昨日は咲姫先輩の買い物に付き合ったわけだけど、なんとというか、どうしても違和感を覚えてしまったの。特に買い物の主役だった音ちゃん。見た目はつむぎ（そのうち登場する。美亜の同級生）みたいに小学生のような背丈をしていたけど、発言一つ一つが大人びているというか、勿論つむぎも大人に憧れている影響でいつも敬語で話したりしているけど、それはまた違う、根底から感じられるものがあるというか、

柚子「おーいみすみーん」（葵のあだ名。三角葵の苗字より）

とにかく、まず発言一つ一つが大人びすぎていること。

あと、食品の買い物の時、冷凍食品を中心に選んでいたけど、咲姫先輩の家に泊まるならそんなに大量の食品はいらない筈だし自分が料理をすることを前提で食品を選ん

で買っていたし……

柚子「あれ？みすみん返事してよー」

もしかして一人暮らし？いやいや、あんな小さな子が一人暮らしをしていたなんて……

柚子「むう……ねえねえあーちゃんみすみんが考え込んで動かなくなっちゃった」

あかり「葵ちゃん？何の考え事してるの？」

葵「え？……ごめんね二人とも！歩きながら話すね」

私の親友の星咲あかり（ほしざき あかり）と藤沢柚子。

あかりはいつも前向きで隣にいる私まで笑顔になるような子。ただ、ポジティブすぎて補修に呼ばれても「もつと勉強ができる！」って喜ぶのはどうかと思うけど……

そしてもう一人の親友の柚子は……うーん一言で言うなら困った子ね。

舌をかんじやったあかりに飴をペロペロするといよいよと言ってハバネロ味の飴を渡したり、先輩にも臆せずあだ名をつけて呼ぶし、まああかりも先輩に対してもちゃん付

けで呼んだりするけど、あと嫌なことに駄々をこねたりするし・・・それでも、よくみんなが笑顔になるようなことを考えたりするから悪い子ではないんだけど・・・

そんな二人と私を入れた三人はASTERISM（アステリズム）っていうユニットを組んでオンゲキをしているの。

始めはポンコツトリオとか呼ばれていた時もあつたけど、今となつては実力だつてつけて、みんなに名前を知ってもらつてるユニットになつてると思つてるよ。

葵「えっと、実はこんなことがあつて・・・」

あかり「へえー。でも、咲姫ちゃんがいるなら心配はいらないんじゃない？」

葵「心配なのもそうだけど、あの子、初めて会つたはずなのにどこかで見ることがあるような気がするの。」

柚子「デジャブってやつー？」

葵「そうそう。昨日から考えてるんだけど・・・」

あかり「じゃあ咲姫ちゃんにお願いして今日合わせてもらおうよ！仲良くなれるかもしれないよ！」

葵「それもそうね。教室についたし、そういえば今日って1、2時間目が特別授業になるんだつたよね？肝心の授業内容が書かれていないせいでよくわからなかつたけど」

あかり「何するんだろうね！」

葵「こういう時って茜先輩がなにかやることが多いから・・・少し心配・・・」

心配ではあるけど、あの先輩は「出なければ退学だ!!」とか言つてきそう。向かうしかないね・・・。

茜「あーあー、テステス・・・よし。私こそが学園長の逢坂茜様だ!!」

葵「やつぱり……」

あかり「でも、昼休みまでの授業時間を全部使って何するんだろうね」

柚子「分かった！ 飴ちゃんパーティーだ！」

葵「絶対違うから」

茜「今日全校生徒貴様らに集まってもらったのは他でもない。この学校に勤務している教師の舞原音についてだ。」

あかり「えっ!? 音先生!?! ……そういえば今日見てないね。」

葵「確かにいつもホームルームの前から教室に待機していたはずなのに、気付かなかったわ。」

柚子「マイマイクビになっちゃうの?」

葵「ちよつと柚子不謹慎すぎるって!?! ……大丈夫だよね?」

茜「貴様らは多分クビになったんじゃないかとか重い病気に罹ったんじゃないかとか心配しているであろうが、そういうことではないと言っておこう。では、モニターのスライドを見るがいい。」

そこに表示されたのは、「自身に起きた異常事態について」という文面の表紙

茜「少し厄介な事態が起きて現在登校時間を昼休みまで遅らせるという措置をしている。その間に作ってもらった資料で今どういう状況に陥っているのか説明しようという算段だ。」

ちなみに、この資料を昨日送られたのだが、「書いていて結構シユールだったので生徒には公開しないで欲しい」と言われた。まあ私には関係ないが」

葵「いや、関係あるでしょ!」

あかり「でも聞く限りだと病気とかそういうことではないのかな?」

葵「まあ、続きを聞きましょう。」

茜「取り合えず、ここだな。」3. 自身に起こった異常の概要」つてところを簡潔に読む。」

茜「10月10日にて、夜自宅で熱を測ったら38.8。あつたとのこと。立っているだけでもふらつくためその日はすぐに就寝したのだが、次の日にて、朝起きたら女の子になっていた」

葵「はあ・・・はあ!」

柚子「マイマイ女の子になったの?」

葵「いやいやいや、あり得ないでしょ!そんな急に性別が変わるなんて!」

茜「このレポートとは別に自分を撮った写真を送ってもらっている。これだ。」

そして表示されたのはぱつと見小学生にしか見えない少女。髪は綺麗な黒髪で腰まで伸びている。そして・・・あれ？

この子、見たことある。なんなら昨日会ってたけど・・・え？嘘!?

あかり「かわいいー!!これ音先生なの?」

葵「・・・なんでメイド服?」

茜「ちなみに撮影者は柏木咲姫だ。」

咲姫「ちがつえつとこれは私が作って美亜に着せようとしたけど逃げるから音先生に着せようとしたとかそういうのじゃなくて・・・」

茜「咲姫、弁明はしなくてもお前がコスプレ好きで重度のアニオタなことくらい学校中でバレてるから今更隠しても無駄だぞ。」

咲姫「えっ!?!そ・・・そんなはず・・・」

茜「さて、咲姫はほつといて、こうなった影響で今音先生は授業に必要な教科書やパソコンを持つことすら難しい状態だ。生徒の、特に2ーBの生徒達で支援して貰えると助かる。まあ有り余る予算があるから設備は増設するがな。」

さて、次だ。むしろこのために時間を長くとってもらったといっても過言ではない。」

!!!!

┌

茜
「今の音先生にピッタリな服&シュータードレスを考えようコンテストを開催する

最っ高のエンタメだ!!

ありのまま・・・

今見たことをはなすわ・・・

茜先輩によると・・・

私達の担任の音先生が女の子になってて・・・

しかもその女の子がどう見ても昨日一緒に買い物していた子と一致する・・・

何を言っているのか分からないと思うけど・・・

私も何を言っているのか分からない・・・

ただ一つ言えるのは・・・

言えるのは・・・

・・・

柚子「ねえねえあーちゃんこの髪留めマイマイに似合うと思うけどどうかな？」
あかり「可愛い！きつと先生に似合うよ！」

二人ともこの状況をエンジョイしすぎてるということ!!!

いや、二人どころじゃない。茜先輩の打ち出した謎のユニット対抗のコンテストで3年生も1年生も関係なくエンジョイしてるし！確かに学校に来た音先生が忌避の目で

見られることはないとは思うけど・・・思うけど！

これはこれで学校に来た音先生はどう思うんだろう・・・

高瀬梨緒「あなたもそう思うかしら・・・というか、ASTERISMはあなた以外全員ボケみたいなものだから大変ね・・・」

2年の高瀬 梨緒（たかせ りお）

うちのあかりを何故か凄くライバル視してるみたいで、よく突っかかってきては結局「覚えてなさいよー！」ってアニメの悪役もびつくりな典型的な捨て台詞を吐いて去っていく人。でも私達の学校全体で見ればまだ常識人の部類にいるんだけど、欠点があつて・・・

あかり「梨緒ちゃんはやらないの？」

梨緒「へ!?!・・・ふ、ふん!このクリティカルブレイク美少女のアタシがこのくらいできないわけないでしょ!ジャステイスクリティカルな衣装でコンテストの1位をかっさらってやるんだから!」

葵「いや、ちよろすぎるでしょ!」

さつき私がツツコミした通り、ちよろすぎる。あとあかりは無意識にやっているんだろうけど、梨緒の闘争心に火をつけるのが上手すぎる。あかりも柚子もそうだけど、偶然でよく凄いこと起こすからなあ・・・

ツツコミ役の私が大変だけだね。

さて、二人が作った衣装はどういうのかな?・・・ん?

葵「ねえ二人とも・・・このシュータードレスのモチーフって・・・」

柚子「飴ちゃんの妖精さん!」

あかり「この羽とか、ドレスとか、可愛いでしょ?」

葵「可愛いけど・・・女の子になってそんなに日付が立ってない音先生にはハードルが高すぎる気がすると思うよ?受け取っても着てくれないかもしれないし」

柚子「じゃあマイマイに無理矢理着せればいい!」

葵「いや、そうはならないでしょ!」

あかり「葵ちゃん!」

葵「な・・・何?」

あかり「頑張って説得しよ？」

葵「違う、そうじゃないの！」

??? 「ツツコミ大変そうじやのう。くくく・・・」

葵「その声は!？」

珠洲島有栖「安心せい。コンテストの優勝作品は後日オーダーメイドで作った上で無理矢理にでも着せるつもりじゃ。」

葵「いや、安心する要素が一つもないんですが!？」

1年にして次期生徒会長である珠洲島 有栖（すずしま ありす）

普段はクマの着ぐるみを着ていて、着ぐるみを着ている時と着ていない時で口調などが変わるといふ子。今は着ぐるみを着ているのでのじゃ口調だが、着ぐるみを外すと無口無表情になってしまう。

有栖「まあ仕方のないことじゃ。温かく受け入れてもらえる代償とでも思ってもらおうと思っておるぞ。」

柚子「だってみすみん！ほらほら、みすみんもアイデア出して、可愛くしちゃおうよー！」

葵「ええ・・・?というかあなたはここにいていいんですか? R. B. P. (有栖が所属するユニット。茜もいる)の方でも案は出さないんですか?」

有栖「皆のものも見たくてな、茜には秘密じゃぞ?」

葵「はいはい・・・って後ろに・・・」

有栖「ん？」

茜「見つけたぞ有栖！さあさあお前も一緒に考えるんだ！敢えてピッタリではなく少しサイズの大きい服は絶対合う筈だ！さあこい！」

有栖「いや・・・我は・・・って着ぐるみに手を掛けるでない！頭が取れてしまうではないか！やめんか！やめ・・・」

茜「よし取れた！返してほしければこちらまで来ることだな！」

有栖「くまさん・・・とられちゃった・・・かえしてー」

・・・もうツツコミ放棄していい？というかツツコミ役を名乗った覚えもないけどね。

レイレイレイ　　〈超絶最強アメちゃん　Mix〉

足取りが重い。物理的にも、精神的にも。

今日は月曜日。社会人なら月曜日という言葉の凶悪さが身に染みて分かるだろう。今日の俺はさらにもう一つの意味で凶悪な理由によって足取りが重い訳だが。

学校についたわけだが、今は丁度昼休みの時間。割と早めに家を出たつもりなんだが、結構時間がかかってしまった。歩きというのも原因だが、歩幅が小さいのも原因の一つなんだろうなと思いつつ教室の前までやってきた。

この扉を開けた先に、俺の生徒達がいる。どういう反応をされるのかわからない。拒絶されたら・・・という考えがいつまでも頭について回る。そう考えていると・・・

柚子「マイマイやつほー！入らないのー？」

音「あ、ああ。すまん扉の前ですつとうじうじして。今入るよ。」

柚子・・・まあ今回は許そう。柚子のおかげで気が軽くなったしな。

柚子「あっそうだ！」
音「ん？どうした？」

柚子「マイマイ幼女化おめでとー！ー！」

音「……は？……すまんもう一度」

柚子「だーかーらー、マイマイ幼女化おめでとー！ー！って言ってるの！」

前言撤回、絶対許さん。よくもクラスの皆の前で晒し者にしてくれたじゃないか。許さんが？

音「柚子……柚子ー！！！」

柚子「あー！そんなぶんすこしたらめっ！だよ！柚子がなでなでしてあげる！」

音「やーめーろー！！！」

あかり「おはよう！……柚子ちゃん何してるの？」

柚子「マイマイが怒ってるから、なでなでしてるの！」

音「誰のせいで怒ってると思ってるんだ！あかり！柚子を引き剥がしてくれ！」

あかり「私もなでする！柚子ちゃん。いい？」

音「え？」

柚子「いーよー！」

音「え!？」

あかり「よーしよし。音先生すべすべー」

音「頬ずりもするなー!？」

あかり「ぷにぷにで気持ちいいー」

音「話を聞いてくれー!!」

葵「あかりー!、柚子ー!、あつきたいた!・・・つて何やつてるの?」

柚子「みてみて!マイマイ可愛いでしょ!」

葵「可愛いけど、え?」

あかり「すべすべで、ぷにぷにで、気持ちいいんだよ!」

葵「・・・先生大丈夫ですか?」

音「葵っ!助けんむう!?!助けてっ!喋りづりやいから頬をつみやみやないでくれえ!？」

柚子「えーこんなに気持ちいいのにー」

葵「柚子・・・離してあげて」

柚子「ぶーぶー」

葵「ぶーぶーじゃないの!もう、嫌がつてるでしょ?あかりも、離してあげて」

あかり「はーい」

柚子「ざんねーん」

音「残念じゃない！・・・はあ、助かった」

柚子「そういえばー、マイマイってなんで幼女になったの？」

葵「それ私も気になってました。具体的な原因は説明されてないんですよね。」

音「原因はな、断定することはできないが多分これじゃないかというのは一つある。」

柚子「えっなににー？」

音「それはな・・・それはな・・・柚子、お前にぶち込まれた飴玉だよ!!」

葵「いやそんなわけ・・・柚子ならありえるわね。」

あかり「柚子ちゃんが原因なの？」

柚子「おー柚子が原因だったなんて、すごい！」

音「凄くない!!こんな体にさせられた身にもなってみろ！」

柚子「んーでもマイマイ可愛くなつたから何も問題ないよ！」

音「んなわけあるか!!・・・はあ、お前には何を言つても無駄だなあ。」

あかり「えつと・・・うちの柚子が大変ご迷惑をおかけしました？」

葵「なんで疑問形なの!ごめんなさいうちの柚子が・・・」

音「なんか、悪戯した子供に振り回される親みたいだなあ・・・つともう時間か。じゃ

あ俺は次の授業に向けて教室に向かうから、お前らも授業頑張れよ。」

あかり「ちよつとまつて先生！」

音「ん?なんだ？」

あかり「放課後、見てもらいたいものがあるから、用事がないなら教室に来て欲しいっ

て思つて・・・」

音「ああ。問題ないぞ。今日は特に授業以外にやることはないからな。」

という訳で次の教室に向かうのだった。

あかり「先生可愛かったね！」

葵「分かるわ。男口調だけど小動物的な可愛らしさがあって、正直私も思わず撫でたくなっちゃった・・・」

柚子「みすみんもなでればよかったのにー。もったいない。」

エータ・ベータ・イータ

藍原椿「あら？ここは高等学校よ？あなたみたいな小学生が来るところじゃないわ。」

音です。いよいよもって小学生に間違われました。何度も言いますが先生です。いや、こいつの場合は完全に分かって言ってるな。分かっている上で俺のことを玩具にする気満々なようだ。現に顔が半分笑っている。

藍原椿（あいほら つばき）

1—Aの生徒で莉緒と同じユニットに所属している。この人の性格を一言で表すとするなら、「S」というのがピツタリだろう。彼女の悪戯によって主に同ユニット内の人々が割と被害にあっている。噂によれば誕生日プレゼントにも悪戯グッズを選んだとか。（有栖曰く）

椿「それにしても随分可愛くなったのね」

音「分かっているじゃんか！通せんぼしてないで教室に入らせてくれ！」

椿「……」

音「ん？なんだ？」

椿「頭にゴミが付いてたわよ。ただでさえ綺麗な髪なのにもつたいない。」

音「え？ああ、ありがとう。．．．ほんとにそれだけか？」

椿「ええ、それだけよ」

音「ならいいが。じゃあさっさと通すんだ」

椿「もうちよつとだけあなたを弄んでからね」

音「本人を目の前にしてガッツリいうじゃん」

椿「まあいいのよ。あつ丁度いいところに莉玖が。ちよつとこつちに来て」

結城莉玖「ん？どした？」

結城莉玖（ゆうき りく）

一言で表すなら「愛すべきおバカ」。椿、莉緒と同じユニットである「△TRIEDG E」（トライエッジ）に所属し主に椿の悪戯の対象となつている人だ。特に語彙力が圧倒的に無く、「日常でよく使う筈の単語が思い出せない↓椿から間違つた単語を教わる↓間違つた単語を使う↓莉緒が突つ込む」という流れはもはや鉄板となつている。最近だと「敵討ち」という単語を「肩たたき」と教わつて使つたらしい。（葵曰く）

莉玖 「つて音先生じゃん！椿と何話してたんだ？」

椿 「この人は音先生じゃないわよ」

音 「は？」

莉玖 「いや、どうみても音先生だろ。今回は騙されないからな！」

莉玖「ん？そのキレのあるロックなツッコミ・・・」

音「もしかしてまだ希望があるパターン？もう一息！」

莉玖「気のせいだな」

音「おーーーー！！！」

手を握られ入口へ向かわされる俺。助けて。あつあんなところに通りすがりの有栖が。

音「有栖ー！」

有栖「・・・？」

音「椿にやられた！助けて！」

有栖「ん・・・がんばれ」

音「違うそうじゃない！」

残念ながら有栖は助けにはならなかった。もう助けはこないのか・・・そう思った時

井之原小星「はあ・・・何やってるのさ、珍しくボクが授業にやる気になっていると
いうのに」

音「小星!!!」

小星「莉玖、椿に騙されてないか？そいつは間違いなく音先生だ。迷い込んだ子供が

有栖を見つけて有栖と叫ぶわけないだろ」

莉玖「確かに・・・じゃあオレは椿に騙されていたのか!？」

音「そうだよ。今日のは完全にライン超えてたけどな。」

小星「はあ・・・めんどくさい。早く教室に戻るぞ。」

音「ん? 面白いえばお前入口近くまでに用事つてあったのか?」

小星「そういうのは聞かずに放っておくのがお約束なんだぞ」

井之原小星（いのほら こぼし）

咲姫とはオタク仲間でタッグで「7EVENDDAYS⇔HOLIDAYS」(セブンデイズ ホリデイズ)というユニットを組んでいる。たまに咲姫の家に来るので割と面識がある。性格は超が付くほどめんどくさがり屋であり、歩くのが面倒すぎて毎日咲姫におぶってもらって登校しているレベルだ。そして割と授業をサボりがちでもある。今日は物凄く助かった。

小星「そいえば、いつの間に皆のこと名前呼びになったの?」

音「咲姫に聞いてくれ」

小星「はい」

椿「あら、意外と早かったのね」

有栖「・・・おかえり」

音「こいつら・・・」

有栖「ん・・・大丈夫だと・・・信じてた・・・」

椿「まあ、やめ時が見つからなくて放置しちゃってごめんなさいね」

音「頼むからもうやめてくれ」

椿「ふふ、そんなこと言われたらまたやりたくなっちゃうじゃないの」

音「やるとしても今週はやめてくれ。この体にも慣れ切ってないんだ」

椿「善処するわ」

音「じゃあ授業を始めて・・・マジか・・・」

今の背だと背伸びをしないと教卓に隠れてしまいそうになるといふ事態が発生した。仕方なく教卓の前ではなく横で席に着くよう声を掛ける。

音「よーし授業始めるぞー」

おやすみのうた

音「よし、授業終わるぞ。小テストは次の授業に返すからな。」

なんとかこの体になって初授業を終えることが出来た。いつも通り板書をする事ができないのが辛い。まあプロジェクターを使ってパワポで授業を進めたから事なきを得たのだが。本来であれば補足用として使う筈だったスライドをすっかり活用することになるとは思わなかった。あと俺が一挙一動を取る度に保護者みたいな視線を生徒が投げかけてくるのがなあ・・・さて、4時間目は空きだから採点するか。

音「んう・・・はっ！眠っちゃだめだ！」

ヤバイ。超眠たい。普段ならこんなことにはならないのに何故・・・まあいい。こういう時はコーヒーを飲むに限る。自販機でコーヒー缶を買い、早速飲むとうと・・・

音「ふぐう……んんん？……くう……開かないい……」

開かなかった。この体は力弱すぎるにも程があるだろ！缶一つ開けられないなんて情けない。そう思いながら俺は同僚の教員室に向かうのだった。たかが缶一つ開けてもらうためだけに……

音「と、いう訳で開けてくれ、頼む」

藤沢蜜柑「え!?ちよつと舞さん流石にそれは……もう完全に女兒じゃないですか!……アハハハ!!……お腹痛い……」

音「女兒言うな!」

百面相してるこいつが一番仲のいい同僚の藤沢蜜柑（ふじさわ みかん）

名前の通り柚子の姉でもある。一応話の分かるタイプの人間だが愉悦民などところがあるため俺がひどい目に遭っていると助けるよりもまずスマホを手取るタイプの人だ。

蜜柑 「仕方ないでちゆねーお・と・ちゃん？」

音 「帰る」

蜜柑 「うわー待つて待つて冗談冗談!!!まあまあ落ち着きましよ、ね？」

音 「怒らせた原因お前だろ!・・・これを頼んだことを誰にも言わないなら許す」

蜜柑 「はいはい。分かりましたよ。じゃあ缶貸して？」

音 「ん、ほらよ。」

蜜柑 「よつと。じゃあ頂きまーす」

音 「おいおいおい待て待て待て!!!」

蜜柑 「冗談ですつて!・・・やつぱこうしてみると姿が変わってもそのままなんです
ね。」

音 「お前俺のツツコミを聞きたいがためにやったのか？」

蜜柑 「それ以外に何があるんですか!私コーヒー飲めませんし!」

音 「はあ・・・まあでもいつものノリが出来るだけでもいいか。ちよつと気分が楽に
なつたよ。ありがとう。」

蜜柑 「ちよつとその表情でストップ!!!」

音 「ん?このまま?」

蜜柑「そーですそのまま．．．あれ？スマホが無い！どこ行ったっけ!!」

音「．．．」

蜜柑「うわードン引きじゃないですかやだー。そんな目で見ないくださいよー」

音「．．．」

蜜柑「えつと．．．ほら！コーヒーですよ！飲みます？」

音「．．．飲む」

蜜柑「なんか有栖さん亜種みたいになつてるじゃないですか！はい、どうぞ！」

音「ん．．．んん!?!@*?&\$#につがー！ー！ー！ー！?!?!」

蜜柑「．．．え？」

音「ゲホツゲホツ．．．苦い．．．苦い．．．なんで．．．」

蜜柑「もしかして子供舌になってませんか？」

音「つつ．．．そうかもしれん．．．くそう．．．帰る．．．」

蜜柑「あっはい．．．（動画撮りたかったな．．．）」

戻ってきたわけだけど口の中が未だに苦みでいっぱいだ．．．好きなものを楽しめないなんて．．．憂鬱になってきた。あーあ。まだ採点半分も終わってないや．．．

葵 「音先生いますか・・・？」

4 限目も終わったから教室で待ってたんだけど・・・音先生が来ないし、音先生の教務室をノックしてるんだけど、反応がない・・・もしかしていない？・・・いや、なんだかんだいって真面目な音先生にそんなことは・・・

柚子 「マイマイいるー？入っちゃえ！」

葵 「ちよつと柚子!？」

あかり 「まあまあ葵ちゃん。私もお邪魔しまーす」

葵 「あかりまで・・・お邪魔し」

柚子 「いた！」

葵 「いたの!？」

あかり「どれどれ？・・・ほんとにいた！葵ちゃんも来て！」
葵「え？お邪魔します・・・音先せ・・・い？」

そこにいたのは小テストと見られるプリントの上で気持ちよさそうに寝ている音先生。右手に赤ボールペン持っている。

あかり「可愛い！いつもなら「やめろ！」って言われるけど、いまなら撫で放題だね！」

そういつておもむろに音先生の頭を撫でだすあかり。ちよつといくらなんでも遠慮つてものが・・・

音「んう・・・」

あかり「可愛い！」

葵「えつでも起こした方が・・・」

柚子「みすみん起こしたらだーめ！いまはしーっ！だよ！」

あかり「よしよし・・・」

音「あったかい……」

葵「か……可愛い……」

「そうやって起こすことも忘れて撫で続けていると……」

蜜柑「舞さん終わった？買った物にでも」

柚子「みーねえしーっ！マイマイ起きちやうよーっ！」

蜜柑「あれ？柚子？というか、あかりと葵もいるじゃん。何してるの？」
あかり「見て！音先生撫でてるの！」

蜜柑「ほほう……これはこれは……」

音「んん……えへへ……」

蜜柑「はうわわ!!!これは完全にノックアウトされちゃった！それはそれと丁度いいところ
ろにスマホが……」

柚子「いけいけー！」

蜜柑「ふふふ……じゃあ録画スタート！」

あかり「よーしよし……いい子いい子……」

音「えう……もつと……」

音「きもちい・・・」

音「すぎ・・・」

音「はっ!? また寝てた! 今何時だ? ……ん? ……ここ車?」

蜜柑「あつ起きました? ちよつと舞さん採点中に居眠りなんてらしくないんじゃないですか?」

音「え? ……ああすまん!」

蜜柑「まあいいですけど。家まで送りますよ」

音「ありがとう。わざわざ申し訳ない。」

蜜柑「まあまあ気にしないで（お礼はたっぷり頂いたしね!）」

音「あつそういえば俺用事が!」

蜜柑「柚子に伝言しておいたから大丈夫ですよ! 時間はたっぷりありますし、まあ休日とかでもいいんじゃないですか?」

音「それもそうだな。」

蜜柑「着きましたよ」

音「今日は色々ありがとう。これからも迷惑かけると思うけど、その・・・」

蜜柑「駄目っていう訳ないじゃないですか！私と舞さんの仲なんですよ？」

音「ありがとう・・・ちよつ涙が・・・か、帰る！」

蜜柑「あはは！また明日ー！」

おまけ

音「さて蜜柑。なにか弁明はあるかな？」

蜜柑「いやーなんのことか記憶にございませんなあーあはははは．．．あは？」

音「笑って誤魔化そうとしたってそうはいかない！ふざけんなよ！教師全体のD！s
c O r dに俺の寝顔の動画載せやがって！」

蜜柑「いや、だつてねえ．．．たまたまとれちやつたんですもん．．．許して？」

音「こんな公開処刑させておいて許せだとお？いやーなに奢ってもらおうかなー？」
蜜柑「ひい!? 回らないタイプの寿司だけはお勘弁をー！ー！」

回るタイプの寿司で許しました。まあ俺と蜜柑の仲だしな。

まつすぐ↓↓↓ストリーム！

東雲つむぎ「うーん、いったいみゃーは何を見せたいんでしようか・・・」

こんにちは。私の名前は東雲つむぎ（しののめ つむぎ）

奏坂中学に通う二年生です。今日はみゃー（美亜のあだ名）に誘われてみゃーの家に向かってます。事の経緯は昨日の夜・・・いつも通りみゃーの長電話に付き合っていたところ・・・

美亜「そういえばつむりん（つむぎのあだ名）、明日遊びに来ない？ちよつと面白いものあるんだ！」

つむぎ「面白いもの、ですか・・・なんかみゃーが言うとうとうしても警戒してしまいます。みゃーは変態さんですから。」

美亜「うぐっ・・・まあまあ今回はそんなことはないから。どっちかというと自慢しただけだしね。」

つむぎ「ふーん・・・じゃあ咲姫お姉さんが家にいるなら行きます。」

美亜「アタシの信用なさすぎない・・・?」

つむぎ「そんなものはないです。前に有栖先輩のプライベートビーチに連れて行ってもらったとき、柚子先輩にセクシーなポーズを取らせて写真撮影をしていたことは忘れてないですよ。」

美亜「えっあれバレてたの!?!」

つむぎ「柚子先輩は気づいてなかったようですけど、私はしっかり見てました。」

美亜「うっ・・・まあそんなことより明日咲姫ねえもいるし遊びに来てよ!楽しみにしてるよ!」

つむぎ「無理やり話変えましたね?・・・まあ行きますけど。」

美亜「じゃあそういうことで。」

つむぎ「あつ最後に一つ」

美亜「何?」

つむぎ「なつちも連れて行っていいですか?」

美亜「もちろんだよ!」

という訳で親友のなつちと一緒にみゃーの家に向かっている途中な訳です。

なっちは本名を日向千夏（ひなた ちなつ）と言って、私とみゃーはなっちってあだ名で呼んでいます。なっちは私と違って元気いっぱいであんなに笑顔にする太陽みたいな存在なんです。ただ時々ま・・・というか結構小学生みたいな言動を取ることがあります・・・

ちなみにですが私となっちとみゃーで「マーチングポケッツ」っていうユニットを組んでオンゲキをしています。私達のユニットはとっても強いんですよ！

千夏「楽しみだね！」

つむぎ「まあ、そうですね。そういうえば、みゃーの家にいくの久しぶりじゃないですか？」

千夏「ほんとだ！最近学校で会うだけだったもんね！」

つむぎ「そうですね。学校外で3人揃うのもいつぶりでしょうか・・・」

千夏「でも最後に3人で遊んだの2週間前だね」

つむぎ「そんなに久しぶりって訳でもなかったですね・・・つと着きましたね。」

千夏「インターホン鳴らすね！」

ピンポーン・・・

美亜「あつ2人ともいらっしやい! 鍵開けるね!

千夏「はい!」

美亜「と、いう訳で鍵開けてきて?」

音「いや、わざわざ俺に頼む必要がある?」

音です。パシリでは決してごさいません。決して。なんか美亜に「なつちとつむりん
に今の音先生自慢したいから今日家に呼ぶことにしたんだ! てなわけで隣だし来てよ
!」と半ば強制的に家に来ることになったわけだ。まあ家に招かれることは多々あつた
から嫌という訳ではないが、俺は見世物でもないんだがなあ・・・そう考えながらドア
の鍵を開けると・・・

千夏「ちーなーつーミ母——イル
音「ごふああああああ?!?!?!」
!!!!!!」

つむぎ「ちよつとなつね!?!?!いつも言ってますがドアを開けた瞬間に飛び込むのは……つ
て誰ですか?」

音「……」

美亜「にやつほー．．．つてえ!? 気絶してる!? なつちまたミサイルしたの!」

千夏「鍵、みゃーが開けたと思って．．．ご、ごめんなさい! えつと．．．名前分らないけど!」

美亜「アタシならいいの!」

つむぎ「そんなこと話してる暇があつたら早く運びましょうよ! 床に倒れたままじゃ悪化しちゃいます!」

音「う、うーん．．．ここは．．．美亜の家か．．．お腹痛い．．．」

千夏「ご、ごめんなさい! 千夏のせいだ．．．もし目を覚まさなかつたら．．．」

音「あはは、致命傷じゃあるまいし、大丈夫だよ」

千夏「でも．．．でも．．．」

音「じゃあ水を持ってきてくれないかな?」

千夏「う、うん! 千夏行ってくる!」

つむぎ「そういえばあなたは、みゃーのお友達さんですか?」

美亜「それについてはアタシが話すよ。まあなつちが来るの待とつか?」

千夏「持ってきたよ！」

音「うん。ありがとう」

千夏「元気になった・・・？」

音「もう大丈夫だよ。」

つむぎ「・・・大人な対応です」

音「ん？何か言った？」

つむぎ「いや、なんでもありません」

美亜「さて、じゃあこの子について話そうと思うよ。なんてたつて昨日言ってた面白い物つてのはこの子についてだからね！」

つむぎ「へえー、でも私面識ない気がします。」

千夏「千夏も見たことない！初めて会うよ？」

美亜「じゃあ早速だけど発表します！この子は・・・なんと・・・アタシのお隣さんの音先生なんだ！」

千夏「ええええええ!!!この子、音先生なの?!?!」

つむぎ「いやいや、そんなわけないじゃないですか。なつちは騙せても、私は騙され

ませんよ?」

美亜「そういわれると思って・・・じゃあつむりん、この子に何か質問とかしてみてもいい?」

つむぎ「え?・・・じゃあ好きな飲み物・・・って急に顔暗くなるじゃないですか!」

音「いや、その、前まではコーヒーが好きだったんだが、この体になって飲めなくなりましたいな・・・」

つむぎ「それはご愁傷様です・・・って騙されません!じゃあみやーの好きな音楽ジャンルは何ですか?」

音「アイドルソングだろ?」

つむぎ「じゃあ私の好きな音楽ジャンル!」

音「えつと・・・テクノポップだっけ?確か2年位前に言ってた気がする」

つむぎ「・・・正解です。」

音「じゃあこれで・・・」

つむぎ「じゃあ最後に、いまここでシュータードレスに変身してください。」

音「え?!いや、オンゲキ用の道具とか家に置いてあるんだが・・・」

美亜「そんなこともあるかと、持ってきてあるよ!生体認証だし、これで変身でき

たら確実に音先生でしょ？」

つむぎ「そうです。できたら、の話ですが。」

音「何を想定したら持つてきてるんだよ……じゃあいくぞ……」

そういえば自分のシュータードレスに変身するのこの体になってから一度もしてないな……そう思つてると……

音「これでいいかごはあ!?!……武器が……重……潰れる……」

いまの体では身長と同じぐらいのサイズになってしまったハンマーとぶかぶかになつてしまったシュータードレス。身動きも取れずにあえなく押し潰されてしまうのだつた……

美亜「え、ええー? 締まらないなあ……このハンマーどけて……つて重! さすがは男性用……つむりんもなつちも手伝つて!」

つむぎ「……あつはい! すみません、脳がフリーズしてました。なぜ女の子になつてるのかは分かりませんが、本物なんですわね。」

千夏「いっくぞー!千夏フルパワー!!!」

音「助かった・・・どけてくれてありがとう。まさか愛用の武器に殺されかけるとは思わなかった・・・」

つむぎ「大丈夫です。それと、疑ってごめんなさい。」

音「いいよ。こんなの誰だつて疑うに決まってる。でもつむぎは最終的に信じてくれただろ?それだけでもありがたいんだよ。」

つむぎ「・・・大人です。こんな体になっても、やっぱり変わらないんですね・・・」

美亜「え!?つむりん泣いてるの!?!」

つむぎ「泣いてなんかいません!」

千夏「ハンカチいる?」

つむぎ「・・・ありがとうございます」

音「それと千夏も、信じてくれてありがとう。」

千夏「うん!ねえ先生!」

音「ん?どうしたつてうわあ!」

千夏「ぎゅー!先生同じ背丈になったからこうやってハグだつてできちゃう

！」

音「あはは、あつたかいな、千夏は。」

美亜「なつちだけズルい！アタシも！」

音「うわわ！美亜まで・・・」

千夏「つむりんはこないの？」

つむぎ「私は行きません。立派な大人はハグなんて子供っぽいことしないんです！」

美亜「そんなこといってー。またまたー。」

つむぎ「な、なんですかその目は！」

千夏「つむりんもハグでしょ？」

つむぎ「・・・仕方ないですね。少しだけです。」

美亜（音先生、顔が完全に蕩けきつちやつてる。少しづつだけど変わってきてるんだね。ふふふ、ニャーベラス！）

心

咲姫「みんなー！今日は一応やるのがちやんとあるんだから一旦抱き着いてないで離れてー！」

つむぎ「仕方ないですね・・・」

千夏「はいー！」

音「んみゆう・・・」

美亜「おやおやー？音先生もしかして抱き着かれるのに癖になっちゃった？そんなもの欲しそうな顔してー！」

音「んなあ！そ、そんな顔はしてない！」

美亜「じゃあアタシのスカートを掴んでるその可愛らしいお手手はなんだって言うの？どう見ても寂しさを紛らわせる為にしか見えないけどー？」

音「ち、違っ!?こ、これは・・・」

つむぎ「・・・やっぱり子供です」

音「ぐふう!?!」

こいつ・・・好き勝手言いやがって・・・といったものの美亜が言っていたことは割と核心を付いていた。抱き着かれたときの温もりと多幸福感が実際に癖になつてしまつていた。多分今千夏に抱き着かれたら俺は引き剥がそうとするんじゃないかと逆に抱きしめるように動くんじゃないかとすら思っている。

千夏「そんなにぎゅーつてしてほしいんだったら、言ってくればいつでも千夏がぎゅーつてしてあげるよ！えへ・・・」

て・・・天使か？いや、俺を誑かそうとする悪魔なのは分かつてるけど・・・分かつてるけど・・・今も両手を広げる千夏に近づこうとしてしまつて・・・違う、これは足が勝手に進んでいるのであつて決して自分の意志では・・・

咲姫「はい、ストップ。蜜柑先生から頼まれたことがちゃんとあるんだから。」

た・・・助かつた・・・。多分咲姫が強制的に引き留めてくれなかつたらと思うと・・・想像もしたくない。

咲姫「なんだか魅了攻撃を受けたみたいになってたわよ」

い、言うな・・・言うんじゃない・・・自分でも正気じゃないことは分かっていたんだ・・・

咲姫「さーて、落ち着いたところで音先生？」

咲姫「採寸するわよ！」

音「・・・え？」

美亜「すごい、宇宙猫みたいな顔になってる・・・」

音「・・・ハッ!?ごめん一瞬気を失ってた。服はちゃんとあるのに今更採寸なんて必要ないだろ」

咲姫「いやいや、シュータードレスとかは基本的に一人一人特注で作るでしょ?私みたいに自分でデザインしたなら別だけど」

音「お前自作だったのか・・・道理でああいう趣味全開の感じになるわけだ」

咲姫「まあオンゲキは自然にコスが出来るからいいの。兎に角、奏坂にいる以上、どこかしらでオンゲキをするタイミングは出ると思うし、新しくするためにも採寸をしようっていうことよ。」

音「ああ、なるほど・・・ん?待つてつまり本来だったら学校で採寸されることになつていたってことか!？」

咲姫「そうなるわね」

音「ああそうですか・・・」

咲姫「そんなわけで早速始めましょう？メジャー持ってきたわ」

音「オーケー。じゃあ始めよう。その前に・・・」

音「美亜、お前にはこの部屋を出してもらおう」

美亜「ふにや!?!そんなあ!?!」

音「後手にカメラを持ってるのがバレバレなんだよ。という訳でさっさと出てもらおうか」

美亜「くっ・・・いや、アタシは絶対に」

つむぎ「みゃーの部屋いきますよ」

美亜「ぐええ!?!首が締まる!?!」

千夏「みやー、あっちで遊ぼ？」

美亜「ちよつとその引つ張り方は息できないって苦しいって!？」

咲姫「さてと・・・いや、そんなに緊張しなくてもいいのよ？」

音「いや、体がどうしても強張ってしまつてな。」

咲姫「じゃあ」

音「背中を撫でなくていいぞ」

咲姫「あつはい、じゃあ」

音「頭も撫でなくていいぞ」

咲姫「じゃあどこを撫でれば・・・」

音「撫でなくていいぞ？」

音「ひゃっ!？」

咲姫「だ、大丈夫!？」

音「あ、ああ大丈夫だ。メジャーが思ったより冷たくてな。」

咲姫「はぁ・・・良かった。」

咲姫「それにしても大分縮んだわよねー。今何cm何でしょうね。」

音「美亜の少し下だから、146cmぐらいか?」

咲姫「あつ143cmだつて!」

音「縮んだなあ・・・」

咲姫「実際私と頭一つ分違うからね。前は170cmくらいだつて?」

音「いや、168cmくらいだったか。定規一つ分も縮むとはなあ……」

咲姫「腕も短くなってるわよね。」

音「ああ。未だに遠近感とか分からなくなったりするんだよなあ」

咲姫「へえー、実際には？」

音「昨日皿を一個割ってる……」

咲姫「ああーそれは残念……」

音「ちなみに三日前にはコップも割っている」

咲姫「ああー……」

咲姫「じゃあ最後に、手を上げて万歳の状態お願いできる？」

音「ん、こうか？」

咲姫「じゃあメジャー当ててるわね……」

音「……んう!?!」

咲姫「きやあ!?!・・・びっくりして私も叫び声あげちゃった・・・」

音「ん・・・ちよつ、メジャー当てたまま動かないでくれ・・・敏感なんだ・・・」

咲姫「ご、ごめんね?」

咲姫「じゃあもう服を着ていいわ。お疲れ様」

音「ありがとう。ただ、俺言っておくがスタミナ無いに等しいぞ?そんな状態でオンゲキ出来るとは思わないが・・・」

咲姫「それもそうね・・・あつなら会長にメールするわね?いいこと思いついたの!」

音「ええ?・・・まともな案なんだろうな?」

咲姫「ええ!勿論よ!」

音「・・・信用するからな?」

咲姫「あつ一応聞きたいけれどもし運動するとして週に何回がいいかしら?」

音「んー・・・1、2回が限度じゃないか?」

咲姫「分かったわ。会長に伝えておくわね?」

咲姫「3人とも待たせてごめんね！終わったわよ！」

千夏「お帰りー！」

つむぎ「お疲れ様です」

美亜「美亜ちゃんにも同行させて欲しかったのになー」

つむぎ「こういうのにみゃーが加わるといつつも暴走するじゃないですか。みゃーは駄目です」

美亜「ええー、あつそうだなつち」

千夏「？」

美亜「音先生がなつちとぎゅーしたいって！」

音「え？」

千夏「え!?!いいの?いいの?」

音「・・・駄目じゃない。」

千夏「わーい！せんせーぎゅーーー!!! えへへ、千夏あつたかいでしょ？」

こんなに幸せならいいかな・・・千夏に抱き着かれながらそう考える俺であった。

Here We Go

梨緒「遅いわね・・・あのポンコツトリオは何やってるのかしら・・・」

今の時間は10時40分。もうすぐ2限目の体育が始まる時間。アタシは必ず体育とオンゲキ実習の時間の前にはあかりに宣戦布告をするようにしている。それなのに今日は来るのが遅すぎるわ！あと5分で授業が始まっちゃうじゃない！しかも今日の体育は準備に時間がかかる水泳なのよ？今来たとしても最初から水着に着替えていない限り到底間に合う時間じゃないわ。一体どこで油を売っているのかしら・・・

桜井春菜「遅いわねー。そういえば、あかりちゃんや柚子ちゃんはまだしも、葵ちゃんがまだ来ないって珍しいよねー」

桜井春菜（さくらい はるな）

まあおっとりとして天然な子ね。優しい性格をしているから柚子からは「ママ」なんてあだ名を付けられているわ。ただ一つ、料理の腕が・・・ううっ、調理実習の時のト

ラウマが。なんで健康に良いからって言って納豆をケーキに入れるという発想が思い浮かぶのかしら・・・椿に悪戯として激辛のお菓子とか渡されることがあるけどあれと比べても軍配が上がるレベルでヤバいわ。しかも見た目だけは美味しそうだから初見殺しにも程があるわよね。

梨緒「言われてみればそうね。というか、あかりと柚子も水泳の時は来るの早かったわ。一体なぜ・・・」

春菜「うーんもうちよつと待ってみようよ。」

梨緒「まあそれもそうね。」

梨緒「来ないわね」

春菜「なにしているのかなー」

梨緒「もしかして休んだとかかしら？ちよつとアタシ電話かけてみるわ。葵なら流石に出るんじゃないかしら？」

プルルルル・・・プルルルル・・・

梨緒「繋がったわね。もしも」

葵「ごめんね！今向かってるところだから！あと15秒で着くと思う！」

梨緒「事じよ」

葵「事情は更衣室に来た時に話すから！ごめんね！」

一方的に切られたわね・・・でも何か事情があつたらしいわ。

春菜「どうだったの？」

梨緒「あと15秒で着くらしいわ。事情は着いたら話すって」

春菜「そっか。良かったね。莉緒ちゃんずっとソワソワしてたんだもん」

梨緒「ちよっ!? そんな、アタシはあいつに宣戦布告をするために待つてるのよ!? 本当
にそれだけよ!」

春菜「そんなこといっても」

ガララララ!!!

葵「遅れてごめん皆!!」

柚子「おっまたせー!」

あかり「ごめんね莉緒ちゃんいつも待つてくれるのに・・・」

梨緒「はあ・・・まったくこの最強STRONGER美少女を待たせるとはいい度胸
してるじゃない! 今日の水泳は絶対にアタシが勝つから覚悟してなさい!」

あかり「受けて立つよ! 莉緒ちゃん! あ、でもその前に・・・」

そういつて徐に柚子の抱えていた布に包まれた何かを下すあかり。なにこれ?

梨緒「ねえあかり、それ・・・何?」

あかり「これはー、じゃーん！」

春菜「これって・・・」

梨緒「いや・・・なんで・・・」

梨緒「なんで音先生連れて来てるの?!?!? 仕事中でしょ!?!」

あいつが布を取るとそこに現れたのは目隠しをしたうちの担任。いや、テレビのドッキリじゃないんだから! 意味が分からないんだけど!?!

梨緒「ちなみになんで目隠しをしてるわけ・・・?」

柚子「なんとなく!」

梨緒「なんとなくって・・・」

音「り、梨緒? その声は梨緒か?」

梨緒「え?、あ、アタシはここにいるけど」

音「ここどこか知らないか? あと、俺が目隠しをされてる理由とかも知らないか?」

梨緒「残念だけどアタシは知らないわ。あとここは」

あかり「柚子ちゃん、私達もう着替え終わつたし目隠し取ってもいいんじゃない?」

柚子「たしかに! じゃあマイマイ目隠し取るね?」

音「お、おう。」

柚子「じゃあ、はいっ！これでオツケー！」

柚子の元何も知らない状態で目隠しを外された音先生は・・・

音「うん・・・？つつつ／＼7（L—？」「（L+#^<+&—^（o）

!?!?!?!?
「

途轍もない奇声を発してそのまま白目を向いて倒れたわ。そういえばここ女子更衣室だったわね。それでもって今思い出したけど音先生って元男じゃない。最近実感湧かなくなってるけど。まあご愁傷様ね。

うつ頭が痛い：：なんかここ最近気絶してばっかな気がする。というわけで音だ。柚子に目隠しをされて攫われて・・・そのあとの記憶が凄くあやふやだ。そう思い目を開

けるとそこには奏坂の広い屋内プールがあり……ん？

音「え、プール!?なんで俺こんなところに……」

柚子「柚子が連れて来たんだよー!」

音「いや、お前が犯人か! 2限は特に急用もなかったとはいえ、なんで連れて来たんだよー!」

柚子「だって会長から聞いたよ? マイマイ今よわよわだから体育の授業とかに参加させればいいんじゃないかって!」

音「休日のあれはそういうことだったのか……だからといって教師を授業に強制参加させるやつがいるか!」

柚子「はーい!」

音「元気いいな! そうじゃないんだよ!」

柚子「まーまー、マイマイも復活したんならはやく皆のところにいこ? 待つてるよ?」

音「はあ……仕方ないな。分かった」

柚子「いえーい! あ、そうだこれに着替えてね!」

音「ん? これは水着?」

柚子「そーだよ! 柚子が借りてきたの!」

音「そ、そうか・・・」

取り合えず渡された水着に着替える。青色のよくある普通の学校用水着だ。胸のところには学年と名前が書いてあつて・・・「I—A あります」・・・？

音「ゆ、柚子？」

柚子「なーに？」

音「これ、もしかしなくても有栖のやつ？」

柚子「そーだよ！くまちゃん（有栖のあだ名 着ている着ぐるみより）から借りてきたの！」

音「いや、保健室とかで借りればよかつただろ！なんでわざわざ・・・」

柚子「だってマイマイちっちゃいから合う水着ないもん」

音「そうか・・・そうですか・・・」

ショック。すごくショックだ。そう思いつつ着替える。今は同性とはいえ流石に着替えをまじまじと見られるのは恥ずかしい。柚子には出てもらおう。

音「柚子、恥ずかしいからその、先行つてもらえないか？」

柚子「やだ！柚子が目を離したらマイマイ帰っちゃうでしょ？」

音「帰らないってば！」

柚子「でも柚子はここで待つてるもんね！」

音「うう・・・分かったよ着替えるよ・・・ちよつ凝視しないでくれ！」

柚子「顔赤くなってるー！かわいー！」

音「もうやだ・・・」

そんなこんなで着替えた。有栖の水着はサイズもピッタリだが、この水着の感触はこ
う・・・男の時とは違つて肌に直接触れる感じがどうしても意識してしまう。

柚子「じゃあいこ？ほらほら！」

音「ちよつ手を引つ張るなつて！」

俺本当に出ないといけないのか？柚子の力が強くて振りほどけない。大人な筈の自分
が生徒と同じ格好をして授業に参加して・・・とても恥ずかしい。顔が熱くなつてい
るのが分かる。そうこうしている間にあつという間に皆の元に連れてこられてしまつ

て・・・

柚子「おっまたせー！マイマイ連れて来たよー！」

Splash Dance!!

蜜柑「という訳で・・・フフツ・・・授業を・・・フフツ」

音「笑うな！こつちだつて恥ずかしいんだ！」

蜜柑「仕方ないじゃん！こんなの笑うしかないでしょ！」

音「水着は仕方ないだろ！」

蜜柑「水着もそうだけど生徒に混じつてるのが違和感0なのが最高過ぎる。ちよつと写真撮つていい？」

音「いや、流石に仮にも授業中だぞ？」

蜜柑「へえー。じゃあ誰かに聞いてみたら？」

そう言われたので隣で座る梨緒に聞くことにする。まあ流石に授業優先つて答えが返つてくる筈・・・

音「さ・・・流石に授業優先した方がいいと思うよな・・・？」

梨緒「なんでアタシに聞くのよ・・・でも珍しい姿を見て面白いからアタシは写真

撮るのに賛成よ！」

音「んな……じゃ、じゃあ葵！葵は俺の意見に賛成だよな？」

葵「私は写真撮るのも数分しかかからないと思うし、いいと思うよ」

まともに反対意見返された。うちのクラスって頼れる人がこの2人くらいしかいないから正直もう希望はない。

蜜柑「そういう訳で逃げ場はないぞ舞さん！さあ！写真を！これは担任を加えたクラスの集合写真だからやましいことなんて決してないんだから!!!」

音「動機が不純すぎるんだよ！絶対やるか！」

蜜柑「そんなこと言わずに!!!さあ!!!」

音「絶対駄目だ！」

柚子「もーマイマイぶんすこしちやめー！柚子と写真とるの！」

蜜柑「そうそう！柚子抑えてて！」

音「はーなーせー！」

春菜「もう、そんなに暴れちゃ駄目だよ？」

音「くっ、お前も蜜柑の味方に着くというのか！」

春菜「うーん、写真撮るだけだし、そんなに暴れることもないと思うんだけど・・・」
音「うるさい！蜜柑は俺を笑い者にするんだ！」

蜜柑「ちよっ！舞さん語弊がありますってそれは！でも嘘ではないから強く否定できない！」

音「嘘じゃないじゃんか！なんとしても撮らせる訳にはいかないんだ！」

なんとしても・・・なんとしても・・・

蜜柑「あつ春菜ちゃん、ここだけの話、舞さんはなでなでが効くよ」

春菜「そうなの？やってみるね！」

音「おいましてその手はなんだ、俺は愛玩動物じゃないんだぞ？」

春菜「大丈夫だよ？」

音「やめろ！撫でさせようとするんじゃないよ・・・」

柚子「左手かくほー！あーちゃん、右手お願い！」

あかり「分かったよ柚子ちゃん！」

音「ちよっ!?!手がつ!?!」

両手を掴まれて塞がれてしまった。ここ最近の俺生徒達にいいようにやられ過ぎな気がする

春菜「音先生、よしよし♪」

音「うあ・・・なにこれ・・・」

一瞬で多幸福感が体を包んだ。頭がふわふわして思考がさだまらない。あつたかくて、きもちよくて、ていこうするいしが・・・これ・・・やばい・・・

音「はひい・・・」

蜜柑「今がチャンス！舞さんが蕩けてるうちに写真とろ！はい！チーズ！」

パシヤリ

蜜柑「よし！あとで皆のL！neに送っておくよ！お礼に今日は準備運動終わったら自由でいいよ！」

柚子「やったー！」

葵「いや、いいの?」

蜜柑「別に監査とか入る訳でもないからヨシ!」

葵「この自由な感じ、やっぱり血を感じるよ・・・」

梨緒「はあ、仕方ないわね・・・音先生起こして準備運動するわよ。春菜、先生貸して」

春菜「ええー、ほら見て、音先生肌ぶにぶにで髪サラサラで気持ちいいんだよ?」

梨緒「気持ちいいのは分かったわ。でも先生抱えたままじゃ準備運動できないでしょ?」

春菜「はい。でも、貸してっていうことは、梨緒ちゃんも触りたいの?」

梨緒「違うから。アタシはさっさとあかりと対決したいの」

春菜「よくわかんないけど、あげるね?」

梨緒「いつから先生から所有物にジョブチェンジしたのかしら・・・ほら、さっさと正気に戻りなさい」

あたまがゆれる。さつきまでのぼかぼかがなくなっただんだんと思考が明瞭になつていつて……!?!?

音「お、俺……俺……」

梨緒「正気に戻ったようね。気分はどう……つてその様子だと聞くまでもなさそうね。」

音「穴があつたら入りたい……」

梨緒「まあ、今回はアタシも同情はするわ。」

音「同情するな……余計惨めな気持ちになる……」

梨緒「……めんどくさいわね。」

さて、なんとか準備運動も終わった。それにしても自由か。大人はこういう時自由で言われると何をしていいのか分からなくなってしまう。

梨緒はあかりに勝負を吹っ掛けに行ってしまったし、春菜に近づいた暁には俺は次にどんな醜態を晒してしまうのか分からない。柚子は論外。蜜柑も同じ。・・・よし、葵のところに行くか。

因みに準備運動だけで体力の八割がた持ってかれたとかそんなことは決してない。今歩いていて息切れしてるけど既に疲れてるとかそんなことはない。決して。

葵「あれ？先生どうしたんですか？」

音「いや、自由って言われても何をしたらいいのか分からなくてな・・・」

葵「まあ取り合えず水の中に入りましょうよ」

音「まあそれもそちだな。ところでどのくらい深」

葵「せ、先生ー?!?!?!」

あぶっ!? 溺れ!? 水がっ!?

音「はあ・・・はあ・・・助かった・・・俺生きてる・・・」

葵「なんで飛び込もうとしたんですか」

音「いや、梯子遠いし」

葵「じゃあ手掴まります?」

音「ああ、ありがとう。でもそれだと葵は泳げないか?」

葵「私は大丈夫ですよ。でも・・・」

音「でも?」

葵「ちゃんと元気になったら、オンゲキの相手してくださいね!」

音「・・・そうだな。それもいいな。でもASTERISM色々あつて強くなつたし、全盛期の俺でも勝てないくらい強くなつたんじゃないか?」

葵「流石に私達もそこまでは行つてないですよ。でも、私達がシューターフェスで優勝したのも、先生が練習場所を用意してくれたり、色んな見えないところで頑張つてくれたお陰ですよね?」

音「あはは、バレてたか。」

葵「そういう訳ですからこれは恩返しの一つと思つてもらえれば大丈夫です。手に掴

まっ
つて
く
だ
さ
い
。」

音「よし！期待に応えるためにも頑張らないとな！」

数分後・・・

音「はあ・・・はあ・・・もう無理・・・足が動かない・・・」

葵「先生・・・本当に体力無くなってしまったんですね・・・」

音「実を言うとう準備運動の時点でもう八割がた体力無くなってたんだ・・・」

葵「これは取り戻すのに時間がかかりそうですね・・・」

音「ちよつと休もうと思う。俺はベンチで休憩することにするよ。」

葵「お大事に・・・」

ベンチに寝転がる。行儀は悪いがここでは咎める人もいないし大丈夫だろう。このままじゃこの先が思いやられるなあ・・・本当に自分は生徒にとつて良い先生だと言えるのだろうか・・・この体になって時々不安に思ってしまう。自分は助けられてばかりで果たして生徒の役に立つことを出来てるのだろうか・・・葵と約束をしたけど卒業するまでに果たせるだろうか・・・

自分は・・・生徒に必要とされているのだろうか・・・

蜜柑「あー！舞さん寝てるじゃん！あれ？もうギブアップしたの？」

音「足がもう動かないんだ・・・放っておいてくれ・・・」

蜜柑「えー！じゃあここでもし春菜ちゃんとかが近づいてきても抵抗出来ないってこと？」

音「ああ、多分逃げることは出来んだろうな」

蜜柑「ですって春菜ちゃん！やっっておしまい！」

音「えっ」

春菜「はーい。先生疲れてるから、私が癒して上げるよ？」

音「ちよっ!?!これは逃げないと・・・いだっ!?!足が攣って・・・」

梨緒「せ・・・先生？」

音「えへー・・・もつとなでなで・・・ぎゅー・・・」
梨緒「ひっ!?!先生本当に大丈夫!?!」

A i C

葵「もうそろそろ機嫌直してもいいと思うんだけど・・・」

音「うるさい。俺の今の気持ちなんてどうせ分かりはしないんだ・・・」

あの後、自我が戻ってきたのは授業も終わって食堂の中。足の痛みと共に思い出したのは春奈だけでなく、他の生徒にまでべったり甘えていた自分の記憶。こんなの・・・こののは・・・他の生徒に向ける顔がないじゃないか！別に春奈が悪い訳ではない。悪いのはどんどんおかしくなってしまっている自分だ。そのうち自分が教師であったことも忘れてしまう日が来るんじゃないか・・・

葵「せ、先生!?!泣かないで下さいよ!」

音「泣いでない・・・」

だからこんな惨めな姿を見せている場合じゃないんだ・・・

音 「なあ、葵」

葵 「どうしたんですか？」

音 「俺は、このままやってけるのかな・・・」

葵 「先生・・・」

先生が初めて本心から弱音を話した気がする。先生がこうなる姿になる前も、先生はいつも一人で溜め込んで自分の弱音は見せないようにしていた。例えば、補修通いのあかりに対して勉強が進むようにオリジナルで授業を噛み砕いたプリントと問題集を作って持ってきてくれた時があった。あかりはそのおかげもあって座学系の授業の成績も上がったんだけど、プリントの束を持ってきてくれたその日、先生は目の下に隈を作ってどう見ても寝不足のようだった。でも私がそのことを言っても、「なんてことは

ないよ」って言つてそのまま去つてしまった。少しふらついた足取りで。先生はいつも私達のことを思つて行動しているけど、自分のことに無頓着すぎる節がある。つまり何が言いたいかつて言うと、今ここで弱音を吐いた先生は精神的にも限界が来ていることは間違いないっていいこと。でも先生は私達から助けさせてほしいって言わない限りは自分で無理をし続ける。だから・・・

絶対に、助けなきや。

その為にも、私がみんなに伝えないと。

まただ。また泣いてしまった。葵に慰められて落ち着いたころにはあと少しで3限が始まるというところ。俺に構って葵が遅刻するのは良くないので無理をいって返してきた。そんなわけで、急いですっかり冷めてしまった昼食を食べていると・・・

有栖「時間ある？」

音「食べながらでいいならあるぞ。お前も遅刻しないようにな」

有栖「ん、大丈夫」

音「ならいいが」

有栖「土曜日、私の家に来て。」

音「え？・・・ああ、分かった」

有栖「ん。それだけ・・・」

伝えたいことだけ伝えて去ってしまった・・・やっぱり何を考えてるのかさっぱり分からないな・・・まあ、いいか。

葵「咲姫先輩って、音先生の近所に住んでましたよね？」

咲姫「ええそうだけど、何かあったの？」

今は放課後の時間。私は咲姫先輩の元へと急いでいった。咲姫先輩は頼りになるからもしかしたらいいアイデアを出してくれるかもしれない。

咲姫「なるほどね・・・私は家も隣だし、何か出来るかもしれないわ。それなら、美亜とか小星とか他の人にも伝えていいかしら？人は多い方がいいと思うのだけど・・・」

葵「お願いします！私もあかり達や莉緒達に相談するので！」

咲姫「分かったわ。そうね、すぐにできることなら・・・次の土日、用事とかないなら一緒に出掛けるのもありかもしれないわね。ただリフレッシュになるかしら・・・」

咲姫「もしもし？先生いるかしら？」

音「ああ。どうしたんだ？」

咲姫「土日の予定開いてるかしら？」

音「うーん・・・土曜は少なくとも無理だな。有栖の家に行くことになっている」

咲姫「へえー、何か用事でもあるの？」

音「それが分からないんだよなあ・・・」

咲姫「ねえ、それ私も着いて行っつていいかしら？」

音「？・・・ちよつと聞いてみるよ。」

咲姫「分かったわ。じゃあ切るわね。」

音「ああ」

有栖にL! neを送ったら速攻で帰ってきた。いいらしい。なんなら沢山人連れて来てもいいとか。一体何を企んでいるんだ・・・？まあ考えても無駄か。風呂入って寝

るか。

その日、寝るときに体が冷え切るような悪寒がした

Girl's Party Planet!

音「何というか、確かに豪邸とは聞いていたけど、これはアニメとかゲームの世界でしかないレベルじゃないか？」

咲姫「うーんいったいどの位広いのかしら……」

そんなわけで今日は土曜日。有栖の家に行く約束の日だ。俺と咲姫は送られた住所を元に有栖の家までやって来た。……なんとというか、扉の時点で豪邸っていうのが伝わって来る。インターホンを押し、要件を伝えると……

茜「よく来たな！入っていいぞ！」

音「いや、なんでいるんだよ」

咲姫「早々に暗雲が垂れ込めてきたわね……」

それはそう。というか何故有栖じゃなく茜が出るんだよ

音「で、用事って言ってたけど何の用事なんだ？」

茜「さて、お前はその姿になって初めて学校に来る前日に私が何て言ったか覚えてるか？」

音「前の日？」

茜「ああそうだ。私が電話しただろう」

音「うーん．．．思い出した！確か手を打つみたいなこと言ってなかったか？俺が受け入れやすくするために」

茜「正解だ。今日の用事はそれに関連するものだ。」

音「俺が登校して3週間位立っている気がするが．．．」

茜「遅れた訳ではないぞ。準備が整っただけだからな。さて、有栖！楓！例のものを持ってくるがいい！」

茜がパチンと指を鳴らすと横の扉が開き有栖と楓が入ってきた。．．．大量の服と共に

九條楓（くじょう かえで）

暴走する生徒会長、茜をセーブする役割を持つ大事な生徒会長の参謀。そして茜、有

栖と共にR・B・P・というユニットを結成している。堅いと言われることもあるが真面目な性格をしていてなくてはならない存在となっている。だがしかし一つ欠点があり、途轍もない機械音痴なのだ。その為学校のお知らせは全て筆で手描きで行っている。正直達筆すぎて読めないのが茜による電子版のお知らせを見ている。

有栖「ん、持ってきた」

楓「会長、こちらでよろしいでしょうか？」

茜「ああ、これで合っているぞ。」

音「ええと・・・その服は・・・？」

茜「私があの日昼から登校するように指示を出したのを覚えているだろうか？」

音「ああ。ただそれとなんの関係が？」

茜「1、2時間目を潰して衣装コンテストを開催した。そこに並んでいるのが生徒達が考えた一番似合いそうな衣装達だ。」

音「はあ・・・はあ!?! えつつまり今から俺は・・・」

茜「その服を全て着て写真を撮って一番を決めてもらう」

音「う、嘘だろ・・・なあ咲姫からも何か言って・・・あれ? 咲姫? どこにいるんだ?」

茜「咲姫ならそこだ」

そういつて茜が指している方を見ると・・・

咲姫「これ、全部オーダーメイドなの!?わ、私もこの服たち着ていい?着て先生とツーショットとか取ってもいい!?!」

服を手を取って物凄い興奮した様子で有栖に話しかけてた。てかツーショットで。羽目外しすぎではないか?

茜「そういうわけで、お前にはもう頼れる者なの誰もいないって訳だ。分かったらさっさと脱げ!でないとクビだ!」

音「無茶苦茶すぎるだろ!」

茜「ごちやごちや五月蠅いぞ!楓、やれ。」

楓「承知しました。舞原様、失礼します。」

音「ちよつと!?!」

楓の身長は男の時だった自分とほぼ同じだ。それに加え趣味は武道全般で体が強い。一瞬で手玉に取られて……。

楓「ではまずこちらの服ですね。姿見を持ってきます。」

あつという間に着せられてしまった……抵抗するとかそういう問題じゃない。一体何が起こったんだ……？そして今俺が着ているこの服は……制服？それも奏坂中学のもの。

楓「こちら姿見です。」

音「ああ、どうも……」

うわー俺完全に中学生じゃん。正直美亜より背低かったし中学生に混ざっても違和感ない気がする。こんなこといっちゃいけないんだらうけど。

咲姫「ねえねえこの服着て見な……」

音「さ、咲姫？」

咲姫「尊い……」

音「え？ええっ!?なんで土下座してるんだよ!？」

咲姫「これは尊き者に捧げる五体投地……」

音「いや意味わからんから」

咲姫「ついでにその服着て後で美亜達と写真撮って下さい……」

音「願望漏れ出てるじゃん」

有栖「ん、こっち向いて」

音「え？」

パシヤリ

有栖「よし、次」

音「ちよっつなんで写真取られ……うわあ!?!またかよ!?!」

次に着せられたのは……なんだこれ？自分に知識がないのは確かだが少なくとも外出用ではない気がする。頭に大きなリボン付けられたし

音「え、これ何？何の服？」

茜「それは袖子のパジャマをお前用にサイズ調整してもらったものだ。」

音「私服じゃないじゃん！」

茜「私服（但し私服の定義は考える人に任せる）だが何か問題あるか？」

音「問題大有りだよ！パジャマは私服とは言わんだろ！」

茜「よし、次いくぞ」

茜「次！」

茜「次！」

その後も色々な服を着せられた。オリジナルの衣装もあったが誰かの私服を再現と
いうのも少なからずあったようで、特にきつかったのが小星の私服再現だろうか。少し
サイズの大きいTシャツとスポーツブラというかなり簡素なもので、はみ出た肩から素
肌が見えてしまい凄く恥ずかしかつた。さて、これで最後か・・・着せ替え人形はもう
懲り懲りなんだが・・・

茜「ほう……ほうほうこれは凄い！飛び切り似合うじゃないか！ほら、鏡見ろ！」
音「うわあ……」

そこに映っていたのは音楽ゲーム *Arcade* に出てくるキャラクターの一人である対立のコスチュームに身を包んだ自分。いや、似合いすぎじゃないか？自分で言うのもなんだが。スカートを手で摘まんだりしてポーズを取ってみる。これは……可愛い……自分だけで。でも悪い気はしないかもしれない。

咲姫「はうわっ?!?!」

床に転がっている咲姫は無視するか。なんか見てはいけない一面を見てしまったよ
うだ。

音「それで、これで全部か？」

茜「ああ、こんな時間までご苦労だったな。泊っていつでもいいぞ」

音「いや、お前の家ではないだろ」

有栖「ん、問題ない」

楓 「有栖様の家は広いですから、心配はなさらなくて大丈夫ですよ。」
音 「そ、そうか・・・」

ガチャリ

セツナ「来客か？」

有栖「セツナお姉さま・・・」

セツナ「・・・おい。」

音「な、何か問題でもあったか？」

セツナ「ああそうだ。今日の0時、屋上にて待つ。話はそこでしよう」

音「え？・・・ちよつと待つて」

バタン

音「いってしまつたか・・・」

「セツナはあ……医者の不養生とは、よく言ったものだな。確かに「あれ」は、問題だ。」

ゼーレンヴアンデルング

セツナ「来たか。待ちくたびれたぞ」

音「いや、俺は時間ピッタリに来たと思うが・・・」

セツナ「せめて5分前行動は意識しろ。社会の基本だ。」

昼間にセツナに夜に屋上まで来るように言われた。いや、俺も本当であれば10分前にはつくはずだった。家が広大過ぎて迷うとは思わなかったんだ・・・しかも深夜だし尋ねようにも迷惑かもしれないので尋ねることも憚られてしまう。

音「すまん、少し迷っていたんだ。」

セツナ「まあ時間通りに来たならいいでしょう。座るといい。」

音「ああ、そうさせてもらうよ。で、話つてなんだ？二人きりにする必要があるくらいには重大なんだろう？」

セツナ「そうだな。話とは、今のお前の現状のことだ。お前は軽く見ているようだが、何もわかっていない。」

音「ん？俺の現状のこと？」

セツナ「一体何の話をさせると思っていたんだ・・・？」

音「例えば、俺をクビにするとか」

セツナ「自分をそこまで卑下するのはどうかと思うがな・・・まあいい。分かっているようにだから順序だてて話していく。途中でお前に質問を投げかけるが直観で答えてもらって構わない。」

音「分かった。」

セツナ「じゃあ早速だが、私が海外のシューターズスクールで負のオンゲキを学んだことを知っているよな？」

音「ああ、勿論。」

皇城セツナ（すめらぎ　せつな）

有栖の姉で負の感情をぶつけてオンゲキをする「負のオンゲキ」の提唱者。帰国して奏坂を乗っ取り生徒に負のオンゲキを強要させようとした前科がある。だがその野望はASTERISMの手によって打ち破られた。

セツナ「負のオンゲキを学ぶ道すがら、私は「感情」とは何かということも学習する

必要があった。その為、私は「感情」について自身で定義づけることにした。」

音「「感情」について・・・」

セツナ「そうだ。早速だが最初の質問だ。「感情」とは結論のところどういいうものか。これは私の定義にそつて正誤を判断する。」

音「概念的だな。正直答えを絞ろうにも絞れないぞ。」

セツナ「それもそうだな。じゃあ三択にしよう。「スカラー」、「ベクトル」、「位置ベクトル」この3つの中に答えはある。」

スカラーは量のみをもつ。ベクトルはスカラーに加え方向を、位置ベクトルは更に位置も定義する。感情に「方向」というのはあるのか？少なくとも感情に「量」という要素があるのは確かだ。同じ「嬉しい」という感情も度合いというものがある。だが、「方向」というのは存在するのか・・・？

音「「スカラー」か？」

セツナ「不正解だ。正解は「位置ベクトル」だ。じゃあ解説に移ろう。」

音「「位置ベクトル」!?真逆じゃないか!？」

セツナ「今から解説するといっているだろう。まず「感情」には「量」という要素は

少なからずあるのは分かるな？」

音「それは分かった。例えば「嬉しい」を例にとってもテストで満点を取るのと宝くじで一等が当たるのでは段違いだからな。」

セツナ「そうだ。じゃあ「方向」についてだが、お前は誰かに対して何らかの「感情」を抱くことはあるな？」

音「それは勿論・・・なるほど、これが「方向」の意味か。」

セツナ「そうだ。「感情」は指向性を持つ。例えば誰かが誰かに対し憎んだり、祝福したり、ここには「方向」を持った「感情」が存在する。そして、感情は全て自始点でのものに過ぎない。自分自身が他人から他人へ向けられる「感情」というのは予測は出来ても正確に推し量ることは不可能だ。あくまで「感情」とは自分を始点として向けられるものでしかない。」

音「なるほど、理解した。」

セツナ「だが、「感情」は普通の位置ベクトルとは違う。それは始点と終点が一致するにも関わらず「量」を持つこともあるからだ。」

音「始点と終点が一致するということは・・・自分自身に向けられる感情か？」

セツナ「その通りだ。お前が例に出したテストで満点や宝くじは自分自身に向けられる「感情」にあたる。では次の質問だ。先は自分自身に「正の感情」を向けた時の一例

に過ぎなかったが、自分自身に「負の感情」を向ける時というのはどういふときか分かるか？」

音「・・・「後悔」とかか？」

セツナ「まあいいだろう。「後悔」は過去の自分自身に向けた怒りと近似することができる。これも自分自身に向けた「負の感情」に違いはない。」

なんとなくだが、テーマが見えてきた気がする。自身に向けた「負の感情」ということがテーマになってきそうだ。

セツナ「さて、私が海外のシューターズスクールに通っていたときの話に移ろう。ここでは日本では考えられないような過酷な環境で「負のオンゲキ」を強要させられていたわけだが、「負のオンゲキ」というのは当然ながら「負の感情」なしには成り立たない。「負の感情」をエネルギーとして相手にぶつけることで成り立つものだからな。」

音「そうだな。そう言っていた記憶があるよ。」

セツナ「私のクラスにとある生徒がいた。「負の感情」を相手にぶつけるのに嫌気がさし、罪悪感からかその「負の感情」が自分に矛先が変わってしまった人だ。「負の感情」というのは相手に向ける分にはいいが自分に向けるのは危険だ。それは何故か分かる

か？」

音「自傷行為になるからか？」

セツナ「まあそれもある。だが根本的な違いがある。「負の感情」はエネルギーに換算したときに強力な力を発揮する。相手にぶつけることでそれは発散されるが、自身に向かった場合、そのエネルギーは解消されずに溜まっていく。従って減少することはない。」

音「相手に向けた場合は自分の「負の感情」を消費するが、自身に向けた場合は増幅するだけで消費される訳ではないということか。」

セツナ「その通りだ。では、次第に「負の感情」が溜まっていったその生徒はどうなつたか分かるか？」

音「退学か？」

セツナ「不正解だ。正解は・・・」

セツナ「自殺だ。」

音「じ、自殺!？」

セツナ「負の感情」とはそれだけの力があるということだ。人を自分から自殺に追い込むくらいにはな。」

音「そうか・・・だが」

セツナ「俺には何の関係もない」、と言いたいんだろう?」

音「っ!？」

セツナ「言わしていただこう。「負のオンゲキ」を極めた私は他人の「負の感情」も手に取るように分かるようになった。お前からは膨大な「負の感情」が感じ取れる。そしてその矛先に向いているのは・・・自分自身だ。」

セツナ「声も出ないか。まあ現状を突き付けられるのは誰だつて辛いだろう。だが理解はしておくに損はない。お前は何一つ分かっていなかったようだからな。」

セツナ「いいか、「感情」は正確に推し量ることは出来ずとも、予想は出来るといっただろう。他の生徒から自身に向けられた感情について何か勘違いをしていないか？」

セツナ「面と向かってが嫌なら生徒会でも聞いてやつてもいい。とにかく、今の前の精神状態はボロボロだ。いつ「二の舞」を演じてもおかしくはない。」

セツナ「自身を「肯定」しろ。「変化」を受け入れろ。私に言えるのはそこまでだ。」

GranFatalit・

・・・眠れない。

私、柏木咲姫は先生を着せ替え人形にした後ご飯を頂いたりお風呂に入ったりした後、用意された来客用の部屋に通されたわ。

眠れない原因は分かっている。皇城さんのあの言葉。今頃先生は屋上で二人で何かを話していると思う。

もし、もしも学校から退くように勧告されていたりしたらどうしよう・・・。美亜も言っていたけど、皇城さんはとても厳しい人。今の現状を見かねてそんなことを言うてる可能性も十分にあり得るわけで、すごく不安。

どうか、どうか無事で「コンコン」いて欲し・・・い？

今は1時。こんな時間に用があるなんて誰かしら？そう思いながら部屋のドアを開けると、そこにいたのは・・・

音「ううつ、咲姫、咲姫い！ひぐつ、ごめつ・・・あのつ」
咲姫「せ、先生!?!だ、大丈夫!?!」

そこにはガタガタと体を震わせてポロポロと涙を溢れさせ泣いていた音先生がいた。

咲姫「と、とりあえず中に入って！どうしたの？」

先生が中に入るや否や、私に手を回して抱き着いてきた。身長が美亜と同じくらいだから昔の美亜のことを思い出す。

咲姫「ど、どうしたの？」

音「ごめん・・・もう少し・・・このままで・・・」

咲姫「・・・ええ、大丈夫よ」

私のその言葉を聞いた途端、先生は顔を埋めて泣き出してしまった。今の私にできることはただ一つ、先生の気持ちがあ少しでも楽になるようにしてあげることだけ。

私も片腕を先生の背中に伸ばし、もう片方の手で頭をゆつくりと撫でる。

先生の体は冷たくて、そして震えていて、触れているだけでも私に不安がありありと伝わってくる。

でも、それでも少しずつ震えは治まってきて、呼吸も安定してきて、涙も治まってきたようだった。

音「ありがとう・・・もう大丈夫・・・全部、話せるから・・・」

咲姫「本当に大丈夫なの？無理してない？」

音「・・・無理なんかしてないよ。」

咲姫「私、皇城さんに退職を勧めるよう言われたのかと思つて・・・」

音「え？な、ないない！大丈夫だつて！」

咲姫「ならひとまず安心ね。で、何を言われたの？」

音「その・・・」

その後、先生から聞いた話によると、自責の念に自分が囚われてこのまま放置しておく大変なことになるといふこと（具体的にどんなことかは教えてもらえなかった）、そして今の自分を肯定し、変化が起こったことを認めると言われたらしい。

どう考えてもまだ何か隠しているとは思うけど、無理に迫及するのもよくないから後

で皇城さんに聞くことにしよう。教えてもらえるかどうかは分からないけどね。

音「その、話聞いてくれて慰めてくれてありがとう……。お、おやすみ……」

そういつて扉に手をかけて開けようとする先生だったけど、周りをうろろうろして申し訳なさそうにこちらを見ると、

音「ご、ごめん……。えっと、その……」

音「一緒に、寝て欲しくて・・・」

その姿に一人で眠れなくて私の部屋に来た幼いころの美亜を重ね合わせてしまった
のではないしょ

翌日、私が一番に目にしたのは気持ちよさそうな先生の寝顔。
特に悪夢にうなされるようなこともなく、心地よく眠っているようで良かった。

音「んう……」

咲姫「あら、起きたかしら？」

音「おはよ……」

咲姫「ふふつ、おはよう。」

そういつて私がそれとなく先生の頭を撫でると先生はへにやつとした笑顔を見せて……

音「えへ……きもちい……」

そんなことを私に言ってきたのだった。

音「は……はひ……忘れて……忘れてくれ!!!!頼む!!!!」

その後顔を真っ赤にして布団を頭から被り、隠れて布団の塊となった状態でそんなことをいった先生に萌えたのもないしよ

Memories of O. N. G. E. K. I.

有栖「ん、これ」

音「これは・・・俺のオンゲキのデバイス？」

咲姫と一緒に大広間に向かい、朝食を取った後、有栖からなぜか俺のオンゲキのデバイスを渡された。・・・いや、なんで持つてるんだよ。

有栖「改造した。」

音「か、改造!?!ちよつと待て何やったんだ!?!」

有栖「オンゲキが出来る。以上」

音「以上じゃないだろおい!」

改造(?)前でもオンゲキはできる。まあ俺は武器とかシュータードレスの関係上まともに動けるような代物ではないが。正直なにを変えたのか全く分からない。というか改造って何?俺のデバイスに一体何が起こっているんだ?

咲姫「じゃあ一回それ使ってみたらどう？」

有栖「ん。それがいい」

音「え？いや俺もう自分の武器に潰されるとかいう想いしたくないんだが・・・」

有栖「やる」

音「有無を言わさないじゃん・・・え、マジでここでやるの？」

有栖「やる」

音「・・・分かった。じゃあ一旦離れてくれ。人が近くにいたら出来るものも出来ない。」

有栖「ん」

音「じ・・・じゃあいくぞ？」

特有のデバイスの起動音と共に身に付けられたいつものシュータードレ・・・え？・・・なにこれ。動きやすい。視界に入る服がどう考えてもいつものものと一致しない。と
うか手に持つてる武器もおかしい。なんだこれ!?俺今どんな格好してるんだ!?

音「ちよつ鏡持ってきてくれ!俺今どんな格好してる!?!」

咲姫「鏡とカメラ持ってきたわ！」

音「カメラはちよつといらぬい」

咲姫「大丈夫、私が撮る用のカメラだから」

何も大丈夫じゃないんですがそれは

音「えーつと・・・うわ、うわわわ・・・す、凄いなこの服・・・」

ヒラヒラしたドレスに背中にあしらわれた透明で綺麗な羽はまるでアニメやゲームに出る妖精を彷彿とさせ・・・そして手に持たされている武器となるものは・・・指揮棒か。杖型の武器だから子供の体型をしている自分にも使いやすいうようになっていて。不本意ながら、凄く動きやすい・・・不本意だが。

有栖「どう？」

音「う、動きやすい。杖型になっている分武器も軽くて使いやすいと思う。改造つていうのはこういうことだったんだな。」

有栖「でしょ。次学校で会った時にセツナお姉さまにお礼いってね」

音「セツナが・・・そうか。お礼を言っておこう。」

俺と話している時間が1時間として、このデバイスの改造の時間も含めたら、寝る時間なんてないんじゃないか？

有栖「ん。以上。帰ってよし」

音「そうか、何から何までありがとう。咲姫、カメラ構えてないで帰るぞ」

咲姫「あと1ショットだけ・・・」

音「よしおいてくか」

咲姫「待つて！私一人だと家に帰れない！」

仕方ない。咲姫の方向音痴は筋金入りだからな

咲姫「そういうえば、そのデバイスずっと手に持っているけど、気に入ったの？」

帰り道に咲姫にそう言われた。はっとして自分の腕を見下ろすとそこにはしつかり握つてある自分のオンゲキ用デバイス（改造済み）。好きなものを買ってもらった子供みたいで恥ずかしい。

音「あ、う・・・そ、そうだな。子供らしくはしゃいでしまった。」

咲姫「ふふ、その反応だと気に入ったってことね。気に入ったってことは、またオンゲキが出来るかもしれないわね。やりたくない訳ではないんでしょ？」

音「ん？それはそうだな。ずっともう出来ないと思つていたけど、やっぱり出来るならまたオンゲキしたいよ。」

咲姫「へえ・・・ねえ先生」

音「どうしたんだ？」

咲姫「先生って、どうして先生になろうと思つたの？」

音「あーそれはな、俺が高校生くらいの頃まで遡るな。」

咲姫（良くて中学生レベルの見た目の先生でこう言う違和感が凄いわね・・・）

俺が高校生くらいの頃、そのころはオンゲキってスポーツが生まれて2、3年くらいの頃かな？俺もASTERISMと同じ感じで見たんだよ。プリメラのオンゲキを。

その時にオンゲキってスポーツのファンになって「やってみたい！」って思ったんだ。ただ、その頃オンゲキって女性がやるものっていうイメージがあったんだ。今でこそ男性シューターはそこそこいるオンゲキだが、オンゲキ初期のころって男性のシューターはいなかったんだ。

咲姫「だから、少しでもオンゲキに携われるような教師に？」

まあ、そうだな。少しでもこのオンゲキっていうスポーツの力になればいいなと思つて教師資格を取つたり、技術系の検定を取つたり、あとはオンゲキアドバイザーの試験、それから音楽系統、色々とつたよな。そんな努力の成果もあつて今俺が奏坂にいるってわけだ。

まさか、オンゲキをやってみてみたいって夢が教師になって叶うなんて思つてもみなかった

たけどな。

咲姫「そんなにも努力をしたのね・・・」

「努力をしたたのも俺がオンゲキのことを好きだったからなんだろうな。シューターも、ステージも、バトルも、オンゲキを形作る要素全てに魅せられたんだ。

咲姫「ねえ」

音「ん？どうした？」

今の自分なら思いっきりオンゲキ楽しめるんじゃない？

夢を叶える場所

本日は平日。ここ最近では咲姫と小星と一緒に登校するのが習慣になっている。

・ ・ ・ いつも咲姫におんぶしてもらいゲームしながら登校している小星ははたして登校していると言っているのかは不明だが。

咲姫「そういうえば、昨日からちよつと変わったわよね。こう、憑き物が落ちたみたいな感じがして。」

音「そうか？ うーんでも、確かに昨日の言葉で気は楽になったかもしれないな。」

小星「おーヒメやるじゃん。確かにここ最近ずつと思いつめてたみたいだし、気が楽になるのは良いことだぞ。スコアも上がらないしな」

咲姫「それはあんた限定の話でしょ！」

小星「まあまあそれは置いて、で、ヒメは実際なんて言ったの？」

咲姫「ちよつ流石に恥ずかしいわよ・ ・ ・」

小星「いーじゃん減るもんじゃないし。先生もそう思うでしょ？」

音「え？ ・ ・ ・ あ、うん。まあ、そうじゃないか？」

小星「はい、というわけでヒメ、さっさと教えろー!」

咲姫「え、えつと：『今の自分なら、思いつきりオンゲキ楽しめるんじゃない?』つて言つたのよ・・・つて小星聞いている?」

小星「お、レアドロップ」

咲姫「こーこーぼーこーしいー!!!」

小星「冗談冗談。ちゃんと聞いてたや!。で、先生は今日オンゲキするつもりなの?」
音「え?あ、いや、流石にオンゲキやってほしいって頼み込むのは」

咲姫「じゃあ私が柚子に話しておくわ」

音「ちよい待てよりもよつてなんで柚子に」

咲姫「柚子に話せば断れないでしょ?」

音「うーんそれは引つ張られて連れていかれるから物理的に無理なのであつて・・・」

咲姫「まあ柚子に伝えれば自然とあかりや葵にも伝わるわ。放課後にでもオンゲキで

きるんじゃない？」

音「うーんでもやっぱり」

咲姫「申し訳ないとか言いそうだからもうL！neで送ってあるけどね」

音「・・・え？」

小星「さすがはヒメ。用意周到だなー」

音「今、なんて？」

咲姫「申し訳ないとか言いそうだからもうL！neで送ってあるけどねって言いまして！」

音「な、何をL！neで送ったわけ？」

咲姫「音先生が放課後オンゲキしたいらしいから時間ある？って」

音「・・・」

咲姫「秒で返事が返って来たわ。『マイマイとオンゲキやるの！？もちろんいいよー！』って」

小星「あいつが相手じゃあ逃げ場はないなー。まあ頑張れー」

音「くう・・・他人事みたいに言いやがって・・・」

小星「でも表情ちよっと笑ってるじゃん。本当は少し楽しみなんだろう？」

音「いや、そんなことは・・・」

咲姫「顔赤いわよ。照れてるじゃない」
音「うう……」

柚子「ねえねえ見て見てあーちゃん!!!これ、これ!!!」

あかり「どうしたの柚子ちゃん……凄い!!先生とまたオンゲキが出来るんだね!葵ちゃんも見て!」

葵「えーつと……そっか。きつとこういうことが言えるってことは、」

柚子「マイマイきつとニコニコになったんだよ!」

葵「ちよつと柚子!……そうね。きつと元気になったのね。」

あかり「うんうん!あつそうだ葵ちゃん!」

葵「ん？どうしたのあかり？」

あかり「みんなにも伝えようよ！このこと！」

柚子「じゃあ柚子りおびよんに伝えてくる！りーおーびよん！！」

梨緒「な、なによそんなに大声出して、アタシに何か用でもあるの？」

柚子「りおびよんもオンゲキやるよね！！」

梨緒「ちよっ今!?!ここで!？」

葵「柚子、言葉が足りない過ぎるわよ……。詳しくはこのL！neの画面を見て欲しいんだけど、もし放課後空いたら音先生とオンゲキしない？」

梨緒「なるほどね……。それシューター全員呼ぶの？」

柚子「呼ぶー！」

梨緒「いや、流石に全員はマズイでしょ。1 vs 1 で何戦すると思っっているの？」

柚子「たくさん！」

梨緒「いや、そうじゃなくて……。流石に疲れるでしょ？その日中は大丈夫でも翌日に筋肉痛が酷くなるわよ」

柚子「えー」

梨緒「ま、あんたたちだけで行つてきなさい。特別なもの。私達は後でもいいわ。」

あかり「本当に？ありがとうございます！」

梨緒「もちろんですよ！このスーパーアルティメットハイパーグレードエクストリームネガティブカラストロフィーヌルポイントイリーガルダークマター美少女に感謝しなさい！」

あかり「うん！ありがとう！」

梨緒「・・・どういたしまして」

柚子「あー！りおびよん顔赤ーい！」

梨緒「う、うるさいわね！じゃあアタシは次の授業行くから！」

柚子「ばいばーい！」

そして放課後・・・舞原音の教務員室にて

柚子「マイマイいるー？あつノックしてないのにドア開けちゃった！コンコン！マイマイいるー？」

音「いや、ドア開けてからノックしてどうするんだよ！」

柚子「マイマイみーつけ！確保ー！」

音「えっちよっ」

柚子「ほらほら行くよ！」

音「引っ張らないで待って速い速い!？」

柚子「えー。じゃあ歩いていこ？」

音「そうだな。話しながらでもゆっくり行こうか。」

柚子「・・・ねえマイマイ」

音「ん？どうした？」

柚子「マイマイは、柚子のせいでこの姿になって、柚子のこともうやだーって思った？」

音「最初は思ったよ。」

柚子「じゃあ柚子のこと」

音「でもね、今は感謝してるんだ。」

柚子「感謝？」

音「そう。俺がこの学校に教師として入ったきっかけってさ、オンゲキに憧れたからなんだ。」

でも当時は男のシューターなんていなかったから、教師になったんだよ。

そして今、俺は教師と生徒という立場じゃなくて、初めて対等な関係でオンゲキが出来るんだ。」

だから俺は今、柚子に感謝しているんだ。ま、そう悩むもんじゃないよ。」

柚子「じゃあマイマイは、もうすぐ夢が叶うってこと？」

音「そうだな。楽しみで仕方ないよ。」

ここを曲がると、見えてきた。奏坂のオンゲキ演習場。

何度も何度も見たり入ったりしたりしたけど今日は少し違う。今俺は、学校の教師じゃなく、一人のシューターとして、足を踏み入れようとしているんだ。」

柚子「着いたよー！あーちゃんとみすみんも中にいるから、ほら行こ？」

HEADLINER

柚子「おつまませー！あーちゃん、みすみん！マイマイ連れてきたよー！」

あかり「柚子ちゃん！連れて来てくれたんだね！ありがとう！」

柚子「えへへーどういたしましてー！」

葵「先生！」

音「おわっ!？」

葵が俺を見るや否や駆け寄って抱き着いてきた。俺のことをずっと心配していたことが嫌でも分かる。

葵が俺の背中に手を回して抱くように俺も葵の背中に手を伸ばす。．．．手が短いせいで後ろに回した手が繋げないが。でも温もりと感情と、心臓の鼓動はしっかり伝わってくる。

柚子「あー！みすみん柚子もまーぜーてー！」

あかり「じゃあ私もっ！」

音「ちよつうわあ!？」

今まで一切考えたことなかったけど、俺ってみんなから愛されていたんだなあ……三人にもみくちやにされながらもそんなことを考えるのだった。

葵「先生どうかしたんですか？」

音「いや、俺って俺の思っている以上にみんなから愛されていたんだなって」

あかり 柚子 葵「先生、気付くの遅すぎ（です）！」

音「時間も押しているし、オンゲキやろつか？」

柚子「じゃあ一番は柚子とやりたい！ね？マイマイ！」

音「どっちにせよ！ v s 1で三回やるんだから順番は好きに決めていいぞ」

葵「じゃあ私が二番で。あかり最後でもいい？」

あかり「うん！いいよ！」

音「じゃあオングエキのステージのセットアップやるか。手伝って貰えるか？」

柚子「かしこまりー！」

あかり「はーい！」

葵「私も手伝うよ」

三人が手伝ってくれたおかげでセットアップは早く終わった。

演習場の実体として存在するステージに重ねるようにして現れるオングエキ用の仮想ステージ。技術の結晶とも言えるそれは煌びやかなホログラムを辺りに映しシューター達の登場を待ちわびているようだった。

・・・過去の俺は、このステージ、鳴り響く音楽、そしてシューターが足を踏み入れ、始めるオングエキ、見える光景全てが好きだった。

そしてそれは今も変わることはない。

柚子「じゃあはじめよー？曲はマイマイが選んでいいよー！」

音「・・・じゃあれとかどうだ？」

柚子「あれ？それ柚子の曲だ！マイマイ好きなの選んで良いんだよ？」

音「これでいいんだよこれ。」

頭上の対戦相手や曲の情報などが書かれる電光掲示板に書かれた曲名は「ウキウキ☆ Candy!!」。柚子が歌唱を務めている柚子のオリジナル曲だ。

音「くる時言っただろ？柚子の飴のおかげで夢が叶ったんだって。」

柚子「もしかして、なまえに掛けてるってこと？」

音「そういうことだ」

柚子「うーん・・・よく分かんないけど、オンゲキしよ！」

音「いやそこまで出てなぜ分からない!？」

そういえば、柚子ってこんなやつだったなあ・・・

柚子「マイマイ考え事しちゃめー！ほらはやくはやく！柚子もうお着替えしちゃつ

たー!!」

音「はいはい。全くお前ってやつは・・・」

一足先にシュータードレスに変身してしまった柚子に急かされ、俺もデバイスを起動する。こういうのって対戦相手と一緒に変身するのが格好いいっていうかなんていうか・・・まあ柚子に言っても無駄か。

柚子「マイマイ可愛い！実はその羽ー、柚子が考えたんだよー！」

音「そ、そうだったのか。凄く可愛くて・・・その・・・」

柚子「似合ってるでしょー？」

音「う、うん・・・って何言わせてんだ！さっさと始めるぞ！」

赤くなった（であろう）顔をぶんぶん振り、指揮棒を構える。

柚子「マイマイせっかちー！じゃあ柚子もいくよ！あ、先生が『ARE YOU R E A D Y?』って言ったらしいもの掛け声柚子もやる！」

音「オッケー分かったじゃあいくぞ！」

音「AR『Let's SHOOT!』」

普通、『ARE YOU READY?』って言ったら掛け声とは『ARE YOU READY?』の後に言うのであって

『ARE』の文字が聞こえた瞬間に言うもんじゃない気がするぞ？

雰囲気完全にぶち壊されたぞ？

カン、カン、カン、カン・・・

掛け声の言い直しの要求をする間もなく、試合開始を告げるメトロノームの音が無常にもステージに響き渡る・・・

こうして少女化して初めてのオングキは始まるのだった。

オンゲキは対戦相手と擬似的な撃ち合いをするスポーツ。だが一般的な撃ち合いとオンゲキのそれとは決定的に違う点がある。それは、「相手への攻撃は流れる曲にリズムを合わせたものでなくてはならない」と言うルールが存在する点にある。これこそが、オンゲキが音楽ゲームの進化系とも呼ばれる所以だ。攻撃のリズムはリアルタイムでAIが記録し、曲のリズムとの親和性によって三段階の評価が与えられ、それが攻撃の威力に反映されるのだ。

柚子「いつくぞー！」

柚子の杖から放たれる分厚い弾幕。杖型の武器は弾一つ一つをリズムに合わせて打つのが難しく威力はあまり出ないが圧倒的な物量で弾幕を張り攻撃することが出来る。リズムよく弾を躲し、時には自分の弾で相殺していく。防戦一方にならないように弾の少ないところに一気に移動して・・・そこだ！

柚子「いたっ！やったなー！」

柚子の頭上に表示されるCRITICAL BREAKの文字。リズムにも気を配って放った一撃は威力も最大だ。

また弾をリズムよく躲してチャンスを伺い・・・

音「うわっ!? な、なんで!？」

一回被弾してしまった。何故? と思いよく曲を聴くとリズムが違う。さっきまで8分音符主体のリズムだったのが12分音符主体のリズムになっているんだ!

精度の問題もありまだ俺のほうがリードはあるようだが、被弾は被弾だ。気を引き締めていかないと。

そうして曲もサビへと突入し、攻撃はより熾烈に。上手く弾も避けて応戦はできているけどいまいち有効な決定打がないな・・・そうだ!

柚子「んー? わわわっ! なにこれ!」

音「ボーカル曲っていうのは歌詞に合わせるだけじゃないんだよ。裏で鳴っている音を取ったっていいんだよ!」

とはいえ実際に聞こえる歌のほうに気が引つ張られるから意外とこれは難しい。実際精度もそんなに高いわけではないから威力は乗りづらいけどダメージは与えられている。

柚子「むー！ならこれならどうだー！」

音「ん？うわっ！危なっ!？」

サビを超え、Cメロ部分。そう柚子がいうや否や、巨大なハート型を模した弾幕の集合が飛んできた。咄嗟に横にとんで回避するがバランスを崩してしまい・・・

柚子「もういつぱーっ！」

音「避けれないっ!？」

一回食らってしまった。これで俺がBREAK2発。柚子がHIT一発とCRIT I C A L B R E A K一発食らったことになる。並ばれた。最後のサビで巻き返さないと。

柚子「負つけないぞー！」

音「俺も負けない！」

勝負に出よう。弾幕の隙間を見て一気に前に出る。遠距離攻撃が得意な杖型の戦い方とはかけ離れているが、それでもいい。相手と触れられるくらいの距離まで一気に詰め
て・・・貰った！

柚子「もー！それよけられないー！」

そしてアウトロまでしつかり弾を避けきり、第一戦が終了。結果は・・・

総被ダメージ量

舞原音 藤沢柚子

72%

108%

WIN

LOSE

音「俺の勝ち！」

柚子「しょぼーん・・・負けちゃったー。マイマイ強いねー。」

音「そりや俺はこの学校に勤める教師だからな！・・・と言いたいところだが意外と接戦だったな。この武器を初めて使ったって言うのもあるんだろうがやっぱ体力が低下してるな。」

葵「先生BREAKやCRITICAL BREAKに比べてHITの量は少なかつたですよ。杖型の武器ってリズムと合わせる精度が取りづらいイメージがあるんですけど」

音「まあ弾の射出量が多い分一つ一つをリズムに合わせてるとかなり難しいな。ま、そこら辺は培ってきた技量でカバーしている。」

とはいえリズムに気を配る分相手の弾まで意識が割けないからここぞと言うときの見たたみかけるように攻撃してるって訳だ。まだお前らも高2なんだし、そう悩まなくたってそのうち出来るようになるさ。」

葵「へえー。ちよつとメモしないと・・・」

あかり「葵ちゃん！次だよ！」

柚子「みすみんはーやーくー！」

葵「ちよつと！今から準備するから待ってってばー！」

音「さて、二曲目だけどうしようか」

葵「先生、この曲はどう？」

選曲画面に書かれていた文字は「夢を叶える場所」。音楽ゲームにも楽曲を提供するとある有名な作曲者様に作ってもらったASTERISMをイメージしたインスト曲だ。

音「じゃあそれにしようか。」

葵「それで、今回のオングキなんだけど・・・」

音「・・・よし。わかった。それでいこう。」

曲も決まったので試合開始前の定位置に移動する。そして・・・

音「ARE YOU READY?」

音 葵「LET'S SHOOT!!!」

二人でダンスを踊るかのように宙を舞う。時折弾を発射するが流れるように避けられる。でもそれでいい。それがいい。何故なら今俺たちがやっているオンゲキはしっかりとした対戦としてのオンゲキではなく、いわゆる『魅せるオンゲキ』だからだ。

この曲は感動的な雰囲気の特徴でどちらかというとしっかり対戦する用の曲というよりパフォーマンズ的な『魅せるオンゲキ』というのに向いている曲なのだ。

ドラムの音に合わせてリズムよく俺も葵も弾を出していく。出した弾は一小節分置いて相手に届くようになっており、相手もリズムよく避けれるように調整済みだ。音楽と弾の射出音がマッチし、とても気持ちがいい。

音「よつと!」

弾を集めて星形にして放つ。もちろん避けやすいよう今いる方向とはすこしずれた場所に。葵も察してくれたのか、俺と同じように星形の弾を打ってきてくれた。ライト

アップされたステージに飛び交う星々の弾はまるで花火のようでとても美しい。

葵「じゃあこんどは私から！」

少し早く動いて弾を放ってきた。弾量が多いように見えるが弾の着地点が同じ位置になるようになっていて、するりと躲せるように工夫がなされている。

音「じゃあ俺も！」

弾を発射するときに時間差と速度差をつけて発射する。早く発射した弾ほど遅く、後に発射した弾ほど早いスピードで射出することで一見バラバラに見える弾が相手に届くときには一列に纏まるという仕様にしてみた。

葵「先生つてやつば凄いね」

音「これでもまだまだだよ。」

そして曲も終わり掛けというときに・・・

葵「先生！」

葵「うわあ!？」

葵が抱き着いてきた。危うくバランスを崩しそうになるがなんとか空中で体制を整え抱き返す。そしてハグしたまま、曲は終了した。

総被ダメージ量

舞原音 三角葵

0%

DRAW

0%

DRAW

あかり「すつごく綺麗だったよ！」

柚子「うんうん！マイマイも、みすみんも、キラキラでピカピカだったよ！」

音「あはは、ありがとう。」

葵「二人ともありがとう。次はあかりの番だよ。」
あかり「うん！頑張るね！」

あかり「先生、最後はこの曲でオンゲキしよ！」

そういつてあかりが見せてきた曲はHEADLINER。忘れもしない。奏坂のシューター全員で歌った思い出の曲だ。そして、センターを務めていたのは、ASERISMだった。

音「その曲・・・うん！それでやろう！」

そして定位置につく。そして・・・

あかり「遠慮はナシだよ！全力で楽しんじやおう！」

音「ARE YOU READY？」

音 あかり「LET'S SHOOT!」

あかりの武器は弓。正確で力強いショットが特徴だ。横移動を駆使して弓矢を躲し
つつ、攻撃をしていく。

あかり「負けないよ!」

音「いたっ!?・・・動きを読まれた!」

どうやら先回りして打たれたらしい。動きを読まれないように気を付けないと。弾
幕をばら撒いて相手の気を逸らす。この弾幕は当てる必要はない。動きをうまく制限
させることに意味があるから。・・・そこだ!

あかり「きやつ!・・・まだまだ、これから!」

タイミングもばっちり!これでCRITICAL BREAKI発どうしでおあい
こだ。でもやつぱり上手いな。

あかり「ねえ、先生！」

音「何？」

曲もサビに突入したところで突然あかりが話しかけてきた。オンゲキをする手を止めずに応答する。

あかり「楽しいね！オンゲキ！」

音「あはは！なんだそんなことか。楽しくないわけじゃないじゃん！」

あかり「先生は、今までと今、どっちが好き？」

音「前までは男だった時と答えていたと思う。今の体が何も出来なくて、か弱くて、情けないって思っていたからな。でも今ならばつきりとこの今の体のほうが好きって答えられる・・・よっ！」

あかり「わわっ、でも良かった！」

音「まだまだ慣れないことも多いけどな。でも今のほうが断然楽しいし幸せだよ！」
あかり「良かったー。でも今の先生幸せそう！前よりニコニコしてるが多くなつたもん！えいっ！」

音「痛っ!?・・・そうかもしれないな!」

そうしてCメロに突入。曲調も最後の大サビに備えて静かになり、攻撃もそれに合わせて穏やかなものとなっていく。

あかり「また、オンゲキできるかな?」

音「絶対にまたやろう!授業とか、教師とか、関係なしに!」

あかり「えへへっ、ありがとう!それじゃあラストスパートだよ!」

そして最後のサビ。全力でやりつつも、楽しくて自然と笑顔になってしまふ。これが、昔の俺が憧れていて求めていた感情なんだと思う。

音を操るかのように指揮棒を振る。弾幕も呼応して現れ、一気にあかりのもとへと向かう。あかりも負けじと躲し、弾幕の雨を突っ切るような一撃が飛んでくる。

あかり「勝つのは・・・私だよ!」

音「っ!?!いや、俺が勝つ！」

総被ダメージ量

舞原音 星咲あかり

144%

126%

LOSE

WIN

音「負けちゃったか・・・でも、楽しい試合だった！今日はありがとう！」
あかり「どういたしまして！またやろうね！」

柚子「こんどは、もつとみーんな呼んでやろ？」

葵「たくさん人を呼べば、団体戦もできるかもね。」

柚子「ねーねーマイマイもう一戦やろ？」

音「いやー今日はもう無理だ。疲れてこれ以上は出来ないよ。ごめんな。」

柚子「そっかー。じゃあ明日またやろ？」

音「そうだな。明日またオングキしようか。」

柚子「約束だよー？」

音「ああ、約束だ。」

あかり「じゃあ私も！ほらほら、葵ちゃんも！」

葵「え、ええ・・・？じ、じゃあ、私も約束・・・」

あかり「これからも、みんなで楽しくオングエキしよっ！」

Side Story

GAME IS LIFE

小星「今日ゲーセン行かない？久々にやろーよー」

そんなことを小星に言われた。そういえばゲーセンに行くのもこの体になってからずつと行っていない。

音「ま、休日だし息抜きに行ってもいいな」

小星「マジ!?じゃあボク歩きたくないから車乗せてつてよ」

音「いや、もう俺車運転出来ないから。行くとしても歩きだぞ」

小星「えー。めんどくさいなあ・・・あつ!じゃあじゃあ・・・」

そう言うと徐に携帯を取り出す小星

小星「ヒメいるー?」

どうやら電話した先は咲姫らしい。

小星「あのさー、今日ゲーセン行こうと思ってたんだけど、歩くのがめんどくさいからおぶって」

小星「あのー、もしもーし、ヒメ？」

小星「・・・切られた」

音「そりゃ切られるだろ」

小星「えー。なんでなのさー。」

音「そんな一方的にお前の足になれって言われてもなあ・・・」

小星「じゃあ先生おぶって」

音「あのなあ・・・」

小星の肩を掴み、顔を少しだけ上に傾けて小星と目線を合わせる。

音「俺小星より身長低いの！140cm台なんだよ！おんぶなんて出来るかっての

！」

小星「んーじゃあ・・・」

そういつて何故かもう一回電話をかける小星

小星「あーヒメ？さつきはごめんえつとね・・・」

音「いやいやOK貰えるわけないだろ」

小星「ん？あー音先生も同行する。」

小星「んー、うん、えー？・・・分かった。じゃあ音先生の前で待つてるからー。」

そういつて電話を切った・・・え、まさか要求が通ったとかそんなことないよね？

音「まさかとは思うが、了承された？」

小星「いえーい！」

そういつてコロンビアのポーズをする小星。嘘だろ・・・!?

小星「ま、ボクに掛かれればこんなもんよ。いやーやつぱ歩くのはだるいからなあ、足

となる人がいるって便利だ。」

音「ダメ人間の極みだな・・・」

咲姫「お待たせ！みんないるわね？早速行くわよ！」

美亜「にやつほー！アタシもいるよ！」

音「なんか二人ともイキイキしてない？」

美亜「いやーそれほど・・・にやふふ」

咲姫「ええ！別に美亜が引いてくれているキャリアバッグは何の関係もないわよ！」

音「もう答えじゃんそれ」

咲姫 「とにかくさあ行くわよ！小星、乗りなさい！」

小星 「いやーヒメは頼もしいですなあー。」

咲姫 「あ、小星道案内はよろしくね」

小星 「はい。そこ右ね。」

咲姫 「こっちね！」

小星 美亜 音 「そっちは逆！」

小星「いやー到着到着！やっぱゲーセンは涼しくていいなー！」

咲姫「あなた・・・ゲーセンに着いた途端に一気にテンション上がったわね・・・」

音「で、結局誘われたはいいが、何やるとか決まってるのか？」

小星「ん？今日はね・・・これをやりに来たんだ！」

そう言つて小星が指し示す筐体はWACC A。今月いっぱいオンラインサービスが終了してしまうアーケード音楽ゲームだ。正直凄く好きだった音楽ゲームだからオンラインサービスが終了するのは悲しい

小星「そーゆーわけでこれやろうよ！4台あるから4人同時対戦も出来るよ！」

美亜「アタシこれやったことないけど大丈夫？」

小星「大丈夫大丈夫。ルールは本当に単純で直感でプレイできるものになってるから。ね、先生」

音「俺に振るかそこ!?・・・実際特殊な操作も殆どないしルールも少ないからアーケードゲームの中ではかなりとっつき易い方だと思うぞ」

咲姫「じゃあ安心ね。早速やりましょう？」

そして美亜と咲姫がチュートリアルを一通り受けた後・・・

美亜「じゃあ一曲目アタシが選ばうかなー。初心者オススメ！つてジャンルがあるんだね・・・あつ『Sound Chimeria』ある！」

咲姫「その曲私も知ってるわ！格好良くていい曲よね！これにしましょう・・・つてあれ？二人とも顔暗いけどどうしたの？」

音「い、いや何でもない・・・」

小星「いきなり地雷曲引くとはついてるなー。ボクは身体あつたまつてないし難易度はEXPERTで。」

音「じゃ、じゃあ俺も・・・」

小星「男ならここはINFERNOだろー。」

音「え、えーつとお、私女の子だから分からないなー・・・？」

咲姫「無理して使ったことのない女の子口調使ったせいで声のトーン面白いことになつてるわよ」

美亜「分かる。あと精神年齢が大人ということも含めて面白い。そんなわけだし音先生はそのINFERNOとやらでどうぞ」

小星「はい決定！」

そう言って俺のプレイしている筐体に割り込み無理矢理難易度を変更した挙句勝手に決定させる小星

音「ちよつと!?俺無理だけど!?」

小星「あー言ってるけど音ゲーマーの無理は基本SSS取れない程度だから気にしないでいいぞー。先生だって実際そうだろ?チラツと見たけどハイスコアSSS+じゃんか」

音「いや、それはそうだけど・・・」

美亜「そのSS+って凄いの?」

小星「上から4番目。んで下からは10番目」

咲姫「じゃあ大丈夫ね。私達はHARDでやりましょう?」

美亜「うんうん。じゃあスタート！」

正直SSくらいは何とかなるだろうとは思っていたが、異変はすぐ訪れた。

WACC Aは360。の円形のタッチパネルを触るのだが、上にもノーツが来ることが多々あり、その場合は手を上に伸ばしてタッチパネルを触る必要がある。

音「んくう!?!手が思ったよりきつい!」

届くには届く。ただ触った状態を維持するのが意外と辛い。まだ序盤も序盤なのにホールド如きに体力を吸われるなんて・・・しかもそれだけじゃなかった。

音「手があ・・・広げてるのに・・・」

WACC Aの高難易度は「2つのノーツの間を手を広げて触れることで1つの手で同時処理する」という技術を多用させられる。手が小さくなってしまったせいで広げてもなぜかノーツが抜けていってしまう。エイム力の問題もあるのかもしれないが・・・

音「無理無理無理!もう無理だつてばあ・・・」

Sound Chimeのアウトロはとにかく全身を酷使する。大量のフリックと

ず．．．
ホールドにより、激しい運動を要求される。体力の落ちた今到底追いつくことなどでき

咲姫「このゲーム楽しいわね！．．．って先生ー!？」

小星「し．．．死んでる!？」

美亜「先生大丈夫ー？」

音「2曲目は君たちで楽しんでくれ．．．俺はもう無理だ．．．」

美亜「あっはい」

小星「なんかごめんね？」

そしてなんとか持ち直し、迎えた三曲目．．．

小星「じゃあこれ」

そういつて選んだ曲はまさかの最難関曲である『M・b・i・u・s』。それが来るまでは最難関の譜面定数は1・4・2だったのにも関わらず、唐突に1・4・+という難易度すらも飛び越え現れた難易度1・5のまさか狂っている譜面だ。

咲姫「これ作曲者凄いわね・・・」

美亜「それにプレビューの時点で難易度がひしひしと伝わってくるよ・・・」

作曲家USAO & Camellia。どちらもボス曲クリエイターとして名高い二人の合作だ。

音「・・・え？これ本当にやるの？マジでいつてる？」

小星「もちろん！」

音「キメラ獄でこの有様なのでできるわけないだろ!? 本当に死ぬぞ!」

数分後・・・

音「うう・・・ああ・・・げふっ」

小星 美亜 咲姫「せ、先生ー」
「!?!?」

What color...

咲姫「さてさて、私の目的について話すわね」

フードコートにて昼食を食べている途中にそう咲姫が話を切り出した。

咲姫「小星も音先生も私服がワンパターン過ぎると思ってるの！だからいつもとは違うような服も買いましょよって話よ！二人分の服を沢山入れられるようにこのキャリーバッグだつてわざわざ持ってきたんだから！」

小星「えー、ボクはこれで十分だつて・・・」

音「そうは言つてもどれが似合うとか似合わないとか分からないしなあ・・・」

咲姫「二人とも消極的ねえ・・・でも大丈夫よ！今日は助っ人を呼んできたるんだから！」

美亜「さすが咲姫ねえ！・・・でもそんなにも着せ替えさせたかったの？」

咲姫「あら、美亜は見たくないの？二人がいつもと違った服を着ている姿」

美亜「存分にテイステイ、じゃなくて愛でさせ、じゃなくて拝見させて頂きます!!!」

咲姫「正直で宜しい。13時頃にここで待ち合わせしてあるからもうそろそろ来るはずだけど……」

早乙女彩華「お待たせ！今日はアタシがバッチリコーディネートして上げるから！」

早乙女 彩華（さおとめ あやか）

みんなの頼りになるお姉さんの存在で、春菜と二人でbitter flavorというユニットを組んでオンゲキをしている。ちなみにギャルみたいな口調や見た目をしているが、びつくりするくらい初心。

柚子曰く、「なんか、あーにやに『キスってどんな味ー?』って聞いたたら、おめめぐるぐる回して、わたわたしてた!」とのこと。

小星「うげっ、早乙女・・・」

彩華「なによその反応、というか小星いつもその服じゃん。たまには変えようとか思わないわけ?」

小星「服を選ぶなんてめんどくさいじゃないか!それに引き換えいつも同じ服だと考える必要もないだろ?」

彩華「いや、小星の言い分も分かるけどさ、その服女子力のかけらもないじゃん」

あんまり女子の服とか俺も分からんが、小星の私服は多分女子が着るものじゃなくて男子が着るような服装だと思う。しかも家用で。

咲姫「分かる、分かるわその気持ち・・・」

彩香「ヒメは小星の家とか行ってるんじゃないの?」

咲姫「あの子のクローゼット、基本全部あの服なのよ・・・というか後は体操服とか制服とか・・・」

彩華「ええ・・・ちよつと流石に引くわ。思つたより重症じゃん」

小星「人の服を重症とはなんだ！ボクはこれでいいのつてことでボクは逃げる！B
ダツシュ!!!」

音「逃げるな！」

ぐぐぐ、力が強くて捕まえても引きづられる・・・でも動きを止めるには十分だ。

咲姫「捕まえたわ！」

小星「ぎやー！この鬼、悪魔、人でなし！」

彩華「やるじゃん！逃げた小星を捕まえるなんて！」

音「いやーありがとう！つてことで俺は帰らせて貰おうかな」

全力ダツシュ！人も多いし追いつかれるわけがないたたたた!?首が、首が締まる!?

咲姫「どさくさに紛れて逃げようとしないの！」

音「うぐぐ、俺は別にいいだろ！」

咲姫「ですつて彩華、判定をどうぞ」

彩華「うーん服の合う合わないっていうのを理解していないっていう感じ？小星よりはマシだけど、やっぱダメ」

音「えっ」

彩華「そんなわけで出発！アタシに任せて！」

咲姫「やっぱり頼もしいわ！小星は私が引つ張るから、美亜は音先生を引つ張つてもらえる？」

美亜「オツケー！ほら行くよ！」

音「いやーだー！」

美亜「中学生のアタシに力負けするとか先生どんなにか弱いのに・・・？」

音「うっさい!!!」

彩華「うーんやっぱこれが一番似合うと思うんだけど……ちよつと着てみて？」

音「ん？分かった。この服は……この、服は……」

彩華「ゴメン！結構考えたんだけどさー、やっぱこれしかないかなって！」

いわゆる、女兒服ってやつだった。今すぐに服を床に投げ捨てたい衝動に襲われるが、グツと堪える。

音「あ、あのさ……つむぎとか千夏とかだつて俺とおんなじくらいの身長ながらこ
う、お洒落な服とかあるわけじゃん？なぜ、俺の場合女兒服を？」

彩華「言いたいことは十分に分かるよ。でもね、清楚な服はちよつと違う気がするんだよねー。」

咲姫「清楚な服も似合わないことはないと思うけど、体の動かし方とか、言動とか、男
だった時の癖が残っているせいでミスマッチなのよね」

彩華「それぞれ！多分『女の子らしさ』ってものを身につけたらそういう服も似合
うんじゃない？」

音「うう・・・」

咲姫「どうせだし、これを気に矯正してみたら？」

音「そ、それだけはダメだ！俺が俺でなくなる！」

咲姫「そんなこと言われてもねえ、こんなに可愛いのに・・・」

そう言いながら俺の頭を撫でる咲姫。頬が緩み自然に笑顔になってしまふのを抑えきれない。

彩華「やっぱ女兒服がいいと思うよこれ」

音「え？」

咲姫「私も絶対そう思う。後で美亜に写真とって貰いましょう？」

音「え？」

咲姫「じゃあ私達小星のそこ行ってくるから、試着室でその服着て貰えるかしら？」

そう言われて渋々試着室に入り着替える。

鏡を見ると……小学生？ 頑張れば中学生にも見えなくはないがこの容姿で小学校に紛れ込んででも違和感は限りなくゼロに近いだろう。それくらい彩華の選んだ服は体にマツチしていた。認めたくはないが。

試着室を出て長椅子に腰掛け、二人が戻るのを待つ。隣に美亜が来て座った。

美亜「先生さ、スカートにも大分慣れたんだね」

音「一ヶ月も経てば流石に慣れるよ」

美亜「でも足広げて座るのは良くないと思うなー。見えちゃうよ？」

音「つつ!？」

美亜「やっぱ咲姫ねえのいう通り矯正いると思うよ？」

音「……前向きに検討しておく」

美亜「あつそれ大人がやんわりと断りたい時に使う言葉じゃん！」

おまけ

彩華「うんうん！やっぱアタシの目に狂いはなかったね！」

小星「いやだー！ボクはワンプリースなんか着たくないんだー！元の服を返してくれー

！」

咲姫「最初は似合わないと思ったけど、意外とありね・・・本人がジタバタしていることを除けば」

V i y e l l a , s S c r e a m

音「そういえばさ」

咲姫「どうかしたの？」

音「俺がこんな姿になったあの日、よくすぐに信じて貰えたなって思っ……」

咲姫「そうね、あれは実は美亜も関係してるのよ」

音「美亜も？」

咲姫「そう。あれはあの日にまで遡るわ……」

咲姫「おはよう、美亜・・・美亜？」

美亜「何が・・・何が起こっているの!？」

まず起きた時美亜の様子がおかしかったのよ。頭を抱えて「アタシはどうしちやつたの!？」って

咲姫「大丈夫?何かあったの？」

美亜「咲姫ねえ、アタシの頭がおかしくなったかもしれないの・・・」

咲姫「・・・本当に頭のおかしい人は自分の頭がおかしい自覚はないわよ」

美亜「そうなんだけど、聞いてよ咲姫ねえ！」

咲姫「え、ええ」

美亜「アタシさ、半径50m以内の美少女フルーツちゃんを察知できるセンサーがあるじゃん？」

咲姫「前から言ってたけどそれ私には分からないわよ？」

美亜「今はいいの!それそりそのセンサーによるとね・・・」

咲姫「センサーによると・・・？」

美亜 「真夜中に先生の家で何も無い空間から美少女が出現したことになるの！」
咲姫 「なるほど、確かにこれはおかしいわね」

美亜「でしょ！しかも急にじゃないの！なんかこう、じわじわーって出現してく感じ！」

咲姫「ええ……？」

美亜「アタシも何を言っているのか分からないんだけど、でもおかしいの！」

咲姫「とうるか、それ先生の家っていう」確証はあるの？誰かがそのセンサーとやらの範囲内に入ったんじゃないの？」

美亜「違うの！本当に湧き出てきたの！アタシも何を言っているのかわかんないけど！」

咲姫「と、とりあえず朝食食べない？一旦後にしましょう？10時までにもし電話がなければ私見に行く必要があるし」

美亜「はい……頂きます。」

音「えつと・・・つまりその湧き出てきたっていうのは・・・」

咲姫「十中八九体が変化したからかしらね。それにしても急に変わるんじゃないやなくてジワジワ変わっていったのね・・・」

音「そうみたいだな・・・」

咲姫「それで、続きなんだけど・・・」

あの後、朝食を食べ十時になっても音沙汰が無かったから家に向かうことにしたのよ

咲姫「音先生？入りますよ？」

ドアを開けた瞬間にガタツつていう物音が聞こえて、もしかしたら泥棒にでも入られたのかと思つたわ。

ドアだつて開けつ放しにしてあるし、いくら大人とはいえ病気の状態で太刀打ちできるとはとても思わなかつたから急いでリビングまで向かつたのよ。

咲姫「音せんせ……い……誰？あなた」

音「うえ!?えつと……その……」

そこで見つけたのが今の音先生ね。ぶかぶかの服を着て、スマホを持ち、涙目で後退りしようとしていたことから、先の物音はその少女が原因であることを確信したわ。

でも普通に考えて泥棒は家主の服を着ようとしないう上に肝心の音先生はどこにもいない。かといって今目に写っている少女には大人をどこかへ移動させるような力もないからあとは残る可能性は一つしかないって早々に思つたわ。今朝の美亜の様子だつ

てそれが正しければ納得できるしね。

咲姫「ねえ・・・」

音「ひい!?!」

ちよつと話しかけようとしただけで体を震わせて泣き出したのは想定外だったけどね。私の中の可能性が確信へと至るまでにはまず目の前の女の子を宥める必要があると思つたわ。

幸い私には妹もいるし、こういうことは慣れてて良かったと思つたわね。

咲姫「大丈夫、大丈夫・・・」

音「たすけて・・・」

咲姫「ん?」

音「しんじて・・・みとめて・・・なぐさめて・・・」

咲姫「大丈夫よ、全部分かつてるわ。」

音「かしわぎさんのことだっていえるから・・・おれだってしようめいできるから・・・」

咲姫「大丈夫、あなたが音先生だって分かつてるから。」

音「情けない人だとか思わなかったのか？」

咲姫「思うわけないじゃない！相当不安だったってことも分かるし、何より私だってこんな状況になつたら取り乱すに決まってるわ。」

音「そっか・・・やばい、涙が」

咲姫「すっかり涙腺も緩くなっちゃって・・・はい、ハンカチ」

音「ありがとう・・・」

続きを話すわ。なんとか落ち着いた音先生が私に話しかけてきたのよ

音「その・・・聞いてほしいんだけど、」

咲姫「うん」

音「そ、その、」

咲姫「うん」

でもやっぱり打ち明けるのが怖かったのか、少し言い出してから躊躇ってたわね。少しの間言葉に詰まって、それから言い出したの。私が助け舟だそうかと思っただけど、しつかり自分の口から言えたように良かったわ。

音「音は俺なんだ！朝起きたら熱は冷めたけどこの姿になって・・・それで、誰にも相談できなくて、不安で怖くて・・・」

咲姫「信じるわ」

音「へ？ほ・・・本当に・・・？」

言ったらまず真つ先に認めてあげようって思ってたわ。その時の音先生が一番必要としているものは誰かからの信頼って言うことが分かっていたから。

咲姫「ええ。寧ろ納得したわ。だってぶかぶかだけどその服は音先生のものだし、そのメール。まだ送られていないそのメールは私に現状を伝えようとして送ったメールよね？何より、最初にパニックになってた時にうわ言のように私の情報とか話してたじゃない。子供の姿で女の子になっちゃっているけど、音先生だって分かるわ」

音「信じて・・・ありがと・・・ぐすっ・・・」

ちゃんと自分が自分であるということを感じて貰えたおかげか、また涙が目溜まっていくのが見えたわ。その時に、先生は今「信じてもらえて嬉しいけど先生であるとかった今生徒の前で泣くなんてそんなこと出来ない」って思っているんだろうって思っ

たわ。プライドと感情がせめぎ合っているんだなって。

でも堪えることは今の音先生には負担になるだろうし、早いとこ泣いてしまった方が楽かなって思ったのよ。

咲姫「いいのよ。それと泣くのを我慢するのは良くないわ。ほら。よしよし。」

音「ひぐつ・・・うう・・・うわああーん!!!」

私に抱き着いて号泣して、でも子供らしいなんて考えは浮かばなかったわ。寧ろここで泣くのは当然だと思ったから、また私はゆっくりと宥めることにしたわ。今後のことを考えながら。

まあ、でも可愛いと思ったのは事実ね。これはしょうがないことよ。泣いている音先
生を慰めている時にちよつとコスさせてみたいとか、そんなことは思つてなかつた
わ。あと美亜の私服を着せてみたいとか、でもぶかぶかのこの服も萌えるとか、そんな
こと一切思つてなかつたわよ。

音「最後ので全部台無しだぞ。」

咲姫「これはアニオタの性だから仕方ないわ」

O p . I 《f e a r — T I T A N —》

結局のところ、セツナに言われたことは出来そうにない。自身を肯定しろと言われた方がいいが、今の俺は前の俺と比べて出来ないことが余りにも多すぎる上に勝っているとは何一つない。挙げ句の果てには生徒に助けられないと教師として授業をやることすら出来ない始末。こんなの・・・こんなの・・・

小星「大丈夫か？顔色悪いぞ？」

咲姫「そうよ、今日は休んだほうがいいんじゃないの？」

音「いい。俺は教師だから」

小星（ヒメ、これは思ったより重症だぞ。自分の生きる意味が教師以外ないと思っ
ている）

咲姫（これはまずいわね・・・無理矢理にでも休ませたいけど余計傷つける事になる
かも知れないわ）

小星（というかヒメ、先週末でどうにかしたんじゃないのか？）

咲姫（オンゲキのデバイスを先生でも使えるように改造してもらって、皇城さんに後なんか言われたっばいけど・・・）

小星（クビとか？でも今のあいつにそんな権限はないぞ）

咲姫（一応真つ当な助言っぽかったわ。今の自信を肯定して上げろみたいな意味らしいわね）

小星（ヒメはその時いなかったのか？）

咲姫（だつて一人で来いって音先生に言つてたから・・・）

小星（全くもう・・・そういう時は隠れてでもついてくるもんだぞ？そして盗み聞きだ）

咲姫（私がそんな芸当できると思う!?!）

小星（ムリだね）

咲姫（でしょ?・・・でもこのままじゃまずいわ!）

小星（そうだなあ・・・ほら、学校着いたぞ。ちよつとボクも一年のみんなに相談してみるか）

咲姫（助かるわ）

葵「先生、荷物持ちますよ」

いつも学校に着くと葵が迎えに来てくれて荷物を持ってくれる。嬉しいけど、でも俺に時間を割いているということはつまり葵自身の時間を俺の我儘で消費させられていることに他ならない。

俺は、まだ何一つ返すことが出来ていない。こんなに優しくさせてもらっているのに
音「面倒とか思わないのか？いつも俺の荷物を持つことに時間を割いて」

葵「人の心配ばかりしすぎですよ。私は大丈夫ですから」

音「そうは言っても・・・」

葵「先生は自分のことにも目を向けて下さい。そこまで気を重く考える必要だつてないんですから」

自分のことに目を向ける、か。今の俺は一体どういう存在なんだろう

葵「ほら、着きましたよ。先生もあまりネガティブなことは考えない方がいいですよ。」

音「う、うん・・・」

ホームルームを終え、3-Cの教室へ向かう。授業をすることが嫌だと感じている自分がいる。

音「違う・・・違うっ！」

頭を振って嫌な考えを飛ばす。自分が何も出来ない荷物でしかないとか、考えちやダメだ。考えちやダメなのに・・・

音「はあ・・・はあ・・・」

おかしい。動悸と汗が止まらない。あと手足が震えて力が抜けてへたりこむ。なんで？俺はみんなの役に立っていかっただけなのに、今の俺に何が出来るんだ？俺がいてみんなは幸せなのか？俺は教師としてあるべき存在なのか？

茜「おっおい！様子が変だぞ?!そんな教室の前でへたりこんで、一体どうしたんだ!？」

あかねがやって来た。いまの俺を見てあわてている。俺がこんなすがたになっても受け入れてくれるように回してくれたというのに、おれはまだ何一つできていないんだ。

咲姫「先生!?!ちよつと大丈夫!?!」

セツナ「一步遅かつたか・・・私も最悪の事態を想定して動けばよかつたものを」

楓「これは・・・私は救急車を呼びます。皆さんも冷静に判断しつつ迅速な行動をお願いします」

彩華「アタシみんな呼んでくるよ!」

みんながあつまってきた。ぜんいんおれをしんぱいしているんだ。こんなおれをしんぱいして、もうすぐじゆぎようがはじまるのに、おれなんかにかまうよりみんな・・・

そうか、おれがせんせいだからみんなこまっているんだ。おれがいないとじゆぎようができないんだ。おれなんかのせいでみんなはべんきようができなくて、おれのせいでみんながこまっているんだ。だからきつと・・・

みんなはおれをめいわくだとおもっているにちがいないんだ。おれはさいていだ。めいわくいがいのなにもでもない。たかだかかんじようひとつこんとろーるできず、こうやってみんなのをかけて、そうしてもなおおれはなにもできないんだ。

・ ・ ・ そうだ

音 「つつつ!!」

咲姫 「先生!?!どこいくの!?!」

おれがいなくなればぜんぶぜんぶかいけつするじゃないか。がつこうでて、めいわくがかからないようにおれのいえでじさつして、そしたらぜんぶおわり。

音「はあ・・・はあ・・・げほっ」

いきぎれしてせきこみながらおれのいえにつくことができた。ふるえるてでとりだしたのはおんげきようのばいす。

しゅーたーどれすにへんしんして、きようぎようのせいげんをかいじよし、ありつたけのちからをこめる。あらわれたのはほのおがあたり、あかくておおきいたま。これをじぶんじしんにうちこめばそれでおわり。おれがきようしとしてみんなにできるゆいいつのこと。おれというそんざいは、かなでぎかにはいらぬ。

音「ううつ・・・いやだあ・・・」

てがふるえる。ほんとうはしにたくない。ちよつとちからをこめればすぐにおわるのに、そのいっぽがでない。

みんなにてをかしてもらつて、すごくしあわせだった。そんなきおくがおれをひきとめようとする。でもだめなんだ。そのしあわせは、せいとたちがおれにいしきをさいているからにほかならなくて・・・それでもてばなしたくない。

いったんやめようかな、そうおもっていたとき、

咲姫「先生!!!」

音「っ!？」

どあをあげはなつたさきにおどろいて、てがこわばつてちからがこもってしまった
しきんきよりでゆっくりとせまるたま

とめようとはしるさき

それでもまにあわなくて

ばちつとしたおとがきこえて

どうじにさきのかえもきこえて

はげしいいたみにおそわれて

おれのいしきはあんでんした

ゲーミングポーターベア

蜜柑「あー！ いたいた！ 探したんだよ舞さん！」

いつも通り空きの授業中に自販機でジュースを買いに行こうとしたところ、蜜柑に呼び止められた。何やら俺を探していたようだが・・・

音「蜜柑？ そんな俺は逃げるような真似はしてないが・・・」

蜜柑「そこそこ大事な用事があつてさ、外部の企業から奏坂へメールが来てたの！」

音「仕事依頼？ 取材でもあるのか？」

蜜柑「ふっふっふ・・・それが取材じゃないんだよねー。」

音「勿体ぶらずに教えてくれよ。どこの会社なんだ？」

蜜柑「なんと・・・株式会社スカイフェザー!! あの大気アーケード音楽ゲームの C H U N I T H M や、 m a i m a i を作った会社だよ!!」

音「は、はあ!? そんな有名な企業が一高校になんの依頼をするって言うんだ!? いやいや、詐欺の可能性だつてあるだろ！」

蜜柑「いやいや、これが詐欺じゃないんだよ……いやー奏坂も有名になったもんよ！」

音「なるほど……で、肝心なメールの内容を教えられてないし、俺を探していた理由も伝えられてないんだが」

蜜柑「えーつと、メールの本文を簡単に要約すると、『オングキをモチーフにしたアーケードの音楽ゲームを作りたいから、シューターズスクールの中でもトップの実力を持つ奏坂学園の教師、生徒に話を聞きたい』的な感じ！」

音「なるほど、オングキが、アーケードゲームに……で、蜜柑にそれ務まるのか？」
蜜柑「舞さんさては私の教師としての能力を信用してないね？まあでも教師数名と生徒ユニットで話をしたいってさ」

音「へー……で、俺をその数名の頭数に入れようとしていると」

蜜柑「そうそう」

音「いつちやなんだが、俺控え目についても中学生にしか見られないと思うが……」
蜜柑「それ自分で言う？でも舞さんオングキの実力なら学校内でもトップクラスでしょ？一ヶ月くらいはブランクあってもあのあかりちゃんと引き分けにまで持ち込んだんだから」

音「うーん……でもなあ……」

蜜柑「まあまあそんなに悩まない悩まない！どうせ舞さんに選択肢なんてないから！」

音「……は？」

蜜柑「実はこのメール、関係者以外にこのオンゲキのアーケード化のプロジェクトを伝えることは禁じられてるんだー。そして舞さんは今会話の中でこのプロジェクトの情報を知った。つまり……」

音「……蜜柑」

蜜柑「え、もしかして舞さん怒ってる？そんなに怒らないでよー！」

音「はあ……お前に何を言っても無駄だな。分かった、出るよ。」

蜜柑「やったー！いやー舞さんに話して良かった！」

音「こいつ……んで、生徒ユニットはどうするんだ？」

蜜柑「うーん、やっぱASTERISMじゃない？柚子は私が上手くセーブするよ。知名度、実力、性格何を取っても申し分ないと思うよ。あと舞さんの生徒でしよ？」

音「それもそうだな。じゃあ話を持ちかけてみるか。きっと快く返事してくれるさ」

蜜柑「あつそうだ。このメール先週に届いたんだけど伝えるの遅れて実は打ち合わせ今週にあるんだよね・・・ごめん！」

音「なんでそんなこと早く言わないんだよ！あと3日しかないじゃないか！」

蜜柑「だ、だつてさ、えと、その・・・ごめんなさいでした」

音「まあ取り返しのつかないことになる前で良かったよ。遅れてたらこの学園の顔に泥を塗ることになるからな。次は気をつけてくれ」

蜜柑「はい・・・」

音「さて、特に連絡はないからみんな気をつけて帰ってくれ。あ、あとあかり、柚子、葵の3人は個人的に用があるから残ってくれと嬉しい。じゃあ解散！」

少し晒し者感は否めないが大事な要件は口頭で伝えるに限ると思っている。生徒達が各々思い思いの放課後の時間を過ごそうとする中、3人は俺の元にやってきた。

柚子「マイマイどーしたのー？」

葵「個人的に用って珍しいですよね」

あかり「またオンゲキやるの？」

音「オンゲキ関連であるのは正しいが……ちよつと場所が悪いな。俺の教務員室まで移動するか。着いてきてくれ。」

音「さて、中に入ってくれ。あんまり他の人に聞かれるとまずい話題だからな」

柚子「あつみーねえだ！」

蜜柑「私もいるよ！」

あかり「お邪魔しまーす！」

葵「他の人に聞かれるとまずい話題・・・？とりあえず、お邪魔します。」

全員入ったな。扉を閉めて通りすがりの人に話を聞かれないようにする。

音「さて、今週の土曜日、空けることはできるか？」

葵「・・・え？それだけですか？」

音「それだけだ。本来であれば先週にでも聞けるはずだったんだが・・・蜜柑が情報伝えるのが遅かったせいで・・・」

蜜柑「あはは・・・」

音「詳細はまだ言えないがオンゲキのことも詳しくて実力のある生徒が必要だから、君たちASTERISMに白羽の矢が立ったわけだ。で、どうだ？何か用事とかあったりするか？」

あかり「私はないよ。葵ちゃんは？」

葵「私も空けることができるよ。柚子はどう？」

柚子「柚子もいーよー！」

音「良かったよ。じゃあ俺と蜜柑、そしてあかり、葵、柚子の五人で土曜日に少し出かけることになる。予め親の人とかに言っておいてくれ。要件を聞かれたら俺と蜜柑の名前を出して上手く誤魔化しておいてくれて良いからな。」

葵「ちなみに怪しいことでは……」

蜜柑「舞さんのことだから怪しいことならみんなに話を持ちかけずに舞さん一人で特攻するでしょ。みんなも知ってるようなちゃんとした企業からの用事だから安心していいよ。あ、そうだ。一応制服で来た方がいいかも。私達も教員服でくるし」

葵「分かりました。ところで音先生って教員服あるんですか？合うサイズがないからいつも私服で授業しているのですが……」

あ、ない。確かにない。

家へ戻つてすぐに筆筒の中やクローゼットの中を探し回つたが、見つからなかつた。まずい、まずいぞ……

あ、そうだ。もしかしたら……

音「もしもし、音だ。」

美亜「どうしたの？」

音「咲姫はいる？」

美亜「咲姫ねえに用事？変わるねー」

咲姫「音先生？どうしたの？」

音「その、教師系の服のコスってある？」

咲姫「あるわよ」

即答だった。あるんかい。

音「ちなみにサイズは・・・」

咲姫「美亜に着せる用に作ったから音先生にもきつと合うわ。なにか懇談会でもあるの？」

音「あーつと理由はその内話す。その服なんだが、貸してもらえないか？」

咲姫「じゃあ写真10枚で貸し出すわ」

「どういう単位だよ、ってツツコミを抑える。貸してもらえるんだから文句は言えない。」

音「分かった。じ、じゃあそれで手を打とう。」

なお画像はシューターズ内で即共有されました。
めでたし、めでたし。

I u d i c i u m " A p o c a l y p s i s M i x

“

柚子「おー！みてみてあーちゃん！なんか色々あるよ！」

あかり「ちよつと待ってよ柚子ちゃん！」

株式会社スカイフェザーに入るやいなや、普段見ないような珍しい物を見つけたように、柚子が走って駆けて行ってしまった。あかりが止めようと走りだし、それを止めようと葵も走り出し……

蜜柑「みんなー！今日の目的は三階だから、一旦用事終わってからね！」

音「そうだぞー！まずは話合い終えてからだぞー！」

ロビーにゲーム筐体が置いてあったり、お洒落なデザインの商品が色々置いてあったり、正直俺も興味をそえられるところだが、今は我慢だ。

……さてさて、そうこうしているうちに葵が柚子を捕まえてきてくれたようだな。

音「柚子、気持ちは分かるが一旦後にしようか。話し合いが終わったら好きなだけ見ていいからさ」

柚子「ぶーぶー」

蜜柑「柚子？先生の言うことはちゃんと聞かないと」

柚子「・・・はい」

音「やつぱ姉なんだなあ・・・」

葵「柚子のこと一発で従わせれるのは蜜柑さんくらいですよ・・・」

蜜柑「ん？みんな何か言った？」

音「いや、よくできた姉だなあと」

蜜柑「いやー舞さんったら褒めてもなにもでないよー！」

音「まあすぐ調子に乗るのはどうかと思うがな」

蜜柑「あれ、褒められてない？」

音「うーん半分つてとこかな」

蜜柑「なんですかそれ！もー！」

さて、無事三階の会議室に着いたわけだが、少し時間が余っていたため、俺は一人トイレに行くことにした。これには用を足すという目的の上にこれからの話し合いに向け精神を整えるという目的もある。どうせ担当の人に出会ったら生徒に間違われるに違いないからな。念のため咲姫から貰った教師服は着ているし首から奏坂学園の教師である証となる社員証もぶら下げてあるとはいえ、人は見た目が99%と言われているからな。ほぼ確実に誤解を解く必要があるだろう。

心の準備も着いたし、いくぞ！・・・と思ったその時、唐突に俺の体が浮き上がった。

スカイフェザー「ん？この子小学生？もしかして迷子？」

音「違います！列記とした教師です！」

社員証を見せようと見せようとするが上手く掴めない。手が抑えられているようだ。というかこの人社長じゃないか！なんでここにいるんだ!?

スカイフェザー「そんなまたまたー。第一この服個人製作のコスプレ物じゃない？」

音「うっ……それはそうですが……」

スカイフェザー「全く……向こうはもうすぐ関係者以外立ち入り禁止になるの！だから入っちゃダメ！ほらほら、帰った帰った！」

音「ぐぎぎ……私がその関係者なんですよ……」

蜜柑「まだこないと思つたら何してるんですか舞さん？」

音「蜜柑！助けて！俺小学生に間違われて退場させられそうになってる！」

蜜柑「もー全く……スカイフェザーさんですよ？私奏坂高校の教師を務める藤沢蜜柑なのですが……」

スカイフェザー「よろしく！あたいはスカイフェザー！ちよつと今迷子の子を見つけ立て込んでるからちよつと待ってて！」

蜜柑「その……」

スカイフェザー「そういうえば、もう一人舞原音っていう教師が来ることになってるはずなんだけど……もう来てる？」

蜜柑「その子が舞原音先生なんです！舞さんほら社員証見せて！」

スカイフェザー「え？」

音「私が舞原音本人で間違いないです……」

スカイフェザー「・・・え!?嘘!?本当に教師なの!?というか成人済み!」
音「だから俺を連れてくることはよさないかって言ったんだがな・・・」
蜜柑「でも舞さん以上にあかり達三人のこと分かる人いないし、ねえ?」

そして、何とか誤解を解き、会議室にて・・・

スカイフェザー「じゃあ、順番に自己紹介しようか。あたいはこの会社の社長で、チュウニズムやmai maiといったこの会社を代表とする音楽ゲームの考案者でもあるスカイフェザーだよ!今日はよろしくね!」

蜜柑「私は奏坂学園の教師で今日来ている藤沢柚子の姉でもある藤沢蜜柑です。」

葵「私は奏坂学園二年生でユニット『ASTERISM』のメンバーの三角葵です。」

あかり「私は星咲あかり!葵ちゃんと同じ奏坂学園の二年生だよ!」

柚子「柚子は柚子だよ!」

音「ちよつと柚子!?:あ、えつとあかり達三人の担任を務めている舞原音です。本日はよろしくお願いします。」

スカイフェザー「担任だったの!?:あ、えつと、取り乱しちゃった。じゃあ早速だけど、オンゲキのアーケード化に向けた説明をしていこうかな。」

そして、スカイフェザーさんの説明の元話を聞いていく。アーケードの音楽ゲームでストーリーも混ぜ込み所謂ソシャ音ゲーの良い要素と本格派音ゲーの良い要素をミックスしたようなものにする予定とのことだった。また、キャラクターの声優を本人に担当してもらったり、ストーリーも実際にあかり達が経験したことをベースとして盛り込んでいくつもりであったりなどもはや奏坂学園の宣伝といっても過言ではないくらいの作りこみようだ。

スカイフェザー「さて、以上で説明は終わりになるわけだけど、舞原先生だっけ?」

音「は、はい。なんででしょうか?」

スカイフェザー「どうせ担任という位置にもいる上にそのビジュアルだし、ストーリーに出てみない?それどころかプレイアブルキャラとして実装もできるけどどう?」

音「え、え?」

柚子「マイマイもゲームに出るの？」

音「ちよつと柚子！俺は流石に出ないぞ。ここは生徒達で……」

スカイフェザー「俺？」

音「あ」

スカイフェザー「ほうほう、性転換か……」

音「えーと、流石に私まで盛り込むのは……」

スカイフェザー「舞原先生はこのゲームに出たいの？生徒とか抜きにして」

音「正直に言うとうたいです。でも……」

スカイフェザー「自分が特異すぎると思っっているならそれは大丈夫よ？そうじゃなきゃ天下のチュウニズムに八咫鳥鋼太郎なんてキャラクターはいないし」

音「た、確かに……」

スカイフェザー「どうせだし、隠しストーリー的な感じで実装するのはどう？メインストーリーにも出るけど、実はプレイアブルキャラだったなんて、アツいでしょ？」

蜜柑「いいじゃないですか！正直あの話は涙なしでは語れませんよ・・・」

音「お前は俺のことをなんだと思ってるんだ・・・」

あかり「でも、私もそうだと思うよ？音先生の話、絶対みんなを感動させることが出来ると思うんだ！」

音「うーん・・・」

蜜柑「もーこーゆー時に決断が遅いのが舞さんの欠点なんだから！やろ？」

スカイフェザー「この提案、乗ってくれる？」

音「・・・分かった。やろう。俺も参加するよ。」

スカイフェザー「やったー！じゃあインタビューとかも追々していこうかな。でも今日は流石に無理だから、次の日程の打ち合わせをしよう。」

そして帰り道・・・

音「やっぱりああ言っただけど生徒の物語に俺が介入するのは・・・」

蜜柑「まーだそれ言ってる・・・うじうじしてもダメだって。それでもあの三人の教師だって胸を張って言えるの？」

音「そうだな・・・」

蜜柑「もつと自信持って！そーゆーとこだよ舞さん」

ジャンヌ・ダルクの慟哭

音「教科書125ページの楽譜を開いてくれ。今日は少し理論的に話していくぞ」

音楽、感覚的に捉えられがちなものもしつかりとした理論というものが存在する。Angel's Saladのように一見聞くとぐちゃぐちゃにしか聞こえないものにだつてしつかりとしたリズムが存在し、拍子があり、そこには作曲者の意図というものが必ず存在する。俺は音楽というもののそんなところが好きだ。

どうでもいいが教科書はあえて紙を使っている。正直今の現代社会にそぐわないが、やはり昔から楽譜というものは紙に記されたものだからな。

音「ここの小節なのだが・・・質問か？」

あかり「えつと、こここの音符の横に二つ点が打つてあるものつて、どういう意味なんですか？」

音「先週説明したと思うが・・・あれ、説明してなかったか？」

葵「特に説明はされてなかったですね・・・」

音「それはすまない！これは副付点音符といって、付点音符は分かるよな？」

あかり「はい！普通の音符と半分の長さがあるんですよね！」

音「その通り。付点四分音符を例に取るなら長さは四分音符にその半分である八分音符の長さを足したものだ。副付点音符は更に半分の長さのものも足す。つまり、副付点四分音符と言ったら四分音符に八分音符の長さを足し、更にその半分である十六分音符の長さも足すんだ。

テストには出そうと思うから覚えておいてくれ。」

あかり「はい！」

音「いい返事だな。じゃあモニターに教科書を映して、よし！じゃあ解説を……うぐっ!?!?」

突如、全身を激しい痛みが襲った。ふらついて立つこともままならない。

音「う……あがつ!?何が、起こって……」

全身の骨が軋む。言葉に出来ないくらいに痛い。見えない力で体を内側から捻じ曲げられているようだ。俺の体に一体何が起こっているんだ!?

あかり「先生！大丈夫!？」

音「星咲さん……うあゝ あ……いだい……」

体をのたうち回らせたくなるような痛みが全身を襲うが、その反面体は力が抜けたように指一本動かせない。自分の身体さえ支えることが出来ず碌に受け身も取れないまま立つこともできずに床に倒れこむ。そして頭に走る強い衝撃。

音「あつい……ひつ!？」

全身の痛みが少しずつ引いてきたと思つたらこんどは体がやけに暑い。思わず目を開けるとそこに映つたのは段々と小さくなっていく自分の手。生憎手は動かないからその状況を眺めることしかできない

葵「先生!しっかりと下さい!……何これ、どうなっているの……?体が縮んでる……」

音「あおい……」

口から出たその声はかすれていたけど、やけに高く感じた。

音「う……ここは……」

あかり「葵ちゃん！ 柚子ちゃん！ 先生の目が覚めたよ！」

いつも通り授業を行うはずだった

生徒がいて、教師の俺がいて、いつも通り質問などに答えながら今日も授業を進めるはずだった

それなのに
それなのに

どうしてこんなことになってしまったんだ？

なんで視界に映る俺の手はこんなに小さいんだ？
なんで俺の服はこんなにぶかぶかになっているんだ？

背中にあたる髪感触

下半身の喪失感

力の入らない手足

とても成人男性とは思えない自分の声

ありとあらゆる体の部位から発せられる違和感が俺をおかしくさせる

思考さえままならない。気が狂ってしまいそうだ

怖い 辛い 分からない 嫌だ 気色が悪い 体が勝手に震える

葵「先生っ！」

音「っ!? すまん、取り乱してしまっただけ……」

音「俺は……俺はどうなってげほっげほっ！」

喉が掠れているようで上手く声を出せず咳込んでしまった。それにしてもこの声は本当に俺の声なのか？

柚子「マイマイ！はい！これお水と飴ちゃんだよー！」

音「ありがとう……水だけ貰おう……」

柚子「えー！飴ちゃんも貰ってよー！」

何か言っているが無視して水を飲む。まるで何日間も水を飲んでいなかったかのようにカラカラだ。未だ震える手でコップを掴む。少し重たい。

音「んくつつんくつ……ふう、ありがとう。ところで、俺は今いったいどうなっているんだ？」

葵「その、今の先生は……」

柚子「マイマイすつごく可愛い女の子みたいだよ！」

葵「ちよつと柚子！」

音「ああ、大丈夫だよ。通りで声なんかがおかしいわけだ……。鏡とかないかな」
葵「えつと、これ手鏡だけど大丈夫ですか？」

音「ありがとう。そうか、これが今の俺……。なんだな。」

一目で思ったのは儂げな少女という印象。それくらい今の身体は小さく、弱弱しく、そして元の見えた目とは似ても似つかないような姿だった。

自然に涙が零れてしまう。俺、これからどうなるんだろう……

あかり「泣かないで先生！」

柚子「そうそう！マイマイらしくないよー！」

葵「私たちも出来る限りサポートとかしますから、そんな姿見せないで下さい……」
音「そうだな……。元に戻らないとも限らないのに情けないところを見せてしまった。ごめん」

葵「いいですよ。今まで先生には色んなことに世話になりましたから、今度は私達の番です。」

あかり「うんうん！いっぱい助けにお返しするからね！」

柚子「じゃあ早速飴ちゃんをあげようー！」

音「いらない」

柚子「えー！なんで貰ってくれないのー！！」

正直不安なことは山のように多いいつまでも3人には世話には慣れない。けれど、少しなら、ほんの少しの間だけならこの現状に甘んじて樂をしてもいいのかな・・・そう考えるのであった。

ポケットからぬりつぶせ！

私の名前は東雲つむぎ。突然ですが、私には憧れの人がいます。いや、いましたと過去形にするのが正しいでしょうか：いや、でも居なくなつたわけでもないですし、とはいえうーん……一旦この話は置いておきましょう。

私には確かに憧れの人がいたんです。それはいわゆる恋愛の意味とかではなくまさしく羨望という言葉がぴつたりだと思えます。私の事を知っている人なら分かると思いますが、私は『大人』という存在に憧れています。その憧れを持つようになった原点と言えばいいんでしょうか、そういう人がいたんです。

名前は『舞原音』と言います。知つての通り、先輩達の通う高校の教師兼みやーの家庭教師でみやーと隣の家にいる先生です。先生は正に『大人』を体現したような、格好いい人だつたんです。

そんな先生は、ある日突然変わってしまいました。私と背の変わらないような女の子の姿になってしまつたんです。色んなことが出来なくなつて、それでも今までと変わらないように振る舞おうとして、少しずつ壊れていつたんです。オンゲキという支えがな

ければ、きつと先生はもう取り返しのつかないことになっていたかもしれません。その時に知ったんです。『大人』というのは私の思っている以上に過酷なんだって。頼りになる人、優しい人、怒りなどの感情を抑えられる人、『格好いい大人』であるためには自己犠牲? でいいんですかね、自分を押さえ付けないといけなくて、それは凄く大変で、先生は体が耐えきれなくなっていたことが私から見てもすぐに分かるようでした。

つむぎ「と、言うわけで、私は何か先生の力になりたいんですよ!」

美亜「なるほどねえつむりん。それで今日アタシの家にお泊りで集合したんだね。」

千夏「はい! プレゼントとかどう?」

つむぎ「なっち、そういうことじゃないですよ・・・」

美亜「まあアタシも今回はそういうことじゃないとは思うよ。でも、中学生3人で出来ることって限られるんじゃない?」

つむぎ「そうですけど・・・」

美亜「えーっと、何か力になって楽をさせたいっていうのが目的だよな？」

つむぎ「そうです！負担を少しでも軽減させたいんです！」

千夏「じゃあ、茜先輩に仕事を減らすようお願いしてみようよ！」

美亜「あー、生徒会長の？それだったらアタシ達も面識のよくあるセツナ様をお願いしてみたらどう？」

つむぎ「正直逢坂先輩はちよつとこう、当てにならないというか・・・それだったら私はセツナ様をお願いするのに賛成です。」

千夏「じゃあ今から電話かけようよ！」

つむぎ「は、話す内容もともに決まっていけないのに電話かけるんですか!?!」

千夏「もうかけちゃった！」

美亜「な、なっちー!?!」

プルルル・・・プルルル・・・

つむぎ「ちよちよ、ちよつと待つてください！まだ心の準備とか出来てないんですよ!?!」

セツナ「皇城だ。どうしたお前ら、やかましいぞ?」

つむぎ「あわわわ・・・セツナ様出ちやいました。えっと、舞原先生のことなんですが・・・」

セツナ「ほう、言ってみろ」

つむぎ「えっと、休ませたいんです! 何というか、今まで無理をしてきて、最近はずしに見えるんですが・・・こう・・・」

セツナ「なるほど、言いたいことは分かった。」

つむぎ「本当ですか? それじゃあ」

セツナ「特別授業だ」

つむぎ「・・・え?」

セツナ「今からお前らに学校内の資料を共有しよう。そこから情報を整理し、私に適切な意見を言うがいい。正しく言うことが出来たなら私も協力しよう。これで話は終わりだ。纏まったら私にまた電話するといい。じゃあな。」

つむぎ「・・・切られてしまいました。あれ? セツナ様からメール?」

美亜「どれどれ、このPDFじゃない? さっき言ってた資料って」

千夏「開いてみてみようよ!」

つむぎ「そうですね。見ないことには始まりません。」

そう言つてセツナ様から渡された資料を開きました。正直資料とはいえ数ページくらいで読むことならすぐに終わるんじゃないかと思つていたのですが・・・

つむぎ「な、なんですかこの量!?!それに数字まみれで・・・」

私達を待ち受けていたのはなんと50ページにも及ぶ資料でした。ざっと目を通すだけでも数字の羅列です。こんなの一つずつ見てたら日が暮れるどころの話じゃありません!

美亜「ん、ねえねえつむりん」

つむぎ「な、なんでしようか」

美亜「32ページ目のこれって先生の名前じゃない?表になつてるよ?」

みゃーの指の先には色んな先生の名前が縦一列に並んでいました。そしてそれぞれ横には良くわからない数字。これは表?

千夏「あつ音先生の名前もあつたよ！」

美亜「本当だ!でも横にある数字の意味が分からないと結局・・・」

つむぎ「表なら何の数字か示す言葉がどこかにあるはずですよ。それも表の一番上に・・・」

そう思いこんどはページを上を遡って見ます。きつとこれは五十音順に並んで何ページかに渡って続いているように見えますが・・・

つむぎ「ありました!この一番上の段の言葉はきつと列ごとの数字の意味ですよ!」

千夏「じゃあ言葉の意味を調べていけば、きつとセツナ様も納得する答えに辿り着けるよ!」

美亜「うんうん!じゃあアタシ調べる係する!なつちはメモを取って!」

つむぎ「じゃあ私この表の言葉読み上げていきます!」

そして私達三人はいろんな言葉を調べる作業に入りました。そしてみゃーが調べた言葉をなつちがメモし、三人で相談して一つずつ選別していきました。そして十二個目

の単語で・・・

つむぎ「次、『有休消化率』です。」

美亜「えーつと・・・心身の疲労を回復しゆとりある生活を保障するために付与される休暇のことだつて。つまり自由に取れるお休みつてこと？」

千夏「ねえ！この数字、他の先生に比べて数字が低いよ！音先生、休んでもいいのに休んでないつてこと？」

美亜「多分そうだと思う。じゃあこれが『答え』つてこと？」

つむぎ「だと思えます。休んでもいい日があるのに善意で休まずに私達のために働いているつてことになるんですから。出来ないことが増えた今、音先生に必要なのは休息です！」

千夏「じゃあ早速電話しよ！」

つむぎ「はい！」

プルルル・・・プルルル・・・

セツナ「皇城だ。・・・なんだお前らか。それで、意見は纏まったか？」

つむぎ「はい！」

セツナ「じゃあ言ってみろ」

つむぎ「舞原先生は、有休消化率が他の先生に比べて低かったです。休んでもいい日があるのにわざわざ私達生徒のために休んでないんです。でも、先生には無理をして欲しくありません。なので、舞原先生にお休みの日を入れるべきだと思います!」

セツナ「素晴らしい。完璧だ。」

つむぎ「本当ですか!?ありがとうございます!」

セツナ「さて東雲、お前は『大人』というものに憧れを持つていたよな?」

つむぎ「は、はい。」

セツナ「では今の先生を見てどう思う?」

つむぎ「えっと、私達他人を気遣って行動するのが『大人』だと思っていたんですが、自分自身が疎かになってる気がします。」

セツナ「そうだな。ではそれはお前の思い描く『大人』と言えるか?」

つむぎ「言えません!」

セツナ「フツ・・・それを突き付けてやるといいさ。良いだろう、私も茜達に連絡する。精々休みの予定でも考えておくことだな。」

つむぎ「ありがとうございます！」

つむぎ「なっち、みゃー、やりました！」

美亜「つむりん、まだ終わってないよ？」

つむぎ「え?・・・あつそうでした！音先生が休日を貰ったら、こんどは私達でもてなすんですよ！」

美亜「もてなすというか何というか・・・でもリフレッシュになるようなこととして上げたいよねー」

千夏「じゃあオンゲキとかどう？」

つむぎ「ナイスアイデアですなっち！オンゲキなら気分転換になります！」

美亜「じゃあこれ見てよ！」

つむぎ「これは近くのショッピングセンターの広告ですか・・・?あつ!?!オンゲキのステージがあります！」

美亜「大正解！流石にオンゲキずっとやるわけにもいかないし、色々回ったりもして、

オンゲキもやろうよ!」

千夏「じゃあ、千夏達が案内するってことだよね!」

美亜「うんうん!早速ルート決めしようよ!」

それから、みんなで時間を忘れちゃうほど作戦会議をしました。事前にお泊りするっていうことは言ったんですが、咲姫お姉さんに余りにも遅くまで起きすぎて怒られてしまいました。でも、すつごく楽しくて、わくわくしたんです!音先生を案内できる日が待ち遠しいなって、その日は咲姫お姉さんに用意してもらった布団に入りながら考えて寝たんです。

夜明けのストリング

それは、教師全体のD！scoreにて全体通知として届けられた一つの連絡から始まった。

『重要』

教師陣の有給休暇の消化不良率がここ最近上がってきました。そこで、先ほどその現状を憂いた逢坂茜生徒会長の手により、奏坂学園のみに適応されるオリジナルの祝日『逢坂茜様を崇め讃える日』を作成することとなりました。

そのため、3日後の金曜日は生徒含め奏坂学園の関係者は登校、また勤務は禁止とします。各自、我らが生徒会長の逢坂茜様を崇め讃えながら三連休を過ごしてください。』

音「無茶苦茶が過ぎるだろっ!!!」

なんだよ逢坂茜様を崇め讃える日って。まあ三連休作ってくれたのは確かに嬉しいけどさあ、これはこれでどうなんだ？まあ俺自身そんなに有給休暇の消化はしていない

かった自覚はあるけど、なんとなく裏があるように感じるといふかなんというか・・・
そう思っていると個人チャットの方に蜜柑からのチャットが来ていた。

蜜柑『今回のオリジナル祝日はほぼ舞さんのために出来ると言っても過言じゃないんだからね！しっかり休め！家でも仕事しようだなんて考えないこと！』

音『俺のためってどういうことだ？』

蜜柑『元々職員会議でも如何に舞さんの負担を軽減させるかは議題に上がってたりしたんだよ？普通やむを得ない事情で誰かが上手く仕事が出来なくなった場合は他のみんなでカバーしていくのが普通なの。本人が無理に頑張ろうとすると、余計体壊すでしょ？』

音『それは分かるけど、いつまでも足を引つ張るわけにはいかないだろ？』

蜜柑『勿論それはそう。場合によっては担当教科の変更や削減も視野に入れないといけない。でも、一ヶ月ちよつとしか経つてないのにもう慣れた？だなんてそんな酷な話はないよ。産休とか育休とかちゃんと保証される制度はあるのにそれと同レベルで大変なことが起こっている舞さんに迅速な対応を求めるほど奏坂はブラックじゃないよ。』

蜜柑『まあとにかく、いつかはなんとかしないとイケないけどそれは今じゃないし、も

うちよつと気楽に持っていていいよってこと！第一今の自分でも胸を張って好きだって言えるなら前より相当進歩したんじゃない？』

蜜柑『オンゲキの実力だつて変わっていないしその体に蓄えた知識だつて前と変わっていない。勿論体は弱くなつたけど、今の舞さんは生徒との距離が前よりずっと近くなつた。増えた欠点なんか軽々覆せるくらいには大きなポテンシャルが舞さんにはあるんだよ！』

蜜柑『話が散乱しちゃつたけど、舞さんはこの休暇をしっかりと受け取る権利があるの。楽しんでこい！』

音「そうか・・・」

思わず顔がにやけそうになる。俺だつて人間だし、褒められて嬉しくないわけもない。お礼をチャットに打ち込まないとな・・・

蜜柑『あ、そうそう。もし今私に感謝しているんだつたら、『ありがとう！蜜柑お姉ちゃん！』って元気一杯に言ったものを録音してくれると嬉しいなー』

0. 1秒ほど考え込んだ後、無視することにした。お礼も打たんど。

そして3日後、ついにやって来てしまった謎祝日。3連休と言ったって日本人の性というかなんというか、突然自由な時間を与えられてしまっても何をしたらいいのか分からなくなってしまう。さて、どうしたものか……

「ピンポーン」

思案していると、家のインターホンが鳴った。来客か？そう思いながら玄関まで行きドアを開けると……

美亜「音先生だいじょーぶ？」

音「前と違って受け身は取れたからなんとか……」

千夏「音先生ごめんね！嬉しかったからつい……」

音「いいいいいいよ、千夏は元気一杯なのが取り柄だからな。ところで三人揃って何か用でもあるのか？」

つむぎ「あ、あの……えつと……」

音「話しづらいことか？ゆつくりでいいし場所が悪いならリビングでも……」

つむぎ「違うんです！……今日一日私達と一緒に出かけませんか!!!」

美亜「つむりん告白するみたいに言うね」

千夏「あはは！つむりん顔真っ赤ー！」

音「なんだ、そんなことか。じゃあ俺も着いてくよ。どこか行きたい所はある？」

つむぎ「そ、そういうのじゃないです！」

音「ん？」

つむぎ「今日は私達で先導するんです！子供扱い禁止です！」

つむぎ「いいですか舞原先生、舞原先生は大人です。私達他人に気を配ったり誰にでも優しく出来る私の理想の大人です。」

音「お、おう。急になんだ？」

つむぎ「でも、自分の体の面倒もマトモに見れないような人は大人じゃありません！ お子様なんです!!!」

音「うっ……それは確かにそうだが……」

つむぎ「なので今日はそんなお子様な舞原先生を私達が案内します！なんて言つたつて私達は大人ですから！」

千夏「つむりん、千夏達は中学生だよ？」

美亜「ちよ、なっち……」

つむぎ「なっち、私今決め台詞言つたところなんです！茶々入れるの禁止です！」

音「ふふっ、そっか。俺も子供か……」

つむぎ「え、ええ。そうです。なので今日は私達に任せて下さい！」

美亜「その台詞、ちよっと頼りなさそうに思うよね」

千夏「うんうん。つむりんが言うとそうだよね。あかり先輩だと安心できるのになんでだろう？」

つむぎ「なっち、みやー、ナチュラルに私のことをデイスるのやめて下さい！と、とにかく出発です！ほら、行きますよ！」

音「え？あ、いや、まだ準備が……」

つむぎ「心の準備なら必要ないです！私達大人がいるんですから！」

音「いや、そうじゃなくて財布とか・・・」

つむぎ「つつつつ・・・早く準備して来て下さい!!!!」

美亜「あーあ。つむりんからぶっちゃった。音先生のせいだよ」

音「なんで俺のせいになるんだ!?!今準備するから待ってくれ!!!」

三人に急かさされながら、慌てて準備を進める中、ちらりと見えたつむぎの顔はどことなく、と言うかかなり緊張しているように見えた。

進め！マイウエイ！

つむぎ「前から舞原先生を連れてここを訪れたいと思つていたんですよ！2人とも早く来てください！」

千夏「ほらほら！みやーも音先生も早く早くー！」

つむりんもなつちも出発前からはしゃいでいたんだけど、中に入った途端テンションが一気に上がったみたいで走つて最初の目的地まで行つちやつた。

美亜「つむりんもなつちもはしやぐのは分かるけど早いよー。アタシ達追いついてないよー。」

音「そうだぞ・・・はあ、はあ、疲れた・・・」

美亜「先生はもうちよつと鍛えたほうがいいと思うよ？つむりんより体力ないじゃん」

音「じ、授業でオングキやつてるし、運動にはなるだろ？」

美亜「それならアタシ達だつてやつてるよ。そのうちオングキも出来なくなつちやつ

たりして」

音「こ、怖いことを言うなよ!俺だって危機感はあるわけだし・・・」

美亜「でも自主的な運動とかはしてないんでしょ?」

音「・・・」

美亜「先生気づいてる?すぐ感情が表情に出るようになったからバレバレなんだよ?」

音「うつ・・・」

美亜「まつそーゆーところも美亜ちゃんは好きだけどね。さあ、いこ?つむりんもなっちも待つてるよ!」

正直アタシもワクワクしているんだよね!だってだって、こんな機会滅多にないんだもの!

つむぎ「ずっと思っていたんです。舞原先生は私達と同じくらいの背丈で、見た目も可愛いです。なので、私達に似合うアクセサリーや服が舞原先生に似合わない道理がないんですよ！」

音「やっぱり俺は着せ替え人形になる運命なのか……」

奏坂学園の近くに位置する大型ショッピングモール『奏坂ショッピングパーク K a n a p a 』。割とここを訪れる回数は多くなつたが、その殆どで着せ替え人形にされている気がする。というか、一人で訪れた時以外は基本この扱いだ。

勿論俺に合う服を選んでくれるのは嬉しいし、似合っている服を来た自分を見るのも嫌いではない。ただこう、気恥ずかしいというか、未だに『見られる』感覚には慣れそうにない。好奇の視線であれ元々俺は注目される事に対してあまり経験がないんだ。悪い気はしないが……

美亜「どうせだったらさ、髪型も変えちゃおうよ!下ろしているのも綺麗だけど、結んでみたらもつと違う印象になるんじゃない?」

千夏「いいねそれ!じゃあこうして・・・はい!みゃーとお揃いの髪型!」

美亜「これはっ!なんてニャーベラスなの!?!そう!例えるならば、グリーンアップル

!

黒い髪、戸惑う顔、だがしかし可愛らしい顔立ち!これぞまさしく平行世界のアタシ

!うへへ、美亜ちゃんと一緒にツーショット撮ろうよ・・・」

音「ひっ!?気色悪い!こっちに来るなあ!」

美亜「ガーーーーン!?!?」

つむぎ「みゃー、今のは流石に私も引きました!」

美亜「つむりんまで!?!?」

千夏「みゃーの言葉、たまーに体がぞわってする!なんでだろう?」

美亜「なつち、死体蹴りだよそれも・・・」

音「と、とにかく、髪を纏めるのも悪くないと思う・・・可愛いし!」

つむぎ「舞原先生はもつと自信を持っています。可愛いですよ。」

千夏「そうそう!じゃあ、リボンも買っちゃおう!見てみて、千夏とお揃いの向日葵の

リボン！」

音「いいけど、俺つけ方分からないぞ？」

千夏「じゃあ千夏が教えてあげる！」

音「そうか、じゃあ買おうかな」

三人に振り回されるけど、なんとなくワクワクした気持ちにもなっている。童心に帰ったと言うか、まあ今は精神面でも童心と言わざるを得ないのかもしれないが。

つむぎ「舞原先生」

音「ん、なんだ？」

つむぎ「試しに、一人称を『私』にして女の子っぽい口調にしてみましたらどうですか？
似合うと思いますよ？」

美亜「つむりんは分かってないな。こーゆーのは口調と見た目のギャップっていうの
がいいの」

千夏「でも、一回見てみたい！ね、先生？いいでしょ？」

音「えっと、わ、『私』・・・？うっ、ダメだダメだ。自分で言ってもこう、耐えられない。」

勧められて試しに『私』という一人称を使ってみるものの、どうも合わない。これ以上進むと自分が自分で無くなってしまう気がする。

美亜「正直なんとなくアタシも似合わないって思った。無理して言っている感が否めないし、音先生はもうみんなの中でオレっ娘ロリとして位置付けられてるんだよ」

音「オレっ娘ロリ言うな」

つむぎ「見てください!クレープですよ!買いに行きませんか?行きましょうよ!」

ヘアアクセサリーを購入し、その後も色々な場所を巡って時間も13時といたところで丁度つむぎが移動式のクレープを販売している店を見つけたようだ。

千夏「つむりんはしゃいでるね！」

つむぎ「は、はしゃいでなんかいません！その、舞原先生も欲しいかなって思っただけですよ！」

美亜「にやふふ、つむりんはそういうところが可愛いんだよね。で、音先生はどのようなの？」

音「そうだな。じゃあ買っていかうか。最近甘い物をよく食べるようになってな……」
美亜「やつぱりそれって味覚が変わったから？」

音「そうだろうな。以前は言うほど甘い物は好きじゃなかったんだ」

千夏「じゃあこれ買っていい？」

音「そうだな。買ったならそのベンチで食べようか」

音「んむ、美味しいなこれ」

美亜（にやふふ、音先生超笑顔！これは是非とも正面から撮って我がフルーツコレクシヨンに加えたい・・・でもつむりんとなつちが隣に座っているせいで正面からは取れない、うーんどうしたものか・・・）

千夏「んー！これ凄く美味しい！あれ？みゃー、そんなに難しい顔してどうしたの？」

美亜「えっ!?!えーつとそれは・・・」

つむぎ「大方食べている様子を撮影したいでも思っていたんじゃないですか？」

美亜「ギクツ!?!・・・」

つむぎ「はぁー・・・みゃーは全く変態さんなんですから」

音「ん、写真くらいなら別にいいぞ？」

美亜「ほんとに!?!じゃあ音先生そのままアタシのことは気にしなくていいからそのまま食べて!!」

ま食べて!!」

音「分かった。むぐ」

美亜（はぁー音先生ちっちゃな口でちよこつとづつクレープ食べてるの可愛すぎるよー！あつ今大きなフルーツ口に入れたのかな。頬が膨らんでて可愛い・・・！）

美亜「よし、写真も撮れた！」

つむぎ「みゃー、いい写真が撮れたのは分かりますが涎を拭いてください。汚いです。」

美亜「ごめん・・・」

つむぎ「さて、最後に案内したかったのはここです！」

三人が俺を引き連れて最後にやってきた場所。少し前まで工事中だったそのエリアには、オンゲキ専用のステージがなんと出来ていた。しかも設備も整っており、競技用のしっかりしたルールでのオンゲキも楽しむことが出来そうだ。

つむぎ「ついにK a n a p aにオンゲキステージが出来たんですよ!舞原先生!オンゲキしませんか?」

音「うん!じゃあオンゲキやろうか!」

Desperado Waltz

音「それじゃあ、オンゲキやろっか！」

千夏「やったー！音先生とオンゲキだー！」

つむぎ「今日はこれが一番楽しみにしていたんですよ！」

美亜「はい、これ先生のデバイス」

音「おおありがと……ん？」

さらりと美亜から渡されたオンゲキ用のデバイス。何の疑問もなく受け取ってしまつたが俺は美亜にデバイスを渡した記憶なんてない。こいつ、どこから持ってきたんだ？

音「それにしても美亜、俺のデバイスなんで持つているんだ？貸した覚えなんてないんだが……」

美亜「にやふふ、美亜ちゃんの隠密スキルを舐めてもらつちや困るよ！なんてたつて屋内プールの更衣し……あつ今の無し！聞かなかつたことにして！」

こ、こいつ！まさか以前校内で問題になった盗撮問題の犯人は・・・

音「屋内プールの更衣し・・・更衣室だよな？美亜お前、忍び込んだとか言わないだらうな？」

美亜「え、ええっ!!えつと、美亜ちゃんは、そんなこと、し、しない、です、よ？にやは？」

こいつ急に言葉がたどたどしくなったぞ。犯人で間違いないな

音「そうかそうか、よく分かった。まあ俺は大人だし過去のことに対してそんなに怒ったりはしないよ」

美亜「ホント!?やったー!じゃあ先生さっそくオンゲキを・・・」

音「ルールは1 vs 3でいいよな? 勿論美亜は1の側だ。」

美亜「え、っ先生ガツツリ根にもってるじゃん・・・」

つむぎ「みゃー・・・」

美亜「つむりん助けて! つむりんはみゃーの味方だよね?」

そう言いながらつむぎに手を伸ばす美亜。それに対しつむぎは伸ばされた手を……

つむぎ「自業自得ですよみゃー。大人しく蜂の巣になつてて下さい」

パシリとはたいて俺のもとにやつてきた。そして項垂れる美亜。少し可哀想に思えてきた

美亜「そんな、つむりん……」

千夏「大丈夫！千夏はみゃーの味方だよ！」

美亜「なっち！」

千夏「みゃー！」

そして呼び合いながら抱き合う二人

つむぎ「・・・なっちとみゃーは何やってるんですかね」

そしてそれを冷めた目で見つめるつむぎ。いつも子供らしく見えてしまうつむぎが
この瞬間は大人っぽく見えた。

つむぎ「さて、2 vs 2でいいですよね？公式戦と同じように自薦曲と他薦曲の2曲を使用してやりましょう」

美亜「さんせー！」

千夏「じゃあ千夏、音先生と組みたい！先生、オンゲキしよつ！ね？」

音「じゃあ俺と組むか？ちなみにつむぎは美亜と組むのでいいのか？」

つむぎ「ええ・・・まあ仕方ないですね。今日は舞原先生と対決するために来てますしなつちとみやーをペアにするわけにはいきませんので」

美亜 千夏「なんで!？」

つむぎ「みやーが変態さんだからですよ！なつちに変なこと吹き込もうとするかもしれないじゃないですか！」

美亜「風評被害が過ぎるよつむりんく！」

つむぎ「ああもう！さっさと曲決めますよ！」

千夏「はーい！」

美亜「にやふふ・・・音先生覚悟しておいてよね！アタシ達は強いよー？」

こうして今、千夏&俺 vs つむぎ&美亜のオンゲキ対戦が始まるのだった。

l s t t r a c k [Desperado waltz]

つむぎ「私達の曲はこれです！」

美亜「美亜ちゃん準備オツケー！もう後悔しても遅いよ？Are you READ Y?」

全員「Let's SHOOT!!」

カン、カン、カン、カン・・・

試合開始のメトロノームも鳴りオンゲキも始まって突然だが、オンゲキが音楽ゲーム

の進化系と言われている理由はいくつかある。そのうちの一つに『曲によって攻撃のチャンスが多い、少ないや、高火力な攻撃の出しやすさなどが変わる』というものがある。何が言いたいかというところ……

千夏「これ、リズムどうなってるのー!?!」

音「くつ、変拍子か！しかも四分音符主体のリズムと三連符のリズムが混ざってるぞ!?!うぐつ避けようにも避けられない……」

つむぎ「ふっふっふ……まんまと策に嵌っているようですね。みゃー、ここからは三連符主体から四分音符主体です。リズム変わりますよ」

美亜「オツケーっつむりん！」

リズムのとりづらい曲というのは、それだけでも相手に大打撃を与えることができるのだ。リズムが取れないので攻撃に火力が乗らず、相手の攻撃のリズムも掴めないのだから一方的にダメージが与えられてしまう

それに加え今回はタッグだ。リズムを完璧に把握しているつむぎが次のリズムを美亜に指示することで掴みづらいリズムでも高火力の攻撃を維持されてしまう。何か手は……いや、ある！

美亜「にやふふ、『ならず者のワルツ』とはまさにこのこと……ぎにやあ!?! いったあ!?!」

音「一度くらったリズムならもう二度は通じないぞ。繰り返しのフレーズ中なら初めて聴いた曲だろうが十分に対応が可能だ!」

返し文句を言いつつ、音楽に耳をすませる。小節終わりの最後の一音が高い! 曲調が変化する!

音「リズム変わるぞ!」

千夏「分かった! 1、2、3、4!」

つむぎ「つ!?! ……よく対応できますね……」

音「伊達に俺が教師やってると思うなよ!」

ブレイク部分を抜けて曲は最初のサビへと入ろうとしている。こここのリズムは……四つ打ちの裏拍か!

音「千夏！表拍より裏拍の方がここは良さそうだ！」

千夏「はい！」

そう言つてすぐに攻撃のリズムを変える千夏。攻撃の制御がかなり上手く、実力がしつかりあるのを感じる。

そして曲はサビへと移行。リズムはどうやら4/4拍子なようだ。少しハネリズムが入る以外には特にトリックもない。反撃するならここがチャンスだ

美亜「そうはさせないよ！アタシ達だつて攻撃のチャンスなことは変わらないんだから！」

降り頻る二人分の分厚い弾幕。つむぎも美亜もリズムキープはかなり上手く、弾幕一つ一つが高い攻撃力を秘めている。

音「千夏右だ！」

千夏「ありがとう！」

声かけをしなから迎撃していく。

つむぎ「くうつ、でも負けませんから！みやー、援護お願いします！」

美亜「オツケーつむりん！」

つむぎ「私が勝つんです！」

シンセサイザーの細かい音を全て拾った高火力かつ高密度な攻撃。しかも躲そうにも逃げ場を封じるように美亜の攻撃が飛んでくる。

音「千夏！被弾覚悟で突っ込むぞ！」

千夏「うん！いっくぞー！千夏フルパワー！」

つむぎ「そ、そんな!?信じられません！」

美亜「まずいよつむりん！どうしよう！」

つむぎ「いえ、向かってきたのならせめて相打ちにするまでです！リードなら私達の方がありますから！」

そして四人は一気に至近距離で撃ち合い・・・

総被ダメージ量

音&千夏 美亜&つむぎ

126%

90%

つむぎ「なんとかリードを保てたようですね。油断なりません」

美亜「先生対応力高すぎだよー！」

音「あはは、まあ長いことオンゲキやってたからな」

千夏「じゃあ千夏も、たくさんーくさんオンゲキやったら、先生みたいに上手くなるかな？」

音「もちろんだ。千夏だけじゃなく、みんな努力すればするだけ上手くなるぞ」

そして勝負は俺たちの選んだ二曲目へ続く・・・

Final track [SUPER AMBULANCE]

音「ここで逆転狙うぞ！」

千夏「うん！」

つむぎ「この曲ですか・・・」

美亜「つむりん知ってるの？」

つむぎ「確かこの曲、ジャンルがSUPER COREといって、曲調がどんどん変わっていつてしまう曲なんです。曲調に合わせた攻撃をしないと威力は乗らないので振り回されやすい曲なんですよね。」

美亜「へー。確かに難しそう。ま、それでこそ本気のオンゲキって感じがするけどね

！」

つむぎ「それもそうですね。今日は本気の試合をしたかったんですから！」

千夏「つむりーん！みゃー！千夏待ちきれないよー！」

つむぎ「ごめんなさいなつち。今定位置につきますね」

美亜「アタシも準備オツケーだよ！」

音「千夏も大丈夫か？」

千夏「うん！いづくぞー！Are you READY？」

全員「Let's SHOOT!!」

カン、カン、カン、カン・・・

200というハイテンポなメトロノームの音により試合開始の合図は告げられた。

千夏「千夏はメロディ取るから、音先生は裏拍の音拾って！」

音「任せろ！」

タツグの良いところとして、混フレ、つまり混合フレーズという二種類以上のフレー

ズが同時に流される曲に強いというものがある。役割分担をすることで高精度、高火力を維持しつつ精密な音拾いが出来るため弾幕量も確保できるのだ

つむぎ「まずいですよみゃー。早速向こうは連携で来てます。避けてるので精一杯で反撃が出来ません・・・」

美亜「うーん防戦一方なのはまずいね。どこかでチャンスがあればいいんだけど・・・」
つむぎ「む、音の数が一気に減ってきました。攻撃のタイミングもあまりないのでこの後仕掛けますよ！」

美亜「オツケー！多分あと4小節くらいで・・・そこ！」

千夏「きや!?油断してたあ・・・」

上手く隙をつき一気に仕掛けた美亜。突然の集中砲火に千夏も反応が遅れたらしい。取り返そうにも音数も少ない中どうするべきか・・・

いや、案がない訳ではないな。一回俺がやれば千夏も察して援護するだろう。武器となる指揮棒を振り、力を貯めて一気に放出!

つむぎ「この色、レーザーの予告線!?!みゃー!避けてください!」

美亜「えっ、いにやあ!?!レ、レーザー!?!」

レーザーは使い所が少ない上に予告線も必ず表示されるため基本は相手には避けられてしまう。だが、不意打ちで相手のバランスを崩す目的ならかなり有用だ。

つむぎ「ちよっ!? 薙ぎ払うようにレーザー来てます! 回避に専念しないとどうしようもありません!」

千夏も狙いを察してくれたようで一気にレーザーを放出する。強制的に大きく躲させるように発射しているため相手も右へ左へと振り回されているようだ。

千夏「ばびゅーん!!」

そして曲もサビへと突入。16分音符がかなり多く使われている上にBPMも高いため攻撃がいつものオンゲキよりも数倍熾烈だ。

つむぎ「やられてばかりじゃいられませんよ!」

音「うわっ!? 反応が追いつかなかったか・・・」

一気に横に薙ぎ払うように放たれた弾幕。上手く飛んでかわす必要があるが反応が追いつかなかったみたいだ。

音「だが、俺も負けてないぞ！」

曲のラストを飾るいわゆる『発狂地帯』。リズムに置いていかれないようにしつつ攻撃を避けて的確な射出をしていく。いわゆる、スポーツなどによくあるゾーンに入ったような感覚だ。時間の流れが遅くなったように感じ、脳の処理速度が異常に上昇しているのを感じる。今なら、攻撃の軌道も予測できるし、相手に確実に当てることも……！

千夏「先生凄いい！千夏も負けないぞー！」

美亜「にやっ!?こんなの勝てないよー！」

つむぎ「これが大人のオンゲキなんですか!?格が違いすぎます！」

そして……

総被ダメージ量

音&千夏 美亜&つむぎ

198%

216%

WIN

LOSE

つむぎ「ま、負けてしまいました・・・」

音「なんとか勝てたようであつたよ。つ、疲れた・・・」

美亜「お疲れ様ー。やっぱ音先生強いなー。こーゆーチーム戦も強いなんて知らなかつたよ！」

音「いやいや、千夏のお陰だ。タツグは一人じゃどうにもならないからな」

千夏「やつたー！褒められたー！」

そんなこんなで、俺達の勝利という形で、タツグでの本気のオンゲキ試合は幕を閉じたのだつた。

音「いやー今日は楽しかったな。買い物して、クレープ食べて、オンゲキして。」

つむぎ「ふふん、そりゃあ私は大人ですから。今日は完璧なエスコートができたんじゃないですか?」

千夏「千夏もすつつつごく楽しかった!また一緒に出かけしよ!」

美亜「じゃあはい!」

そう言つて小指を差し出す美亜。指切りか。懐かしいな。

つむぎ「みゃー、指切りなんて子供っぽいこと私はしませんよ」

千夏「つむりんもやる？やらないの？」

つむぎ「私はやりません。立派な大人ですから」

美亜「えー！なんか先生も言つてやつてよ！」

音「そう言われてもな・・・まあつむぎ、こういうのもたまには悪くないと思うぞ？」

美亜「・・・先生フォロー下手。そんなじや流石につむりんも流されないよー」

つむぎ「仕方ないですね・・・舞原先生がそういうならやつてあげてもいいですよ」

美亜「えっ」

千夏「やったー！」

美亜「つむりん・・・ま、いつか。ほら先生も早く指出して！」

音「そうだな。にしても四人じや流石に上手くできないんじゃないか？」

美亜「うっ、確かにやりづらい・・・でもこのままいっちゃえ！」

またみんなで楽しくお出かけしようね！

そう言つて四人で仲良く笑い合つたのだつた。

Ruler Count, Zero

逢坂茜は、天災だ

やることなすことがハチャメチャな上に思いつきで行動する節もある。その上生徒会長という権力持ち。オンゲキの実力も高い。その為、奏坂学園の生徒達は茜のことをこう呼ぶのだ。

『奏坂の赤き天災』と・・・

楓「さて会長、弁明はありますか？」

茜「かつ楓！これは、違うんだ！そう、何かの間違いで・・・」

楓「会長、大変見苦しいです」

勿論そんな会長は学園にて野放しにされている訳ではない。副会長かつ参謀的な立ち位置の九條楓により基本的には暴走は食い止められている。さて、今日も締められて

楓「反省しましたか？」

茜「した！反省したから早く手を離してくれ！折れる！折れるから！」

楓「仕方ないですね……」

茜「やっと解放された……腕がもげるかと思ったぞ」

楓「会長は他人の予定も考えて物を言ってもらいたいものです。相手は教職ですからね」

茜「ふつ、教員たるもの生徒の無茶振りにも対応してこそ「会長？」……あついやつ冗談です」

楓「とにかく、この件は無しの方向でいかせてもらいますよ。どうせ会長の思いつきでしょう？」

茜「た、確かにそうだが……」

有栖「話は聞かせてもらった」

扉を開け放ちそう言ったのは茜、楓と同じく生徒会メンバーの一人、珠洲島有栖だ。何やら小さな体に見合わぬ大きな物を抱えている。

有栖「ん、これ、楓の木刀」

茜「えっ」

楓「有栖様、ありがとうございます。やはり会長を懲らしめるには木刀が無くてはなりませんからね」

茜「えっ」

楓「それでは会長、お覚悟を」

茜「ちよつ、楓、やめ……」

楓「冗談です」

有栖「ん、じよーだん」

茜「そ、そうか……肝が冷えたぞ……」

楓「そもそも私は会長を木刀で締めたことは一度もないですから」

茜「そ、そうだよな……」

楓「まあ、これからもないとは一言も言つてませんが」

茜「ひえっ」

有栖「ん、それはいいとして、さっきの話聞かして」

茜「ん？あ、ああ！そうだったな！ではこの逢坂茜様の作戦を伝えよう！」

茜「と、まあ端的に纏めるなら今の舞原先生は実質合法ロリ！シューターフェスのマスコットに起用すれば集客効果も抜群だろうというわけだ！」

有栖 「それ、去年の私の着ぐるみじゃだめ？」

茜 「確かに有栖の着ぐるみも十分マスコットとしての役割は果たすとは思いますが、実際面白そうだろうか？ 気にならないか？」

有栖 「ん、確かに。さんせー」

楓 「有栖様!?! そんな即断されては・・・」

有栖 「なら聞けばいい」

茜 「あいつは無理矢理巻き込もうとするといいいりアクションが取れるんだが・・・まあいい。連れてくるか」

有栖 「ん、ならこれを持っていくといい」

茜 「それは・・・おもちやの手錠か？」

有栖 「ん。それでかくほ」

茜 「ククク・・・確かに面白そうじゃないか。いいだろう。この逢坂茜様が直々に連行してやるうではないか！」

この後楓は念の為舞原先生にメールを送ろうとしたが、メールの送り方も分からないので諦めたんだとか

音「で、俺がこうやって連れてこられたわけか……というか早くこの手錠外してくれ」

茜「いや、貴様が私の作戦に乗るまでこの手錠は外さないぞ！ククク……ナーツハツハツハッハ!!!」

音「いや、流石に俺は教師だから見せ物になる気はないが」

茜「だがそうは言ってもこの手に持っている鍵は取れまい！」

音「だそうだ楓」

楓「会長。少々お遊びが過ぎるのではないですか？」

茜「えっ？楓？わ、私の味方じゃないのか？」

楓「いえ、そんな発言は一度もしていませんが」

茜「な、なんだと!?!だがこの鍵は渡さないだだだだだ!?!?!?!?分かった!分かったからやめろ!!!」

楓「うちの会長が迷惑を掛けてしまい申し訳ないです」

音「いやいや、怒っている訳ではないから大丈夫だ。ただ、出来れば事前に伝えてくれると助かったんだがな・・・」

茜「いや、それは伝えない方が「会長は少し黙っていて下さい」はい・・・」

音「しかしマスコットか・・・正直俺には務まらないと思うぞ?それでも言動が粗雑である自覚はある」

茜「いやいや、それこそギャップというものさ。合法ロリ系オレっ娘TS教師、いい響きではないか」

音「自分で言うのもなんだが属性てんこもり過ぎるだろ」

有栖「で、やるの?やらないの?」

音「うーん・・・一旦保留という選択肢はないのか?」

有栖「ない。シューターフェスは一ヶ月後」

音「ならそこそ余裕・・・ないな。看板とかチラシ印刷にも使われるなら尚更だな」
有栖「そゆこと。で、どう？」

音「・・・分かった。出ようじゃないか」

一ヶ月後、俺は軽率にしてしまったこの発言を色んな意味で公開することになる